山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第66集

A O KI KI TA S I T E
青木北遺跡

U ME NO KI S I T E
梅の木遺跡

県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書

1992・3

山梨県教育委員会
山梨県農務部

I　青木北遺跡

序

本書は県営圃場整備事業に伴い、1982年に山梨県北巨摩郡高根町地内で発掘致しました青木北遺跡と梅の木遺跡の調査報告書であります。この２遺跡は本県における大きな遺跡分布地域であります八ケ岳東南麓に位置し、この附近には縄文時代や平安時代の遺跡が数多く分布しております。

八ケ岳東南麓は平安時代に急速に開発が進められたと考えられており、幾多の集落が形成されました。青木北遺跡もこの中の１つで、遺跡は平安時代前期から中期にかけての集落跡であります。そのほぼ全面を発掘調査致しましたところ、竪穴式住居址12軒、掘立柱建物址５棟、土壙約10基などを検出し、土師器や須恵器の他縄文時代中期の遺物が出土致しました。この集落の中には、類例が少ない柱の礎石が据えられていた１軒の竪穴式住居址と棟持柱をもつ１棟の掘立柱建物址があって注目されます。また1983年に高根町教育委員会によって全面発掘されました東久保遺跡と隣接しており、これとの関係も興味深いものがあります。

一方、梅の木遺跡では、縄文時代中期の新道式や藤内式土器などを伴出した六角形と考えられる竪穴式住居址１軒を検出致しました。中期縄文時代の集落遺跡が濃密に分布する山麓の中にあって、遺物の散布が少ない台地で検出した遺構として、注目すべき点があります。以上本報告書が今後の研究や教育のために資することができましたら幸に存じます。

末筆ながら、発掘担当者としてご苦労いただいた現高根町教育委員会職員の雨宮正樹氏をはじめ、調査にご協力くださった関係各機関、炎暑の中で直接発掘調査に当たられました皆様、整理に参加されました方々や墨書土器筆跡の鑑定をいただきました山本潔氏に厚くお礼申しあげます。

1992年３月２日

山梨県埋蔵文化財センター
所長　磯　貝　正　義

凡　　例

1　原稿記述上の便宜のために、発掘地区の中央を貫通する道路を境として、東側をＡ区、西側をＢ区と言う。

2　図面には次の略記号を使用した。
ＳＢ―建物址（竪穴式住居址と掘立柱建物址を通し番号とした）　Ｐ―ピット　Ｓ―石　土―土器

3　水系レベルの数字は標高である。

4　遺物番号、遺構番号を整理段階で削除したものがあるので欠番がある。

5　遺物実測図と遺物写真図版の（　）内番号は遺構平面図に記載した遺物番号である。遺物写真図版の（　）の右の番号は遺物実測図の番号である。

例　　言

1　この発掘調査は文化庁の補助金と農林省の委託金を受けて実施した。

2　発掘調査及び整理参加者は次のとおりである。（順不同、敬称略）
故藤原芳郎、原藤初代、浅川君子、清水　東、清水茂子、下條松枝、八巻　栄、八巻知子、永関米子、清水路子、広瀬　恵、浅川一郎、八巻一也、清水　悟、中島　広、清水　薫、清水　潤、小林あさよ、日向たまの、宮沢まさみ、竜沢みち子、榎本　勝、木之瀬久司、渡辺征子(整理)、名取洋子(整理)

3　発掘調査および執筆は山梨県埋蔵文化財センター森和敏と、現在高根町教育委員会職員の雨宮正樹氏が、整理・編集は森が担当した。

4　墨書土器の墨書筆跡鑑定は筆跡鑑定人・行政書士山本潔氏（中巨摩郡田富町西花輪2468）があたり、執筆した。

5　出土した遺物、図面や写真等の記録類は県埋蔵文化財センターが保管している。

Ⅰ　青木北遺跡発掘調査報告書

目　　次

序
凡例
例言

第1章　発掘調査の動機と経過 …… 1
　第1節　動　　機 …… 1
　第2節　経　　過 …… 2

第2章　遺跡の位置と環境 …… 3
　第1節　位　　置 …… 3
　第2節　歴史的環境 …… 3
　第3節　地形および地質構成 …… 8

第3章　遺構と遺物 …… 9
　第1節　縄文時代の遺物 …… 9
　第2節　平安時代の遺構と遺物 …… 12
　　1　住居址と遺物 …… 13
　　2　墨書土器について …… 42
　　3　掘立柱建物址 …… 44
　　4　土壙・ピットと遺物 …… 48
　第3節　青木北遺跡と東久保遺跡の関連について …… 62
　第4節　そ　の　他 …… 62

第4章　結　　び …… 63

挿　図　目　次

第１図　青木北遺跡・梅の木遺跡位置図 …… 4
第２図　青木北遺跡付近平安時代遺跡分布図 …… 5
第３図　青木北遺跡・東久保遺跡全体図 …… 6
第４図　Ａ区南北地層図 …… 8
第５図　青木北遺跡全体図 …… 10
第６図　青木北遺跡出土縄文式土器拓影(1) …… 11
第７図　青木北遺跡出土縄文式土器拓影(2) …… 11
第８図　１号住居址平面図・側面図 …… 13
第９図　１号住居址出土遺物実測図 …… 14
第10図　２号住居址平面図・側面図 …… 15
第11図　２号住居址カマド平面図・側面図 …… 16
第12図　２号住居址出土遺物実測図 …… 16
第13図　３号住居址平面図・側面図 …… 17
第14図　３号住居址出土遺物実測図 …… 18
第15図　４・５号住居址平面図 …… 19
第16図　４号住居址平面図・側面図 …… 20
第17図　４号住居址側面図 …… 21
第18図　４号住居址カマド平面図・側面図・地層図 …… 21
第19図　４号住居址出土遺物実測図(1) …… 22
第20図　４号住居址出土遺物実測図(2) …… 23
第21図　４号住居址出土鉄器（鋤先）実測図 …… 24
第22図　５号住居址平面図 …… 25
第23図　５号住居址カマド平面図・側面図 …… 25
第24図　５号住居址出土遺物実測図 …… 26
第25図　６号住居址平面図・カマド地層図 …… 26
第26図　６号住居址カマド出土遺物実測図 …… 27
第27図　７号住居址平面図・側面図 …… 27
第28図　７号住居址側面図・地層図 …… 28
第29図　７号住居址カマド平面図・側面図 …… 28
第30図　７号住居址出土遺物実測図 …… 29
第31図　８・９号住居址平面図・側面図 …… 30
第32図　８号住居址カマド平面図・側面図 …… 31
第33図　８号住居址カマド出土遺物実測図 …… 31
第34図　９号住居址平面図・側面図 …… 31

第35図　9号住居址カマド平面図・側面図 …… 32
第36図　9号住居址出土遺物実測図 …… 32
第37図　13号住居址平面図・側面図 …… 33
第38図　13号住居址出土遺物実測図 …… 34
第39図　14号住居址平面図・側面図 …… 35
第40図　14号住居址カマド平面図・側面図 …… 35
第41図　14号住居址出土鉄器（鉄鏃）実測図 …… 35
第42図　14号住居址出土遺物実測図 …… 36
第43図　15号住居址平面図・側面図 …… 37
第44図　15号住居址カマド平面図・側面図 …… 37
第45図　15号住居址出土遺物実測図 …… 38
第46図　16号住居址平面図 …… 39
第47図　16号住居址カマド平面図・側面図 …… 40
第48図　16号住居址出土遺物実測図 …… 40
第49図　17号遺構出土遺物実測図 …… 41
第50図　10号・11号掘立柱建物址平面図・柱穴側面図 …… 46
第51図　D・E・F－4グリッド平面図（12号掘立柱建物址他）…… 49
第52図　D・E・F－5グリッド平面図（18号掘立柱建物址他）…… 50
第53図　C－2・3、B－2・3グリッド平面図（19号掘立柱建物址他）…… 52
第54図　1号土壙平面図・側面図 …… 54
第55図　14号土壙平面図・側面図 …… 54
第56図　15号土壙平面図・側面図 …… 54
第57図　15号土壙出土脇差実測図・側面図 …… 54
第58図　土壙及びピット平面図 …… 55
第59図　土壙・グリッド出土遺物実測図 …… 56

表　目　次

第1表　出土石器一覧表 …… 10
第2表　住居址柱穴数表 …… 12
第3表　青木北遺跡4号住居址礎石計測表 …… 24
第4表　青木北遺跡4号住居址礎石芯しん間距離計測表 …… 24
第5表　青木北遺跡4号住居址礎石標高表 …… 24
第6表　青木北遺跡出土墨書土器集計表 …… 42
第7表　東久保遺跡出土墨書土器集計表 …… 42
第8表　青木北遺跡出土遺物一覧表 …… 56

図 版 目 次

図版１　遺跡遠景、遺跡近景 …… 64
図版２　遺跡全景 …… 65
図版３　１号住居址、２号住居址 …… 66
図版４　３号住居址、４・５号住居址 …… 67
図版５　４号住居址礎石 …… 68
図版６　７号住居址、８号住居址 …… 69
図版７　９号住居址、13号住居址 …… 70
図版８　14号住居址、15号住居址 …… 71
図版９　16号住居址、10号掘立柱建物址 …… 72
図版10　11号掘立柱建物址、18号掘立柱建物址 …… 73
図版11　18・19・20号ピット …… 74
図版12　カマド(1) …… 75
図版13　カマド(2)・須恵器出土状態 …… 76
図版14　10号掘立柱建物址柱穴(1) …… 77
図版15　10号掘立柱建物址柱穴(2) …… 78
図版16　10・11号掘立柱建物址柱穴 …… 79
図版17　11号掘立柱建物址柱穴 …… 80
図版18　11号掘立柱建物址・土壙 …… 81
図版19　土壙(1) …… 82
図版20　土壙(2) …… 83
図版21　土壙(3)、発掘参加者 …… 84
図版22　住居址出土遺物(1) …… 85
図版23　住居址出土遺物(2) …… 86
図版24　住居址・ピット出土遺物 …… 87
図版25　墨書土器 …… 88
図版26　石器(1) …… 89
図版27　石器(2) …… 90

I 青 木 北 遺 跡

第1章　発掘調査の動機と経過

八ケ岳南麓には国指定史跡になっている金生遺跡や井戸尻遺跡をはじめとして、縄文時代や平安時代などの多くの遺跡群が本県と長野県にわたって広くあることは周知のとおりである。

本県側における遺跡や遺物の考古学的調査・研究は古くから行われており、1910年代から1930年代にかけて北巨摩教育会が行った調査活動は著名である。その後も地元や県内外の研究者や教育者によって調査され、高根町出身の浅川耕三氏等はその推進に大きな貢献をしている。1962年度（昭37）と1971・72年度（昭46・47）の2回にわたって文化庁では、全国遺跡地図―山梨県―を作成するために遺跡分布調査を行い（1981　文化庁文化財保護部発行）、これによって発見された新たな遺跡は以前の数倍であった。(註1)

高根町ではこの調査の終了時点で、遺跡総数は35ケ所となり、以前より飛躍的に多くなり、各遺跡の遺物分布範囲も地図上に示された。その後高根町では、圃場整備が施行される箇所については、これをもととしてさらに詳細な遺物分布調査や試掘調査がなされた。その結果、1981(昭56)～1983年(昭58)の間に発掘調査された11遺跡のうち、7遺跡(64%)はこの調査によって新たに発見された遺跡である。青木北遺跡も、またこれに隣接する東久保遺跡も新発見の遺跡であった。

註1）『山梨県遺跡地名表』山梨県教育委員会　1979年、『全国遺跡地図』―山梨県―　文化庁　1984年

第1節　動　　機

青木北遺跡の発掘調査は、八ケ岳山麓で広域的に農林水産省が推進している圃場整備事業の事前に行った調査の一つである。この遺跡がある地域の圃場整備は現水田を切り盛りして、一定の広さの水田に統一する基盤整備事業である。

八ケ岳東南麓において、本県の圃場整備事業に伴って発掘された遺跡は1978年度（昭53）に行われた大泉村谷戸遺跡を始めとし、1979年度（昭54）1件、1980年度（昭55）1件、1981年度（昭56）7件、1982年度（昭57）11件、1983年度（昭58）6件と増加している。(註1)このうち1980年度（昭55）に発掘調査された大泉村金生遺跡が国指定史跡になったことは特筆すべきであろう。このような状況下で、高根町地内では、1981年度（昭56）から10カ年計画で圃場整備の施行が開始され、初年度には青木遺跡と他2遺跡が、1982年度は青木北遺跡と梅の木遺跡、堤遺跡が発掘された。なお青木北遺跡の南（下）方に1981年度（昭57）に発掘された青木遺跡が、また北方に1982年度（昭58）に発掘された東久保遺跡がある。

本遺跡のある区域は1981年度に高根町教育委員会が簡単な分布調査と試掘調査を行って、遺跡があることが確認されていた。この結果に基づいて、1982年4月23日に県文化課、県耕地課、地元耕作者代表等の会議を開催し、発掘調査の日程等が決定された。発掘準備は5月6日から21日までの間に行った。

註1）『山梨県文化財保護要覧』山梨県教育委員会　1984年

第2節　経　　過

発掘調査期間は1982年（昭57）5月24日から同年8月30日までの約3ケ月間であった。

先ず57年度工事区の湿田を除いて全域に、巾1m長さ5～10mのトレンチを17ケ所設定し、5月24日から6月5日までの間に南から順に北に向って試掘を行った。当発掘を行った箇所以外は表土下30cmくらいで氾濫層になったり、浸透水が出てくる場所が多く遺構、遺物とも検出出来なかった。

当発掘区では密度はうすいながらも、縄文時代の遺物と平安時代の遺物・遺構がトレンチで検出された。1981年度行った予備調査ではB区からのみ遺構が検出されたが、今回の試掘ではA区からも検出されたので、発掘予定範囲を拡大して調査を行った。

6月7日から本発掘を開始した。

本発掘は前半にA区（道の東）を、後半にB区（道の西）を重点的に行った。発掘区約2,500㎡（約50m×約50m）に8m方形のグリッドを設定し、これをさらに4m方形グリッドに細分し、遺構の検出状況にあわせて、チドリか1つおきのチドリで掘り進めた。

A区ではグリッドの試掘によって、遺構の包含層は北半分では非常に浅く、表土（耕作土）の直下にあり、南半分では深く、最南端では120cmまで達することが判明したので、これに従って、全面的に遺構包含層まで覆土を除去した。6月21日には平安時代の住居址約4軒、同掘立柱建物址1軒と土壙数基を検出し、7月3日には4号住居址で柱の礎石を発見した。

B区では中旬に入ってグリッドで試掘を行い、全面的に表土（耕作土）下の地山を切り込んで遺構が構築されていることがわかったので、7月12日から、バックホーとブルドーザーで表土を除去し、ここでA区とB区の全面調査に移った。7月下旬には数基の住居址、土壙等を完掘し、発掘が半道中となった。

8月1日に台風が襲来し、若干の被害を蒙ったが、発掘は続けることが出来た。

8月に入ってからは各遺構の精査を、実測・写真撮影等の記録をとりながら行った。また8月10日には中世末か江戸時代初期頃の小刀を埋納した15号土壙を、発掘も終了真近になった19日には15号住居址を検出し、続けてこの精査を行い、8月30日に発掘調査を終了した。

B区およびA区の北半分では、遺構が地山を掘り込んでいたので検出しやすかったが（したがって遺構の上部を整地の際や農耕で削られた可能性がある）、A区南半分では、黒色土中に遺構包含層があったため、非常に遺構を検出し難く、確認したものの他にも住居址らしい所も2～3カ所あった。

なお、この青木北遺跡の発掘と並行して、6月4日から22日まで、本町箕輪にある梅の木遺跡も森と雨宮が担当して発掘調査した。

整理は調査終了後少しずつ進めたが、本格的な整理は平成2年度に行った。発掘担当者の雨宮正樹氏は発掘後、高根町教育委員会の職員に採用されたため、森が主に整理と原稿の執筆にあたった。

第2章　遺跡の位置と環境

第1節　位　　置

青木北遺跡は北巨摩郡高根町村山北割字西横森小字青木832番地～835番地を中心として広がる。遺跡の位置は、東経138度25分、北緯35度50分にある。

この遺跡は八ケ岳東南麓のほぼ中腹にあり、標高739mに位置し、高根町役場から東へ約1,000m、同町立東小学校から北（上）へ約300mで、県道万年橋―長坂線の北にある。

八ケ岳は最高峰の赤岳（2,899m）を中心に、標高2,000m以上の火山の連山で、その峰の一部は本県と長野県境にあり、両県にまたがって広大な裾野が広がっている。青木北遺跡はその南々東の裾部にあって、赤岳山頂からは約15,000mの位置にある。

第2節　歴史的環境

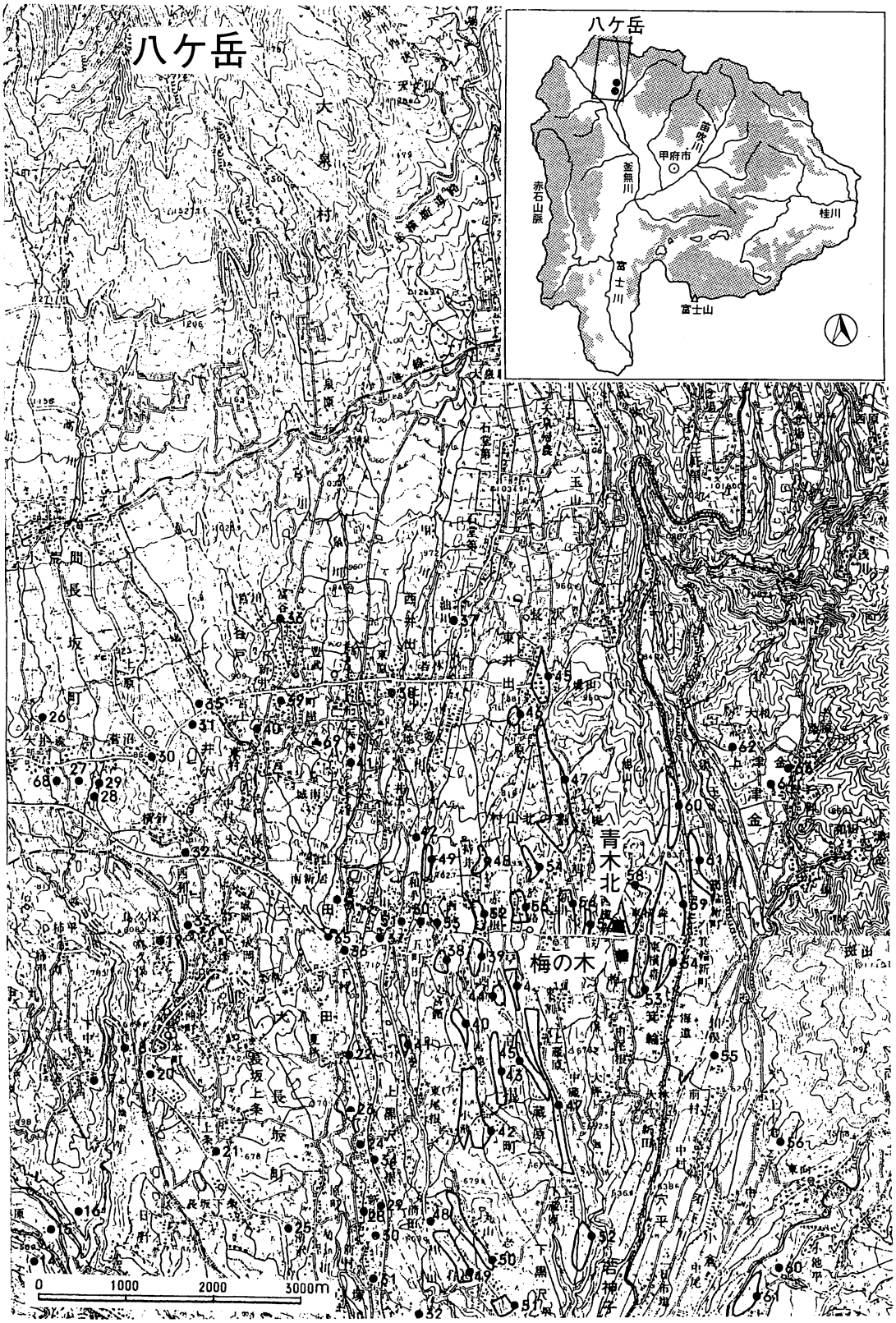
遺跡名は小字地名の青木をとり、1981年度に高根町教育委員会で発掘した青木遺跡（縄文時代後期　配石遺構）の北側にあるので、「青木北」と命名した。

高根町の遺跡分布は大きく川俣川より上の八ケ岳中腹の清里地区と、その下の裾部とに分けることができる。青木北遺跡は裾部にある遺跡群中の上（北）部にある。町内遺跡分布調査報告書（高根町教育委員会　1987年度）によると、裾部の遺跡は109箇所あり、このうち平安時代の遺跡は59％の64箇所であって、この多くは平安時代後半の遺跡である。

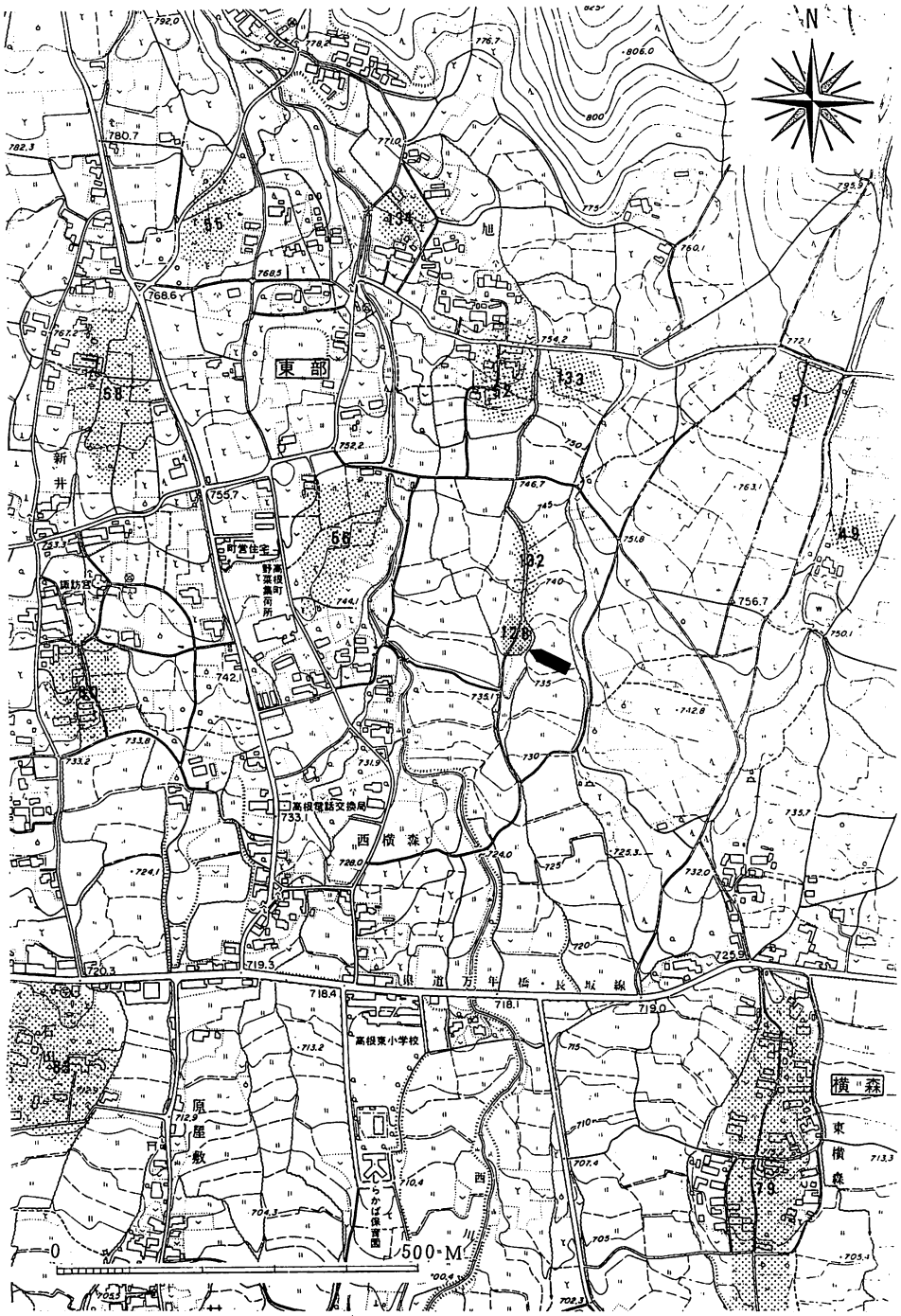
平安時代の遺跡の分布状況は、標高約720m付近を横に走る県道万年橋―長坂線を中心線にして、巾2,000m～2,500mの間に帯状に集中していて、この上下にも分布しているが少ない。本遺跡を含むこの地域が平安時代に盛んに開発されたことがうかがえる。高根町の東端を流れる須玉川を挟んで東は茅ケ岳山麓で、西は長坂町にある台地状地形となっているが、やはり遺跡は少ない。

本遺跡の上で、1983年（昭58）に東久保遺跡[註1]が高根町教育委員会によって発掘された。この遺跡は第3図の全体図に示したように、本遺跡と20mほど離れているが、東久保遺跡の発掘担当者雨宮正樹氏によると、両遺跡の間は圃場整備の造成工事で破壊されたのかもしれないとのことである。したがって、青木北遺跡と東久保遺跡は連続していた可能性があるが、同一集落であるか否かは疑問である。東久保遺跡は後述のように集落が上下の2つに分かれていて、本遺跡に近い下の集落では平安時代後期の竪穴式住居址群、掘立柱建物址群や土壙等が検出されている。この竪穴式住居址の中には青木北遺跡よりも時期がやや遅れるものもあるが、ほとんど同時期（9世紀後半～10世紀後半）のものである。70m～80m離れた上の集落には7基の竪穴式住居址が検出され、青木北遺跡と同時期のものもある。ただ後述するように土師器に書かれた墨書の内容が異なる。

註1）『東久保遺跡』　高根町教育委員会　雨宮正樹　1984. 3



第１図　青木北遺跡・梅の木遺跡位置図（『全国遺跡地図』より）



（山梨県高根町『町内遺跡分布調査報告書』1987より）

青木北遺跡　平安時代遺跡

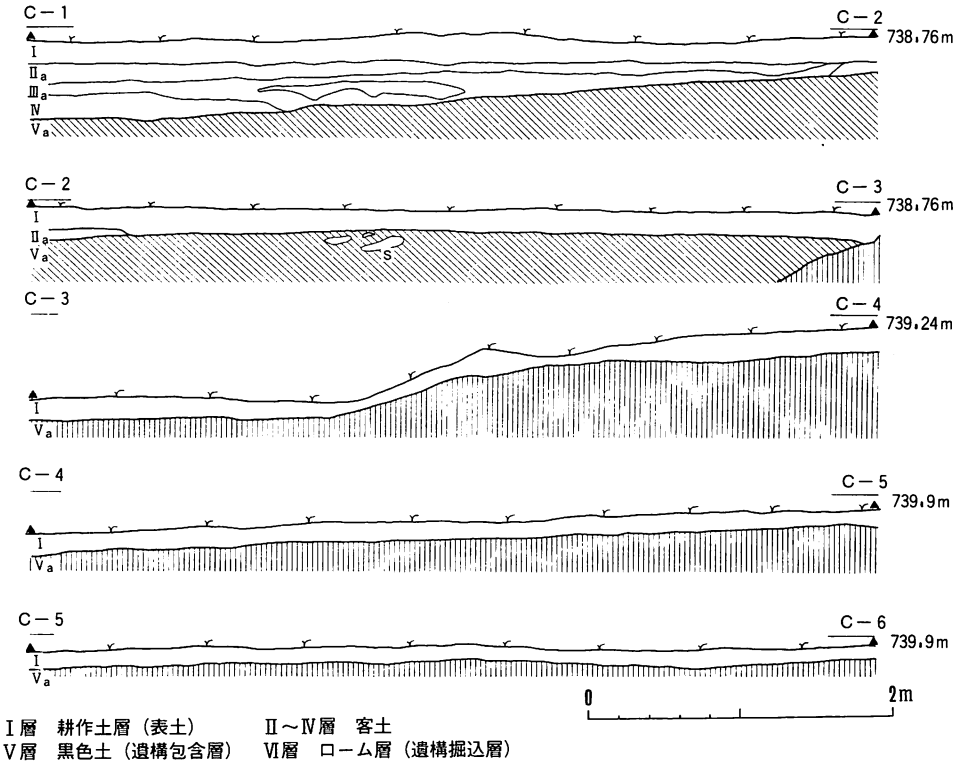
128	青木北遺跡	58	新井Ａ遺跡
132	東久保遺跡	60	新井Ｂ遺跡
49	矢捨遺跡	79	横森．横森前遺跡
51	社口．古城跡遺跡	83	石田前遺跡
52	旭東久保Ｂ遺跡	133	旭東久保遺跡
55	旭西久保Ａ遺跡	134	川又坂上遺跡
56	旭西久保Ｂ遺跡		

第２図　青木北遺跡付近平安時代遺跡分布図

第３図　青木北遺跡・東久保遺跡全体図（『東久保遺跡』より全体図を転写）

第3節　地形及び地質構成

地形　八ケ岳南麓にはいくつかの開折谷が大小の河川によって放射状に形成されている。本遺跡はこれ等の開折谷の一支谷中にあり、東には東横森集落がある台地が、西には西横森集落がある台地がそれぞれ南北に連なっている。青木北遺跡がある支谷と、この両台地との比高差は5～6ｍあり、支谷の幅は約250ｍである。この支谷は上方では1㎞北にある旭山山麓に続き、下方では南東にやや曲りながら雲雀沢川となり、後に報告を掲載した梅の木遺跡の西を通って、深い谷となって山麓の裾部で須玉川支流の西川と合流する。台地に挟まれたこれらの開折谷は八ケ岳中腹から20数㎞にわたって続き、末端は2大河川の須玉川と釜無川によって東西を浸食された比高30ｍ～100ｍの急崖となっている。



第4図　A区南北地層図

青木北遺跡B区は東西20ｍ、南北50ｍくらいの舌状の微高地になっている。東はA区との比高差が1ｍくらいあり、さらにその東は徐々に低くなっている。西は1.5ｍくらいの段となり、さらに西は徐々に低くなって、砂礫層がある旧河床と考えられる低地に続く。南は2ｍくらい

低く、1部は深い沼状になっている。地元の人の話によると、沼の西から南にかけて4～5mの小高い丘がかつてはあったというが、今は土を取られて平になっている。このような微高地は岩盤の上にハードロームのような固い層があったために浸食されずに残った土地であろうと思われる。このように、この遺跡がある谷は微地形的には複雑な起伏があるため、不整形な大小の水田が形成されている。

地質構成　A区の北半分とB区は高さがやや同じである。地質は表土（耕作土）が20～30cmあり、ここのその下はローム層で、遺構はローム層を掘り込んでいる。したがって遺構の掘込面は攪乱されていたと考えられる。

A区の中央から南半分にかけては遺構包含層が徐々に下り、南端ではB区より80～100cm低くなる。ここの遺構包含層は黒色腐食土層であったため、極めて遺構の検出が難かしかった。遺物包含層の上層は全て客土で覆われていた。

第3章　遺　構　と　遺　物

縄文時代前期末から中期末の土器片や石器が相当量出土しているが、該期の遺構は検出されなかった。平安時代では後期の竪穴式住居址、掘立柱建物址や土壙が、また中世末か近世初期の土壙も検出された。

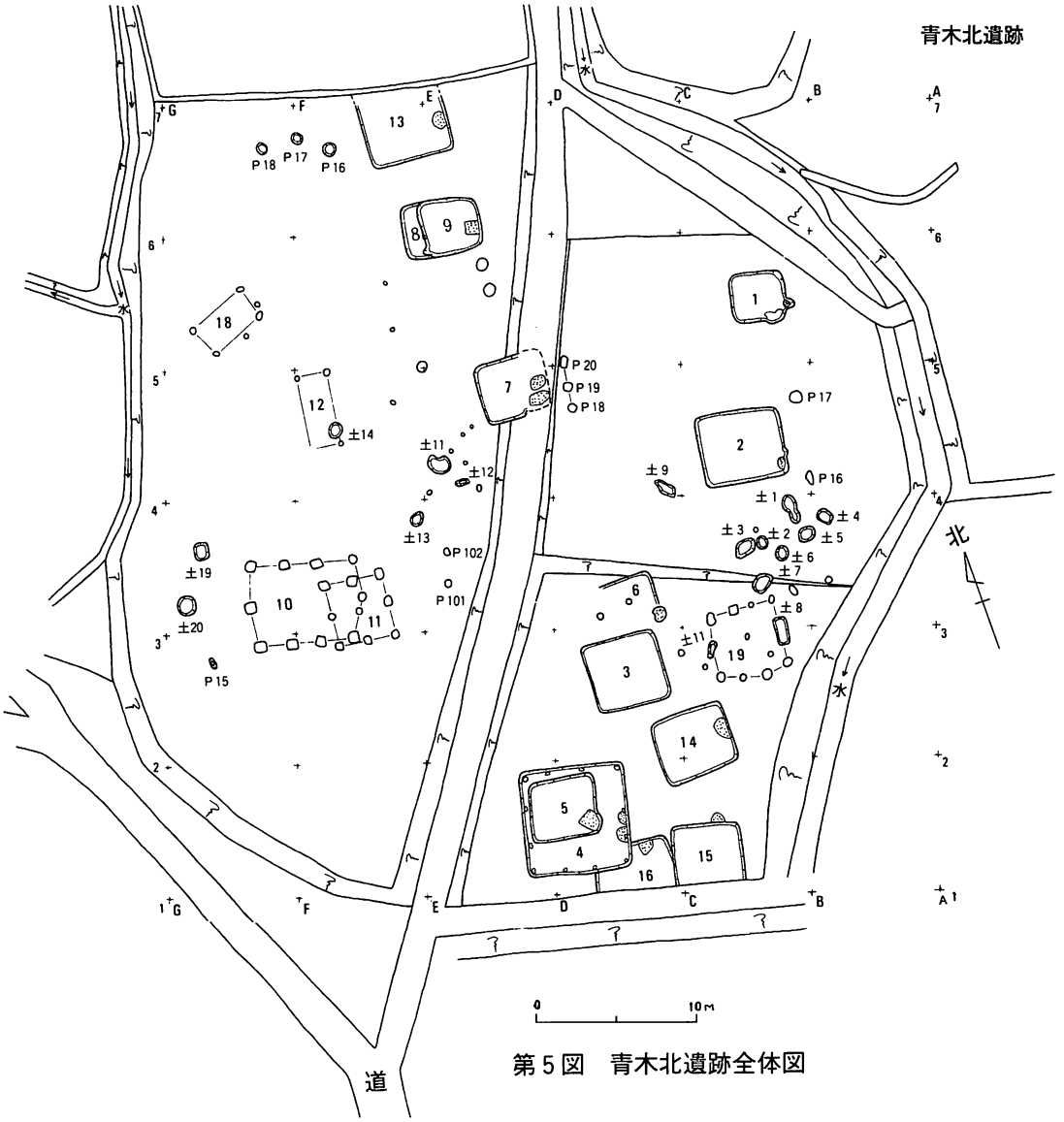
第1節　縄文時代の遺物

土器は中期中葉から後半までのものがほとんどを占め、少し前期後半と晩期前半のものがある。また石器は磨石が多く砧石や石器の剥片もあるが石斧類は4点しかない。

第6図1～4までは前期後半の諸磯式か十三菩提式である。5～11は中期中葉の藤内式か井戸尻式で、7は有孔鍔付土器の鍔部である。8は五領ケ台式、第7図の17は中期終末で、5、8、11を除く他のものは曽利式であろう。石器は30点以上が出土していて、この内19点は住居址の、3点はピットや土壙の覆土や床面近くから検出された。3号住居址からは砧石1個、たたき石（磨石）1個、凹石（たたき石）1個、石斧1個が、4号住居址からはたたき石（磨石）2個、凹石（たたき石）1個、石斧1個、黒曜石剥片多数が、15号住居址からはたたき石（凹石）3個、たたき石（磨石）2個（この内1個はカマド内出土）、大型の砧石1個（カマド内出土）が、その他7号住居址の床面直上から研磨された台状の石が出土している。黒曜石の剥片も伴出しているので、住居址に伴う遺物ではなく、この遺跡の南方300mにある縄文時代中・後期の青木遺跡[註1]に関連する遺物である可能性もあるが、それにしても多すぎる感じはある。全石器のうちたたき石（凹石）や丸石など研磨された石器が全体の80%以上を占めていて、他に石棒の破片（径約15cm）や黒曜石の剥片がグリッドから出土している。

以上のように、遺構に伴うかどうか判別ができないので、石器の図版は土器とは別に掲げることにした。

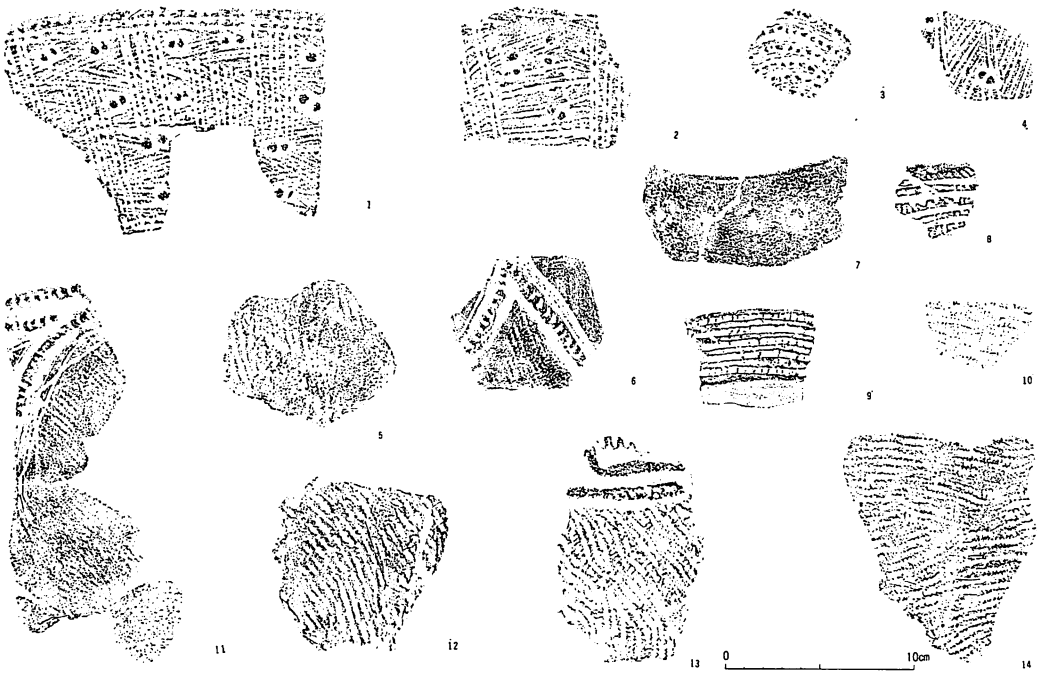
註1）『青木遺跡』調査速報　高根町教育委員会　雨宮正樹　1981年



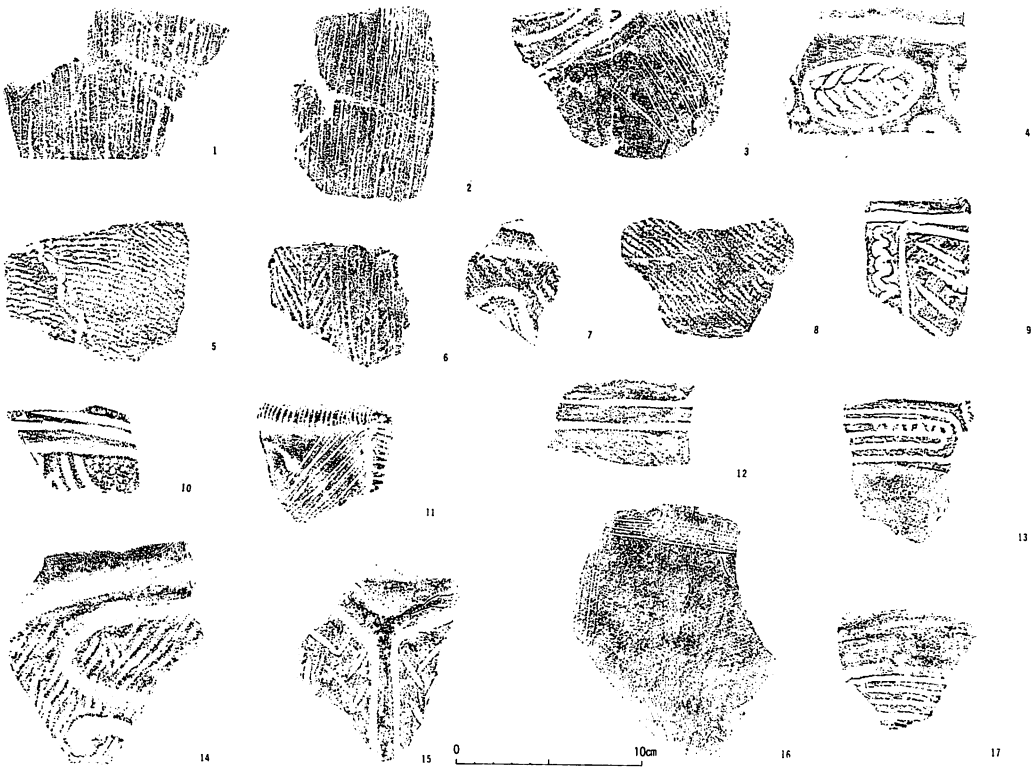
第５図　青木北遺跡全体図

出土遺構	石器名	数	出土層	出土遺構	石器名	数	出土層
SB1	不定	2	土壙覆土	SB7	研磨台状石	1	床直
SB3	砧石（大）	1	床直	SB15	たたき(凹)石	3	覆土
	たたき(磨)石	1	覆土		たたき石	1	〃
	石斧	1	床直		たたき(磨)石	1	カマドP13
	凹石	1	覆土		砧石	1	カマド
SB4	石斧	1	〃	SB17	たたき(磨)石	1	覆土
	たたき(凹)石	1	〃	P11	たたき(凹)石	1	〃
	黒曜石剥片	多数	〃	P45	たたき(凹)石	1	〃
	たたき(磨)石	2	〃	土壙17	砧石	1	〃
SB5	たたき(凹)石	1	〃	計		22	（除黒曜石）

第１表　出土石器一覧表



第６図　青木北遺跡出土縄文式土器拓影(1)



第７図　青木北遺跡出土縄文式土器拓影(2)

第2節　平安時代の遺構と遺物

青木北遺跡で検出した主な遺構は竪穴式住居址12基、掘立柱建物址5棟と土壙群である。これらの時期は本県の土師器編年の第Ⅸ、Ⅹ期（10世紀後半）と第Ⅺ、第Ⅻ期（11世紀前半）に比定される。(註1) 遺物は土師器が多く、灰釉陶器と須恵器が少し出土している。土師器の坏は内面黒色のものが多く、また坏に書かれた墨書の字は「上」と「下」が多いことは注目される。

本遺跡の北（上）に続く東久保遺跡では住居址30基、掘立柱建物址7基以上と土壙群が検出された。出土遺物は本遺跡のものとほぼ時期は同じであるものの、微妙に異なる点がみられ、土師器の坏の口縁部が隆玉縁のものがやや多く、また墨書の字は「上」「下」は少なく、「丈」「吉」「家」など種々な字がある。本遺跡出土の坏より隆玉縁口縁が多いことは4分の1四半期くらい後になることを意味するし、また東久保遺跡における住居址のカマドが東南隅に偏向する傾向がみられるので、青木北遺跡から東久保遺跡へと徐々に移動したのかも知れない。そうだとすれば集落の家屋数は30軒から35軒くらいだったであろうか。

青木北遺跡の住居址を細かくみれば、柱穴のある住居址が3基（25%）、柱の礎石のあるものが1基で、他の8基は柱穴がない。柱の礎石のある住居址は本県では極めて異例であるが、

遺跡名	青木北			東久保								合計
住居址番号	2	7	13	5	15	19	20	22	24	28	30	11
柱穴数	7？	9	3	4	5	1	4	12？	4	3	6？	
住居址総数	12			30								42

第2表　住居址柱穴数表

但、13号住居址は完掘ではない。7号住居址は一部が攪乱されている。

長野県では数軒発見されている。東久保遺跡では柱穴のある住居址は8基（26%）である。カマドは両遺跡ともほとんど東側に付き、時期が遅くなる程南東隅に寄ることは一般的である。掘立柱建物址では青木北遺跡の10号址は柱穴が正確にていねいに掘ってあり、棟持柱穴と思われる2基の穴がある。これは倉庫以外の重要な建物（神社の建物等）であろうか。

なお東久保遺跡では、古式の遺物に加えて、やや新しい遺物が若干出土しており、古式の遺物は北側で多く出土している。

また、図面上の道は発掘時まで使用されており、この道と重複しているのは青木北遺跡の7号住居址と東久保遺跡の7号住居址だけで、他は道に沿って築かれている。東久保遺跡の5号住居址と28号住居址は道を避けているようにみえるので、当時の道をそのまま現在まで使用していたのかもしれない。

以上のように、ほぼ全体の集落構成が把握できたことは幸であった。

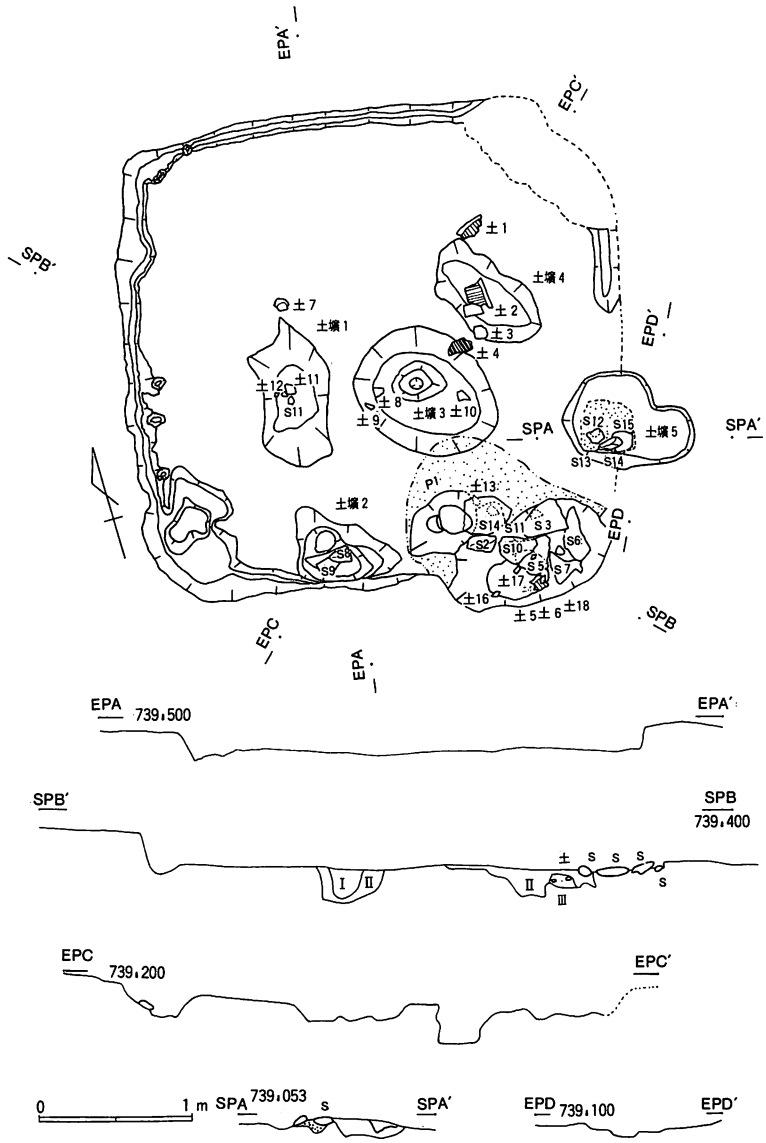
註1）『奈良・平安時代の諸問題』—甲斐地域—　坂本美夫他2　1983

1　住居址と遺物

竪穴式住居址は12基あり、その内１基は本県では異例の柱礎石のある住居址である。これらの住居址から出土した遺物は９世紀～10世紀の間に比定される。

なお３号・14号住居址付近には、床面らしい所や焼土があり、遺物の出土状況等からも他に２～３基の住居址があったようであったが、削平されていて、検出することができなかった。

１号住居址　Ａ区の北端にある。表土直下のハードローム層を掘り込んでいる。表土は15cm～20cmと薄いので、耕作によって、住居址の上部は削平されたと考えられる。住居址の深さは約５cm～20cmである。本遺跡の中で、最小で一辺約3.5mの方形である。床面には直径５cm、深さ５cmくらいの小ピットが一面にあったが、住居址に伴うのかどうかは定かでない。しかし住居址の外側では検出できなかったので、住居址に伴う遺構であろうか。壁の内側には、南東の一部を除き溝が掘られていて、北側には溝に沿って柱穴らしい小ピットが５基ある。カマドは南東隅と東側の南寄りに設けられているが、どちらが先行するかは不明である。住居址内にある土壙は浅いので、耕作等によって掘られたのかもしれない。

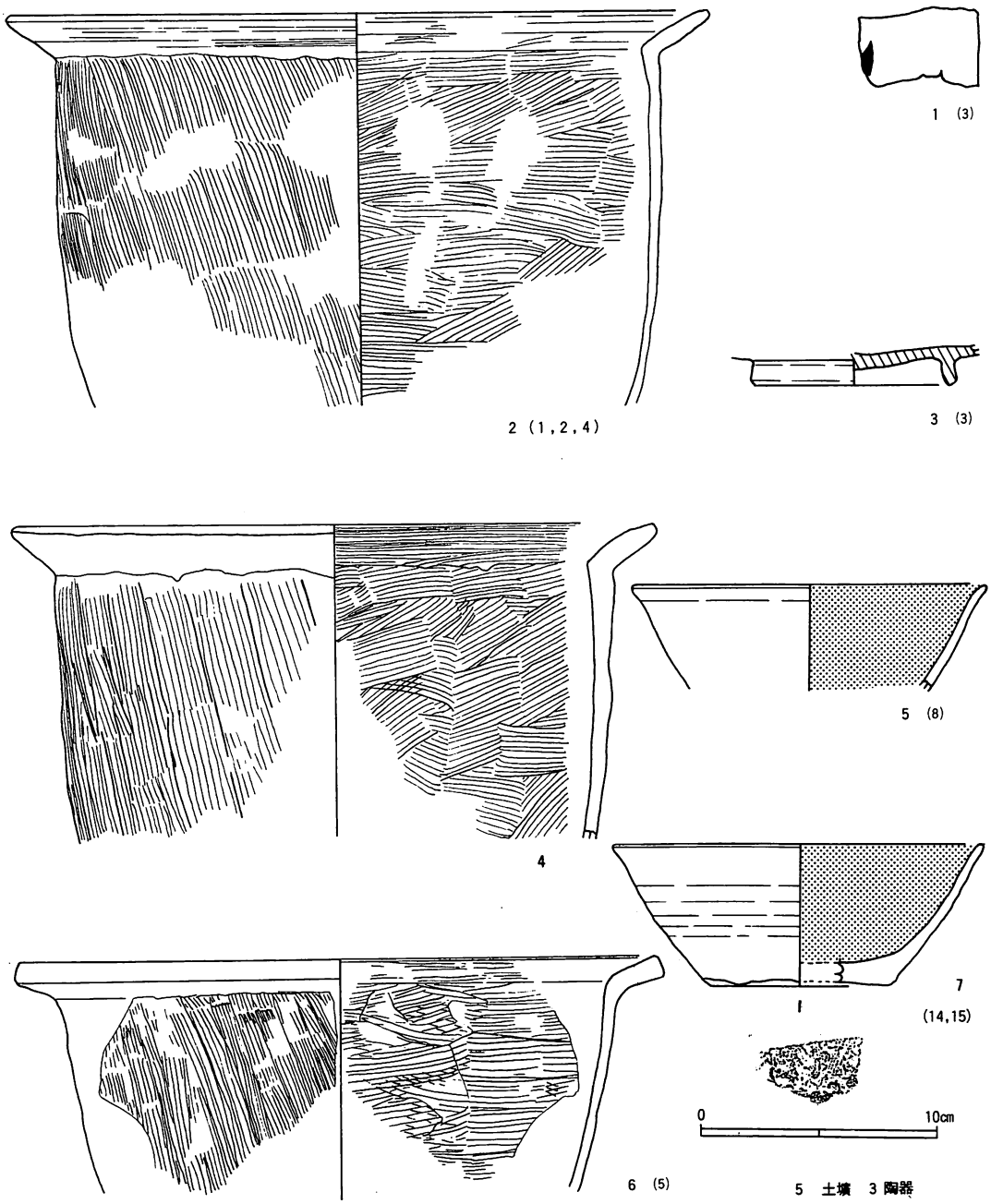


第８図　１号住居址平面図・側面図（$\frac{1}{50}$）

Ⅰ層　茶褐色土（ロームブロック焼土粒を含む）
Ⅱ層　茶褐色土（ローム粒を含む）
Ⅲ層　黒黄色土（ローム粒を含む）

遺物は甕、坏、灰釉陶器と墨書土器などが出土した。その時期は９世紀後半から10世紀前半

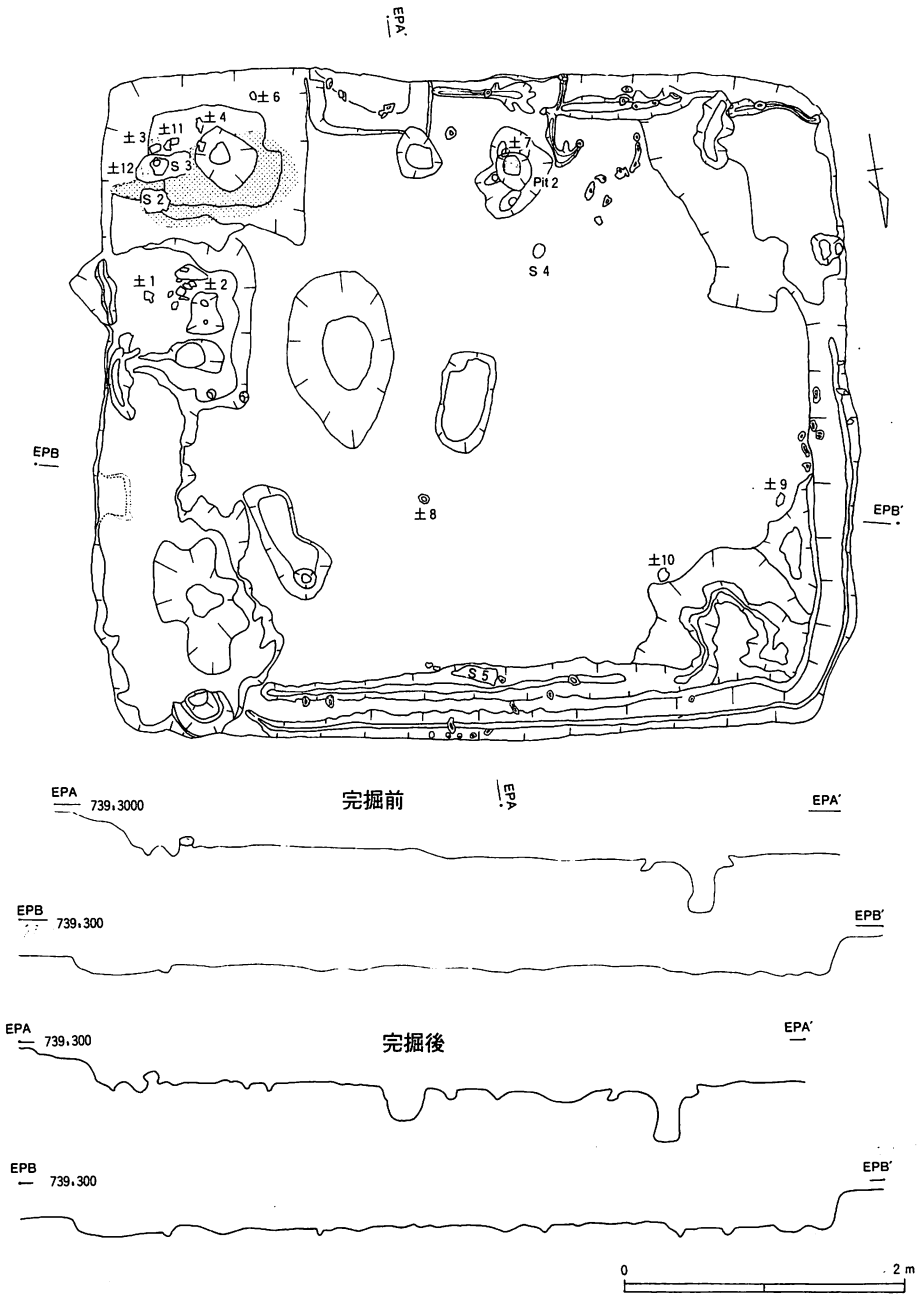
に比定できる。



第9図　1号住居址出土遺物実測図（⅓）　( )内は平面図の遺物番号

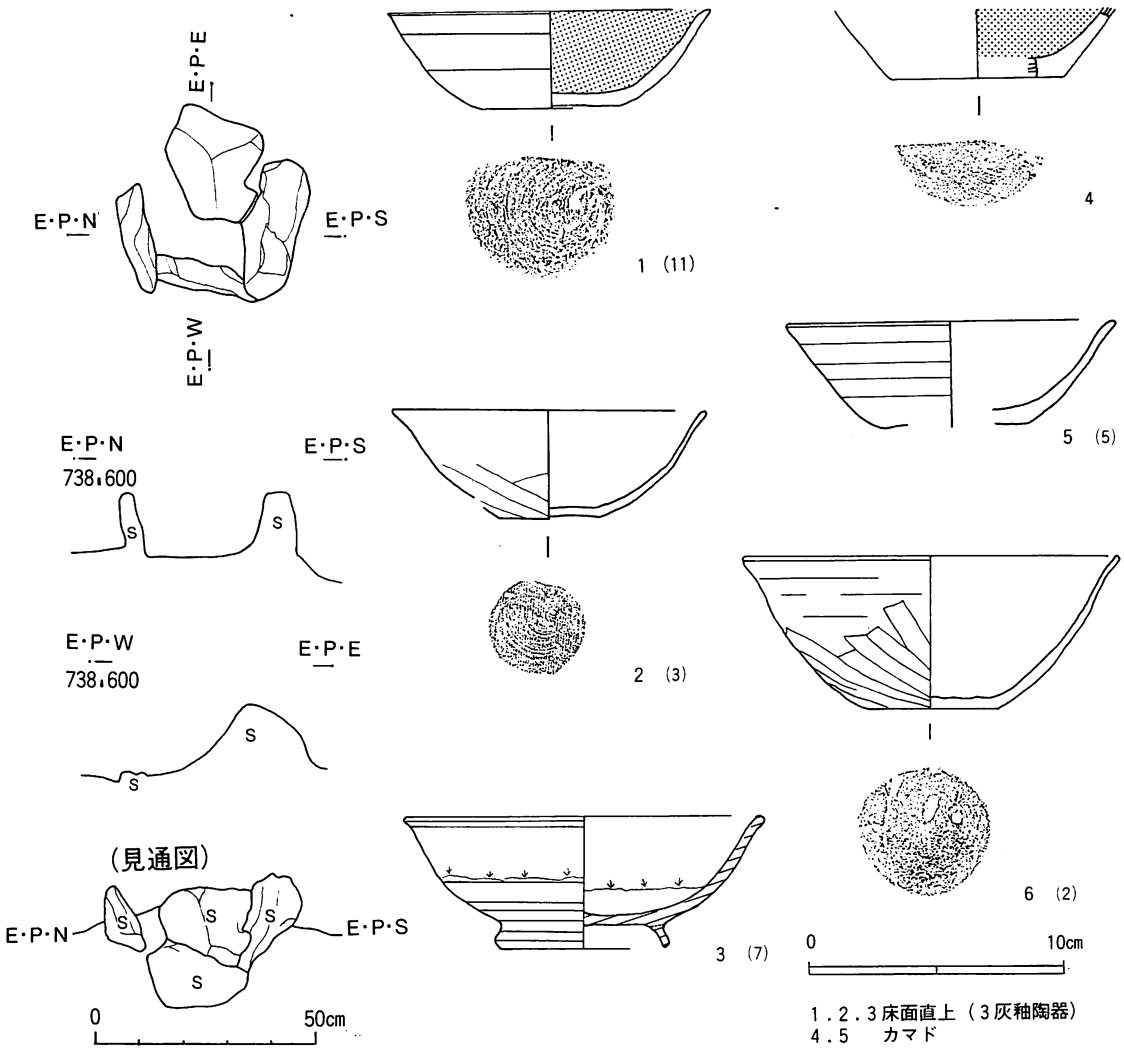
2号住居址　A区中央部にある。表土直下のハードローム層を掘り込んでいて、表土は15cm～20cmと薄いので、耕作によって住居址の上部は削平されたと考えられる。深さは2cm～20cmである。本遺跡では大きい部類で、やや東西が長く、約5.5mである。床面は硬く、小ピットが

集中的に数箇所あるが、住居址に伴うかどうか定かではない。壁の内側には東側を除き溝が掘られている。柱穴と思われるピットが四隅と南、東などにある。カマドは南東隅にあり、その芯石が残存していた。



第10図　2号住居址平面図・側面図（$\frac{1}{50}$）

遺物は土師器と灰釉陶器の坏が出土した。この内No. 2 (3)は玉緑を呈し、その他のものよりやや時期が遅れるが、全体としては10世紀前半に比定できるであろうか。

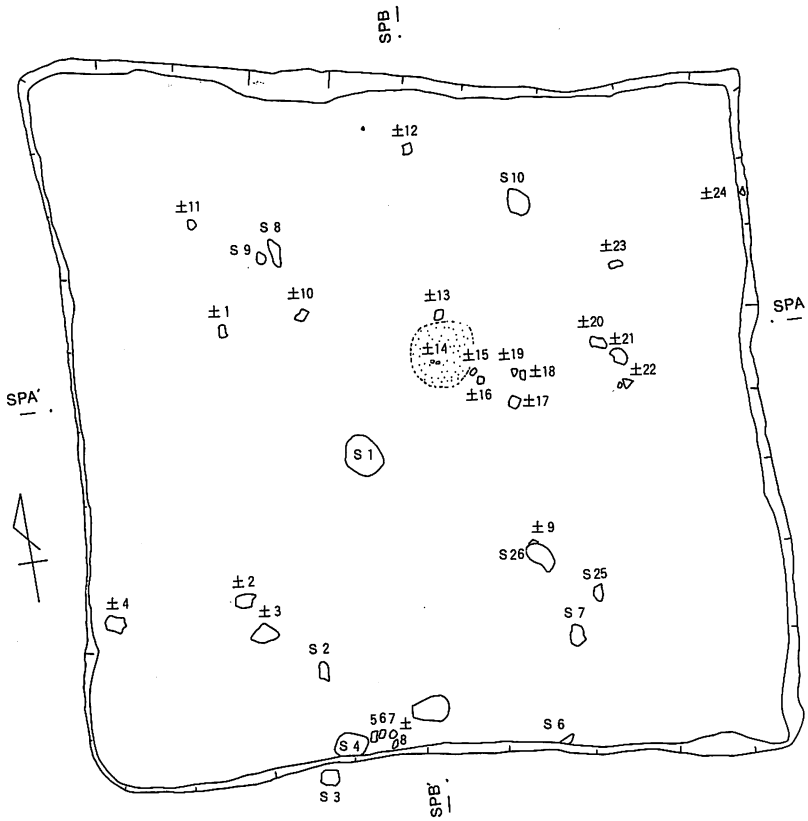


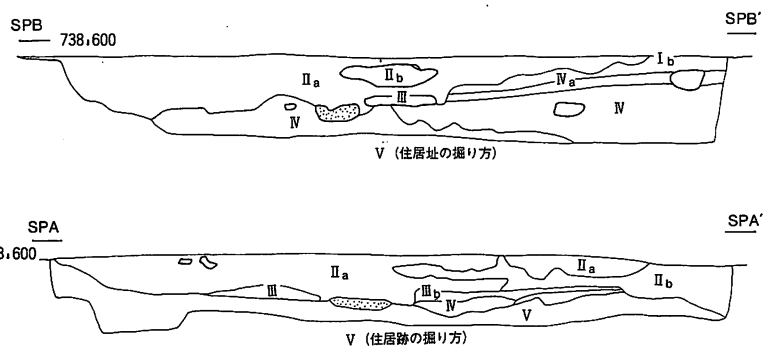
第11図　2号住居址カマド
平面図・側面図($\frac{1}{25}$)

1、2、3　床面直上（3　灰釉陶器）　4、5　カマド
第12図　2号住居址出土遺物実測図（⅓）

3号住居址　A区南側にある。不整形な方形で、柱穴はなく、床面は比較的しっかりしている。住居には掘り方があり、これを埋めて貼床を構築している。カマドはなく、住居址中央北寄りの少し掘り込んだ所に焼土塊があるから、これを炉としたものであろう。セクションで見ると、廃絶後南東隅から土が流れ込んで埋没したようである。

遺物は甕と坏が出土し、これらはやや古手である。「上」や「下」と書かれた墨書土器が多い。また床面直上より砂岩製の砧石が出土した。遺物の時期は10世紀後半に比定できる。





Ⅰ層　耕作土（Ⅱ層より50cm上）

Ⅱa層　黒色粘質土層

Ⅱb層　黒色粘質土層（ローム粒を含む）

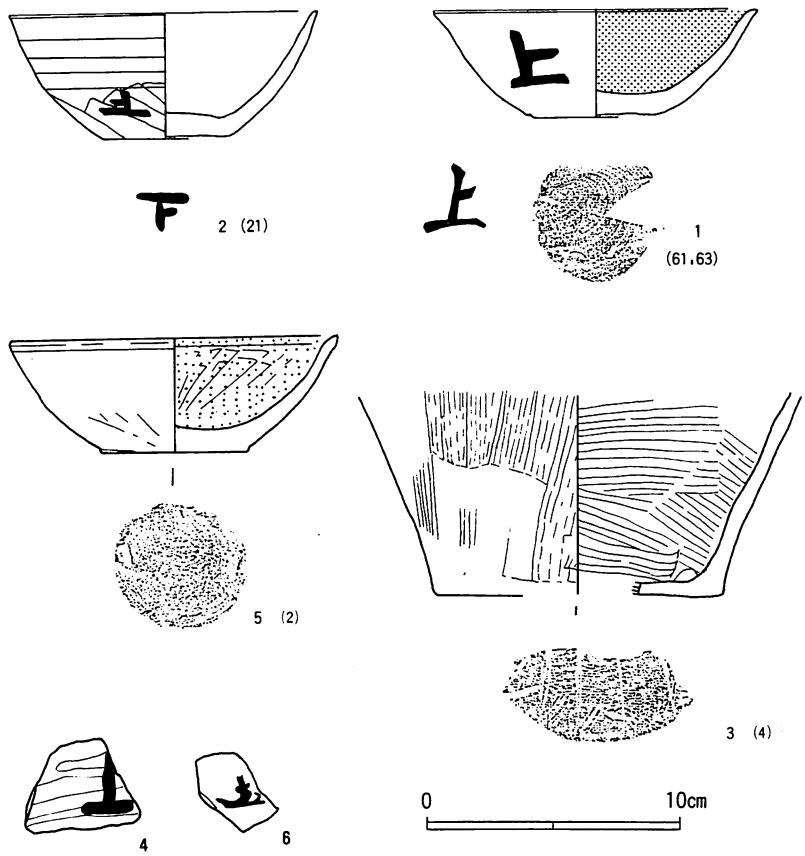
Ⅲa層　黒褐色粘質土層
Ⅲb層　黒褐色粘質土層（ローム粒を含む）　} 非常にかたい貼り床

Ⅳ層　黒褐色粘質土層

Ⅴ層　黒褐色粘質土層（ロームの２次堆積）

0　2 m

第13図　３号住居址平面図・側面図（$\frac{1}{50}$）

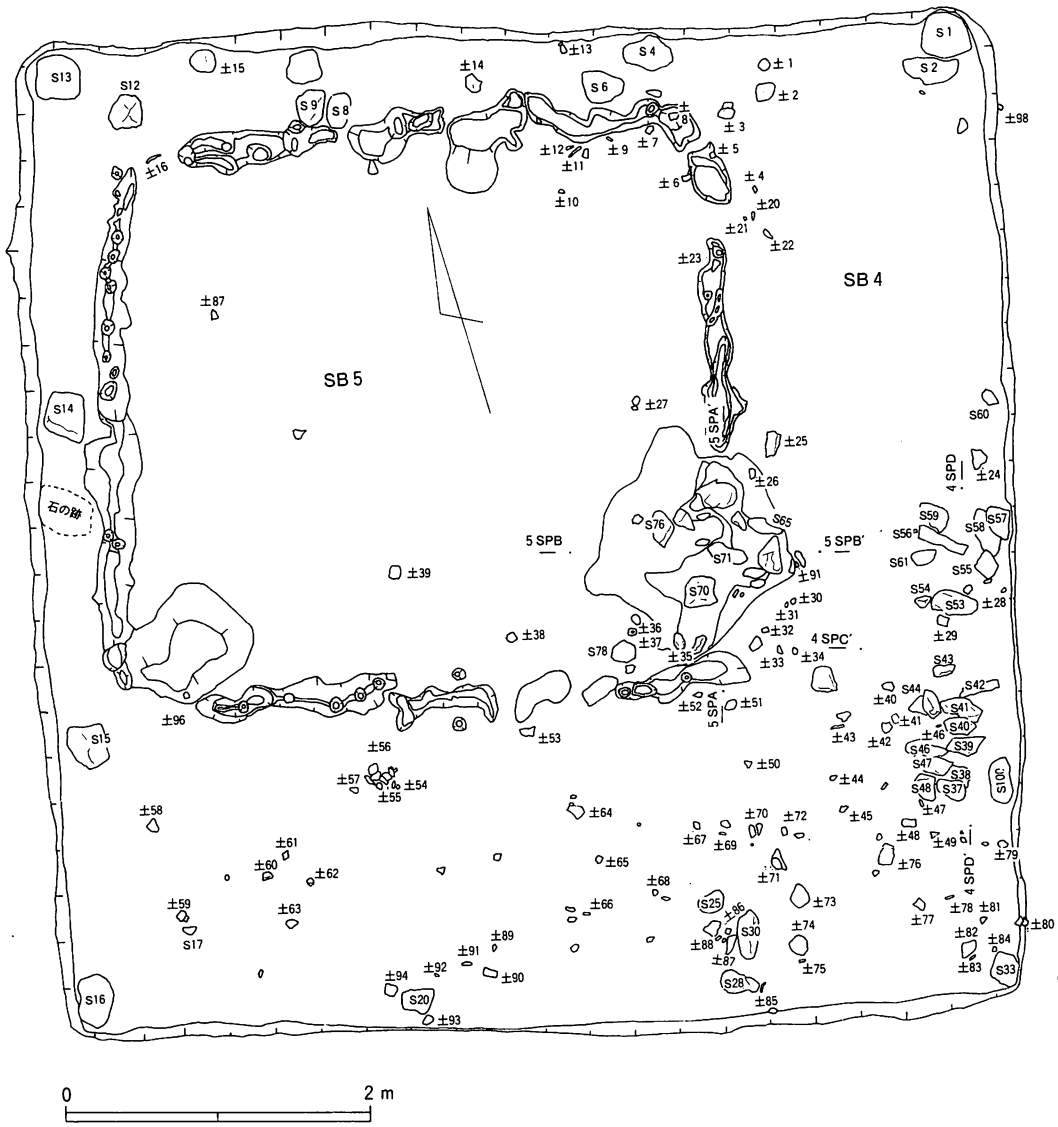


第14図　3号住居址出土遺物実測図（⅓）

4号住居址　A区の南端にあり、5号住居址と重複している。重複関係は遺構が黒色土中にあったため見分け難く、明らかに出来なかったが、床面の状況から推定すると4号より5号が先に構築されたようである。

この住居址は本遺跡中最大でほぼ正方形を呈し、一辺が約6.5*m*である。深さは30*cm*くらいであるが、周囲の状況から推察すると上部を少し削られた可能性もある。四囲の壁に沿って柱の礎石がある。ただ東側には1箇欠けているが、これは前年に行った試掘の際除去したようである。また北側には2列並んでいるが、内側の石はやや小さく粗末である。この2列の礎石が同時に使用されたかどうかはわからない。西側中心付近にはもう1つ石が除去された痕跡があるが、礎石であったかどうかは不明である。礎石は径30*cm*前後の比較的しっかりした石を埋めて使用していて、上面は平なものが多いが、平でないものも若干ある。礎石上面の高さはおおむね同じくらいであるが、2～3個違う高さのものもある。礎石の芯芯間距離は別表のとおりで、平均178*cm*である。床面は全体が軟弱で、特に周壁付近は軟いが、中央はやや硬い。カマドは東側に2カ所あり、両者とも石を芯に使っている。両者が同時に使用されていたかどうかは不明であるが、袖石の破壊された状況をみると、同時に使用されていた可能性もある。

遺物は10世紀前半から中葉に比定される土師器の甕、坏、皿と鋤先1、鉄滓、鉄製品等が出

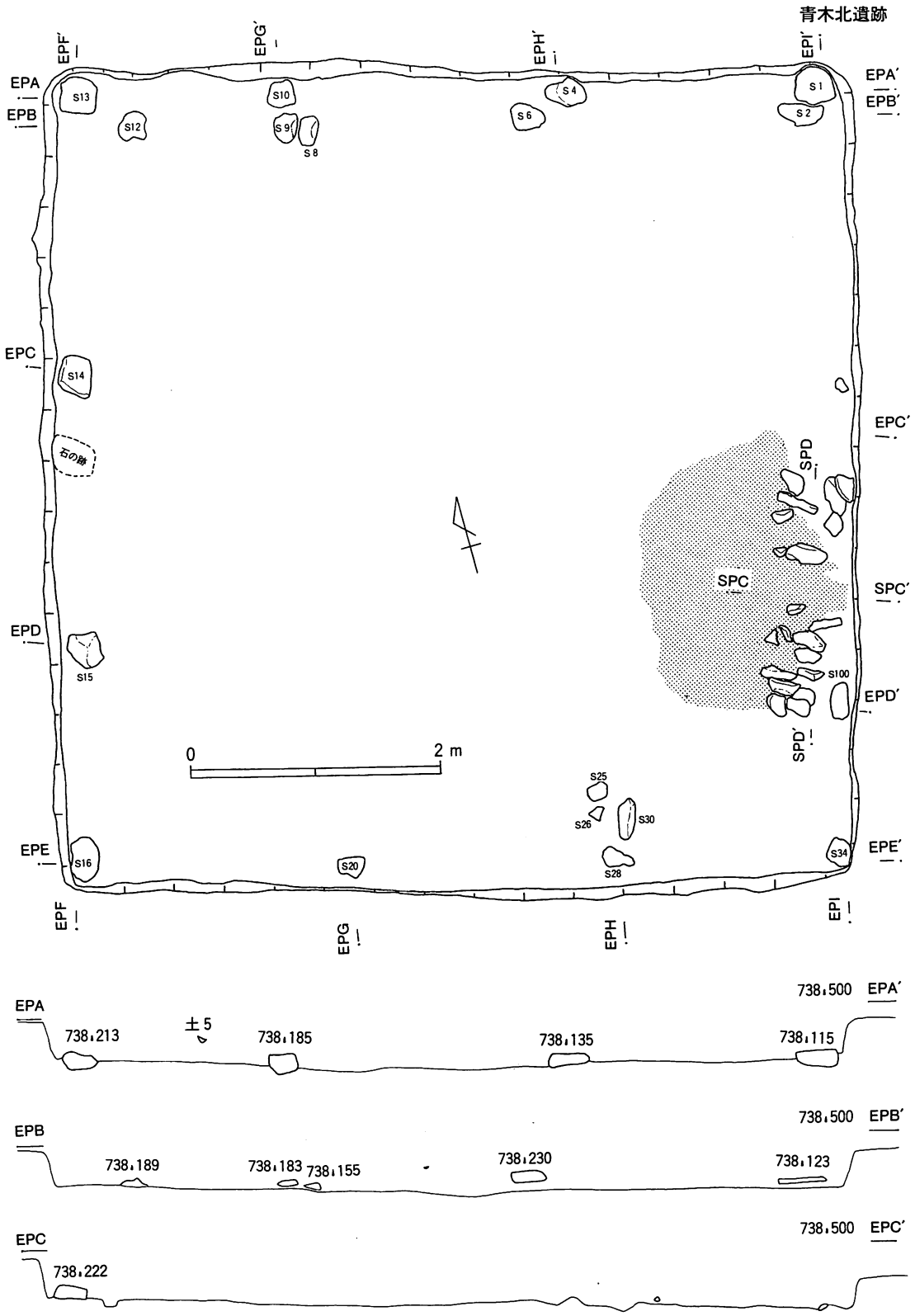


第15図　4・5号住居址平面図（$\frac{1}{50}$）

土した。坏に書かれた墨書は「上」が9、「下」が1、「不」が1で「上」が他に比して圧倒的に多い。鉄製品や墨書土器が多く出土したのは、この集落の首長的役割を担った家であったことを物語っている。

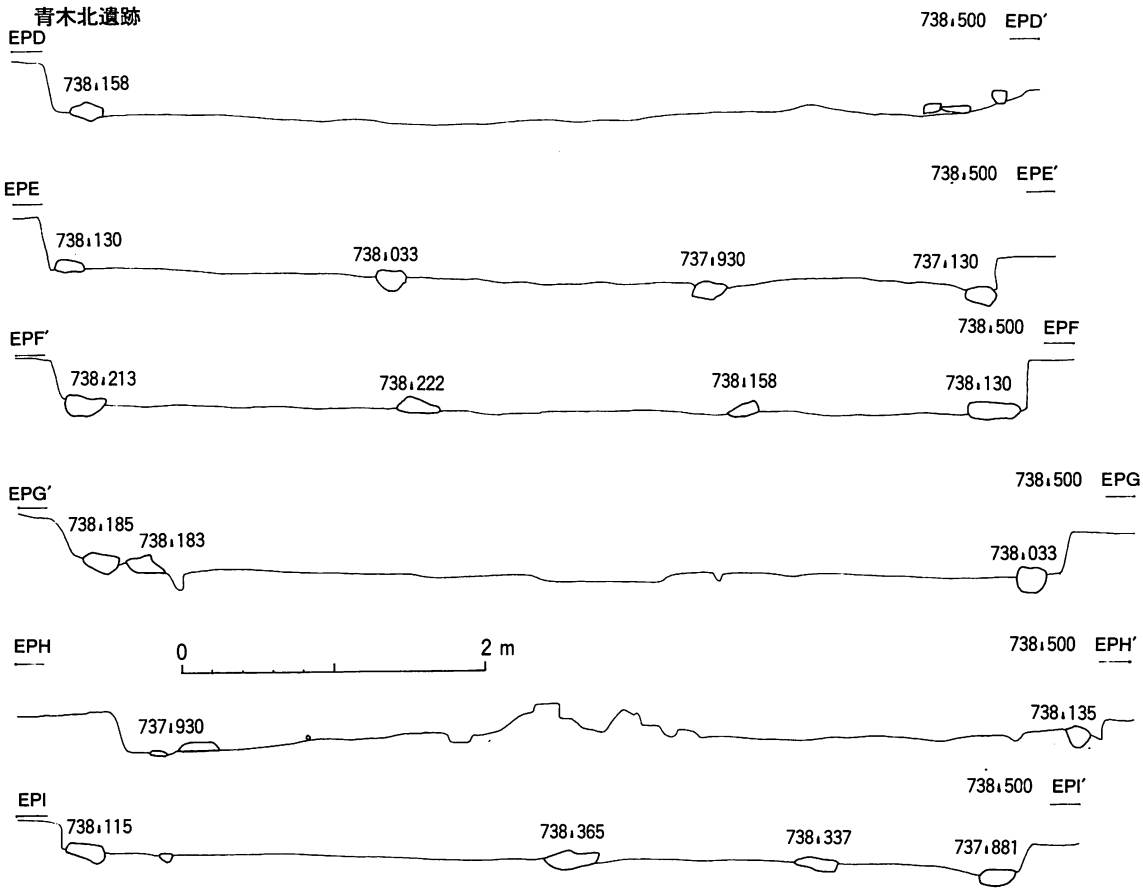
4号住居址の事実関係は以上のとおりである。竪穴住居址に柱の礎石が検出されたのは本県では初めてであろう。隣県の長野県では7例あり、この内1例は奈良時代、6例は平安時代に比定されていて、礎石の並べ方は石列状4例、単独型（1本の柱に1個の石）3例である。4号住居址は単独型で、平安時代の9世紀中葉と考えられる。

本県では、9世紀前半から竪穴住居址に柱穴が徐々になくなるようになり、10世紀になると非常に少なくなる。このことは柱を床面に直接立てたものと考えられ、4号住居址で礎石の上

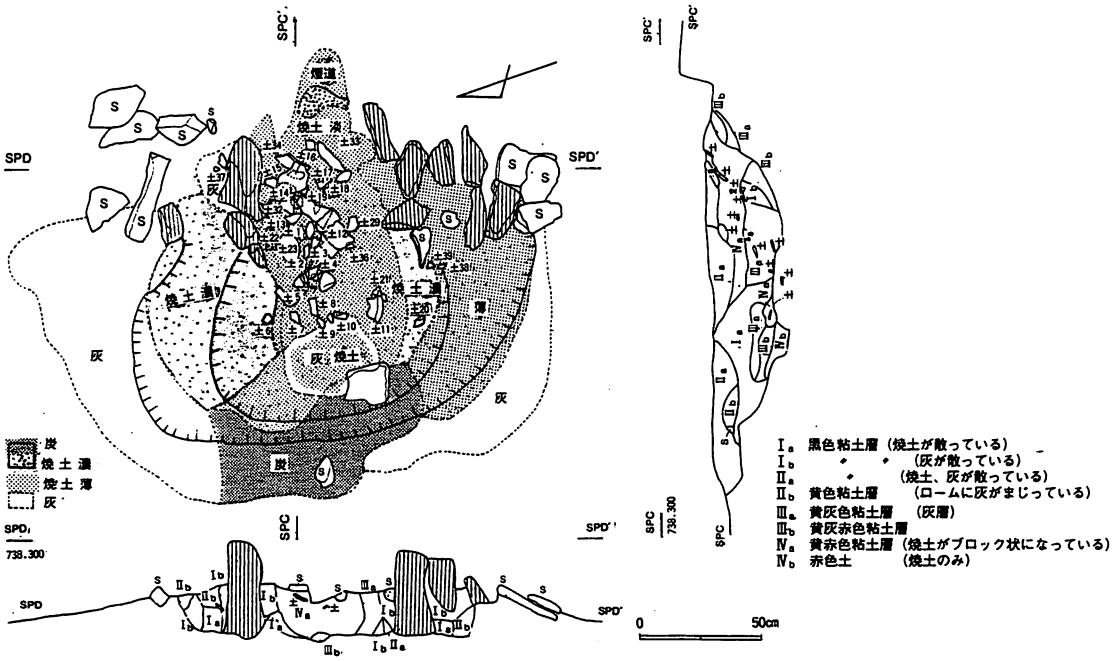


◦礎石の上の数字は標高を示す。

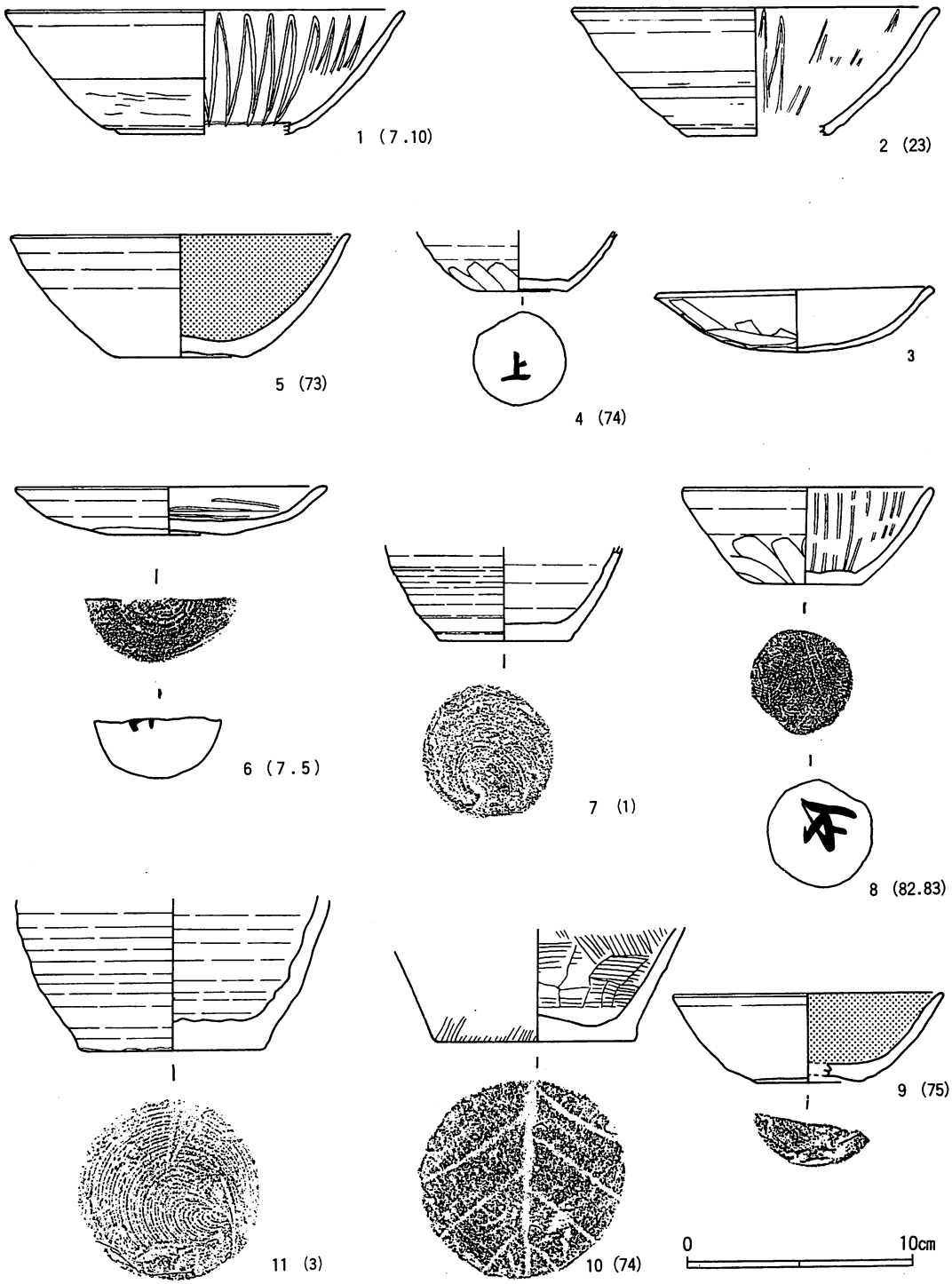
第16図　4号住居址平面図・側面図（$\frac{1}{50}$）



第17図　4号住居址側面図（$\frac{1}{50}$）

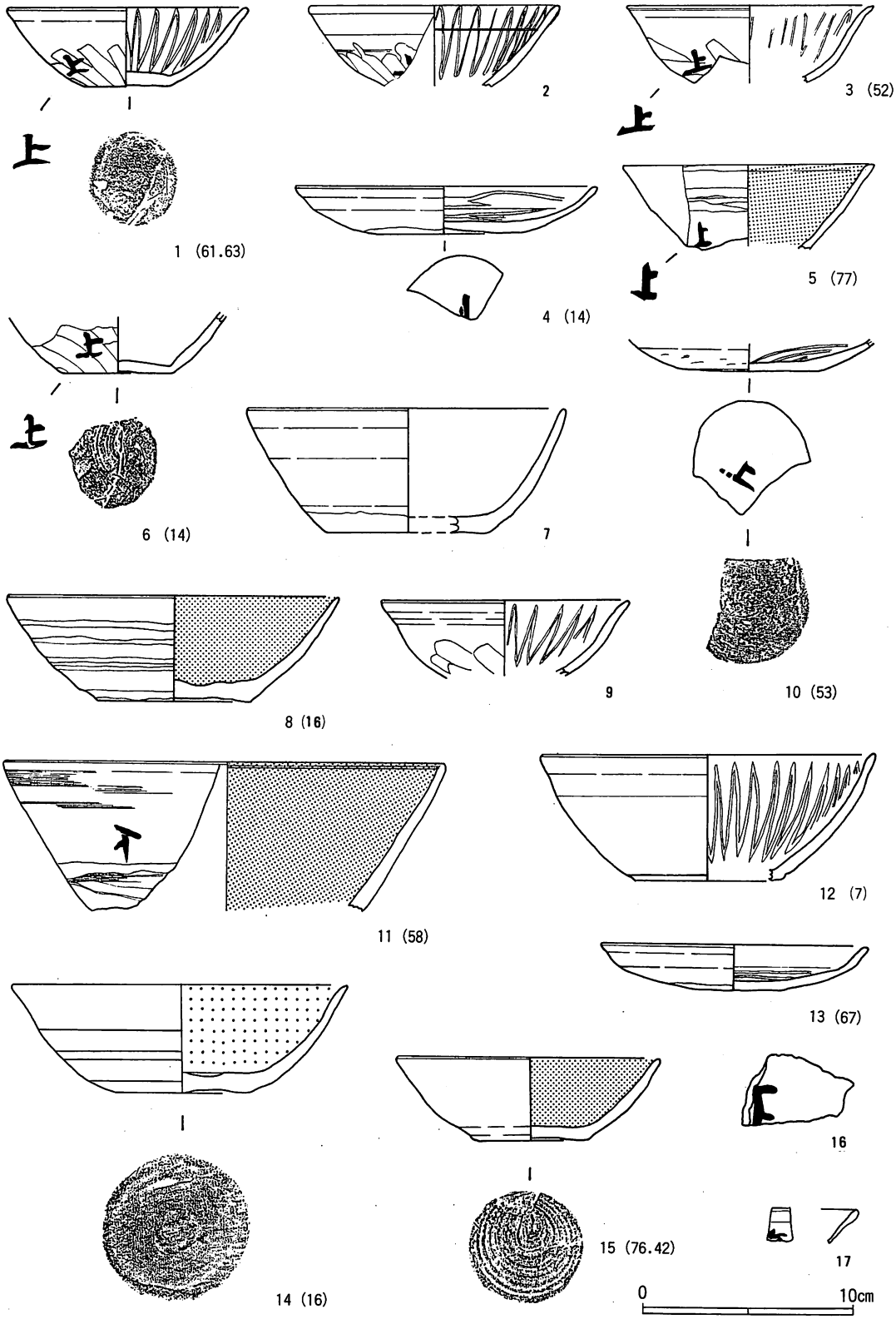


第18図　4号住居址カマド平面図・側面図・地層図

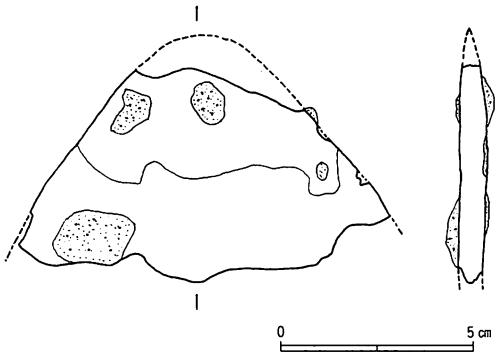


1、2、3　カマド　　4～11　床面直上

第19図　4号住居址出土遺物実測図（⅓）



第20図　4号住居址出土遺物実測図（⅓）



第21図　4号住居址出土鉄器実測図(鋤先)

に柱を立てたことと同じ意味であろうと考えられる。柱が掘立から床に直接立てられるようになったのは、竪穴住居址の上屋に構造上の変革があったからであろう。この変革は現代の民家に一歩近づいた進歩であると考えたい。

なお4号住居址と柱穴のない竪穴住居址については、後日項を改めて考えたいと思っている。

	礎石番号	標　高　m	大きさcm		備　考
			長径	短径	
外側	S 1	738.115	32	30	北東隅
	S 4	738.135	33	24	北
	S10	738.185	24	20	北
	S13	738.213	29	28	北西隅
	S14	738.222	31	27	西
	S15	738.158	29	26	西
	S16	738.130	34	21	南西隅
	S20	738.033	23	21	南
	S28	737.930	26	14	南
	S34	737.881	19	18	南東隅
	平均	738.100	28	23	
内側	S 2	738.123	37	18	北東隅
	S 6	738.230	28	21	北
	S 8	738.155	22	21	北
	S 9	738.183	22	20	北
	S12	738.189	22	21	北西隅
	平均	738.176	26	20	
合計平均		738.138	27	22	

(なお東側は試掘時に除去されたため計測不能)

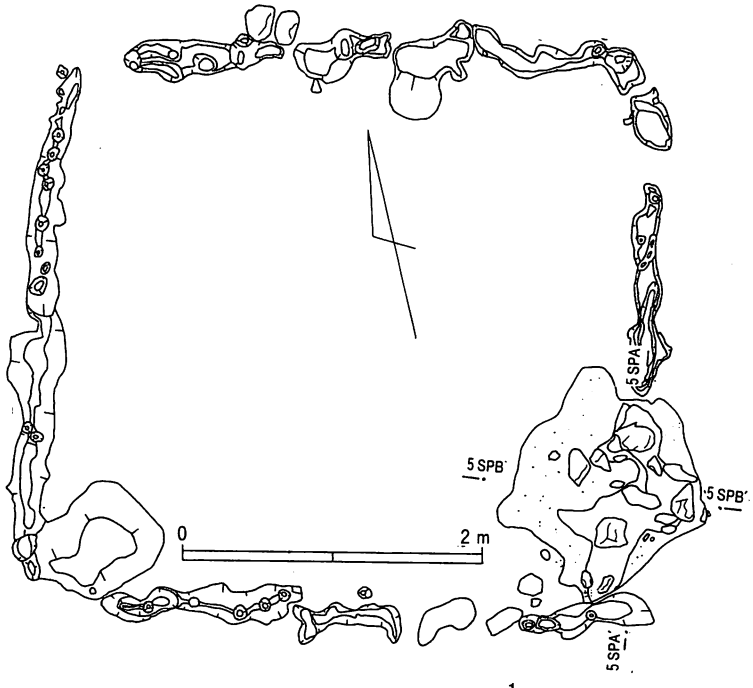
第3表　青木北遺跡4号住居址礎石計測表

	礎石番号	芯々間距離cm		備考
		各芯々間	一辺芯々間	
外側	S 1～S 4	199		北
	S 4～S10	228		北
	S10～S13	163	S 1～S13 590	北
	S13～S14	220		西
	S14～S15	214		西
	S15～S16	166	S13～S16 600	西
	S16～S20	213		南
	S20～S28	214		南
	S28～S34	177	S16～S34 604	南
	平　均	199		
内側	S 2～S 6	218		北
	S 6～S 8	177		北
	S 6～S 9	196		北
	S 8～S12	141		北
	S 9～S12	123	S 2～S12 535	北
	平　均	178		
	合計平均	186		

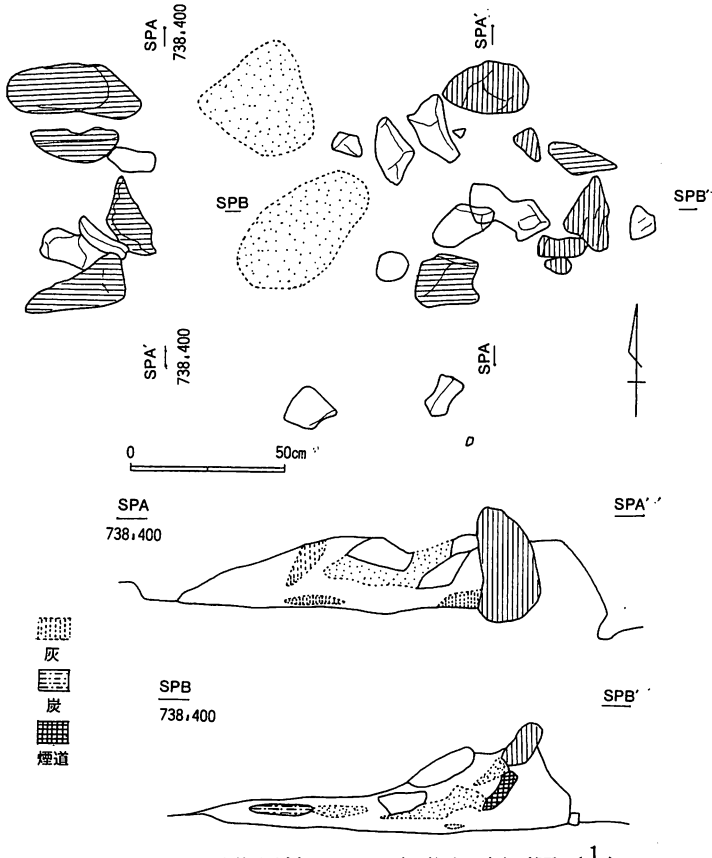
第4表　青木北遺跡4号住居址
礎石芯々間距離計測表

S 1	738.115	S13	738.213
2	738.123	14	738.222
4	738.135	15	738.158
6	738.230	16	738.130
9	738.183	20	738.033
10	738.185	28	737.930
12	738.189	34	737.881
8	738.155		

第5表　青木北遺跡4号住居址礎石標高表



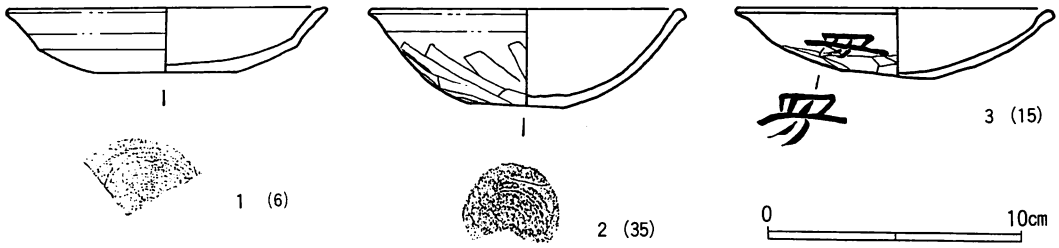
第22図　5号住居址平面図（$\frac{1}{50}$）



第23図　5号住居址カマド平面図・側面図（$\frac{1}{25}$）

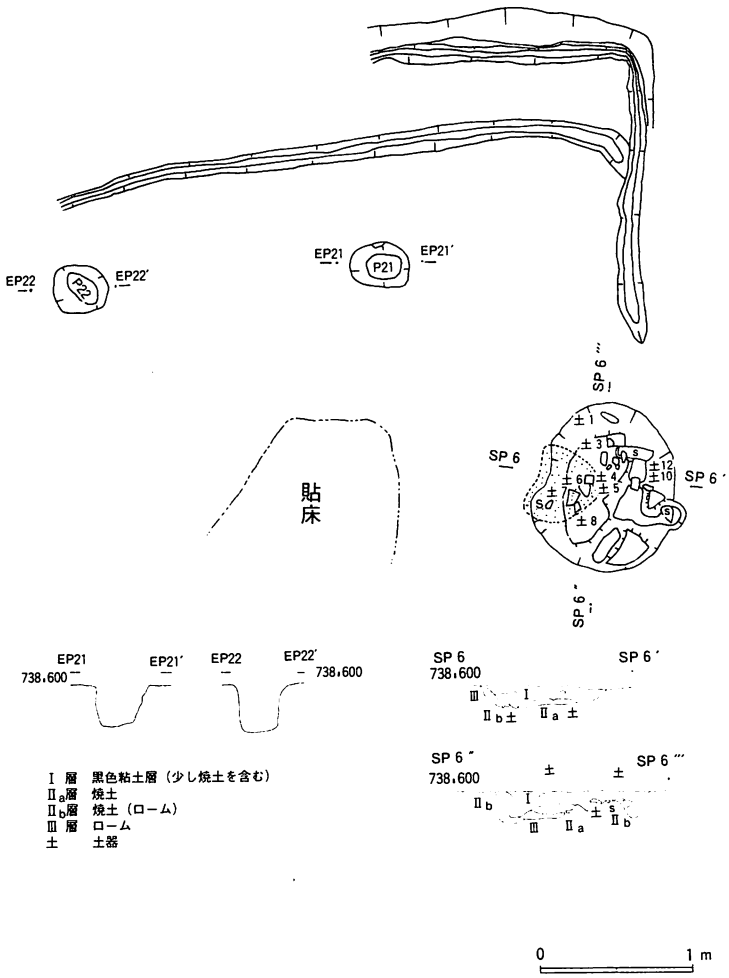
5号住居址　A区の南端にあり、4号住居址と重複していて、重複関係は前述したように本住居址の方が先に構築されたと思われる。したがって検出されたのは床面、周溝とカマドだけである。床は堅く、周溝の中には小ピットがあり、カマドは東南隅にある。

遺物は周溝の覆土から出土したものを5号住居址に伴う遺物とすると9世紀後葉から10世紀前半に比定できるが、遺物量が少ないので疑問も残る。他は4号住居址出土とした。この住居址から出土した墨書土器に「丐」の字があるが、大漢和辞典にはみられない。これに似ている字に号（㝵）、㓝（盈）がある。「号」（ケイ、テイ、ヂョウ、キョウ）は「息をととのえる」の意味、㓝（エイ、ヨウ）は「みたす、みちる、あふれる、のびる、たりる、おもいのままになる」の意味がある。



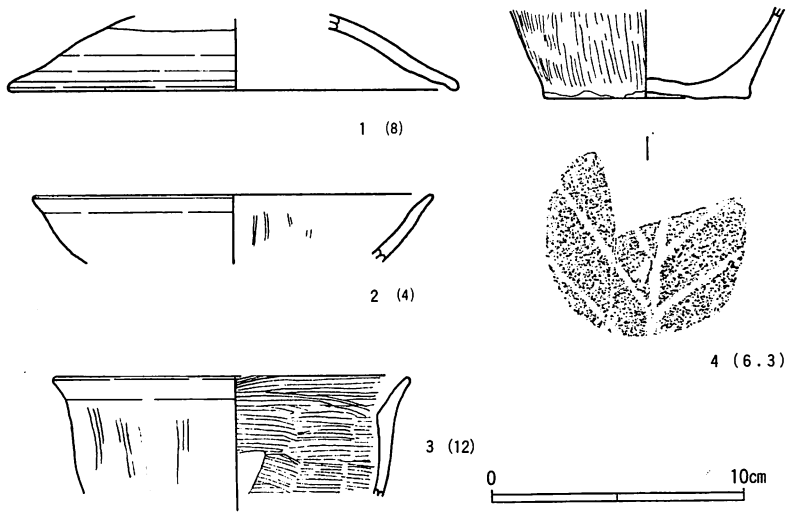
1　床面直上　　2　カマド

第24図　5号住居址出土遺物実測図（⅓）



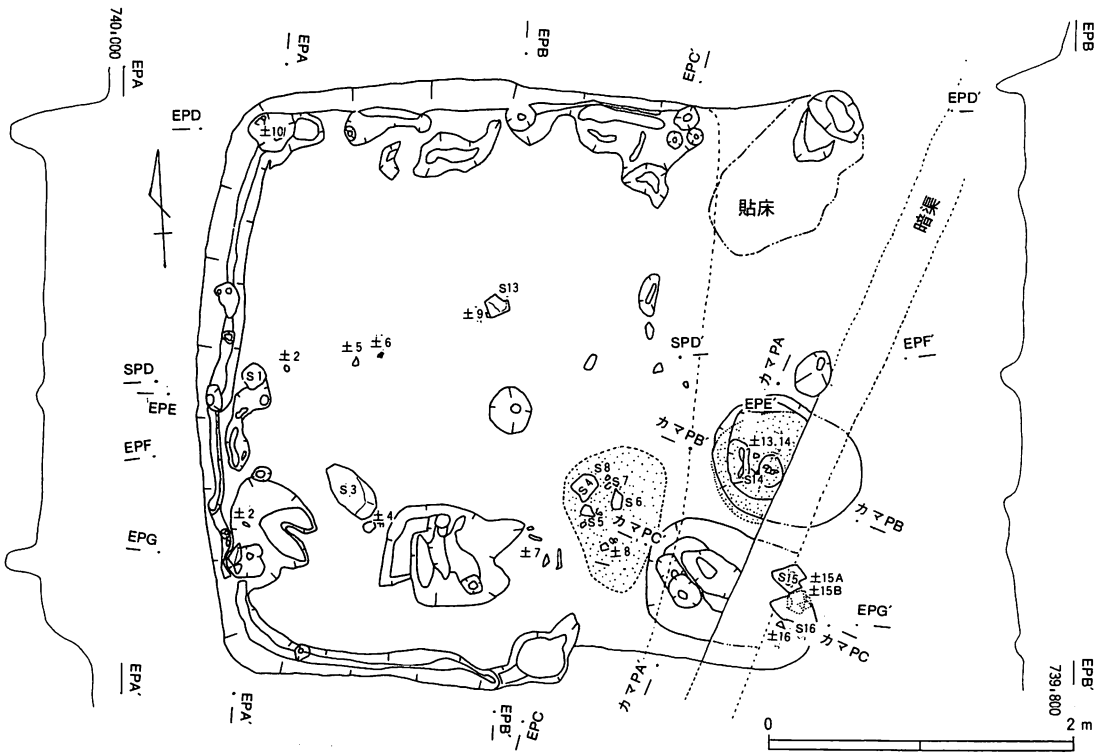
第25図　6号住居址平面図、カマド地層図（$\frac{1}{50}$）

6号住居址　A区中央部にあり、北東隅が残存していただけで、他の部分は水田を造成する際に削平され、破壊されていた。残存していたのは壁と壁の内側に沿って掘られた周溝（北側には2本ある）および床面である。住居址の北側は拡張したと思われる跡もあった。北側の壁の深さは約40cmあって、削平されていないので、他の住居址の壁の深さが推測できる。中央部に少しの面積であるが貼床が残っていることと、柱穴が2基壁から離れて掘られているのは本遺跡ではこの住居址だけである。カマドは東側にあって、その中の焼土中からは多くの土器が出土した。9世紀後半に比定できる。

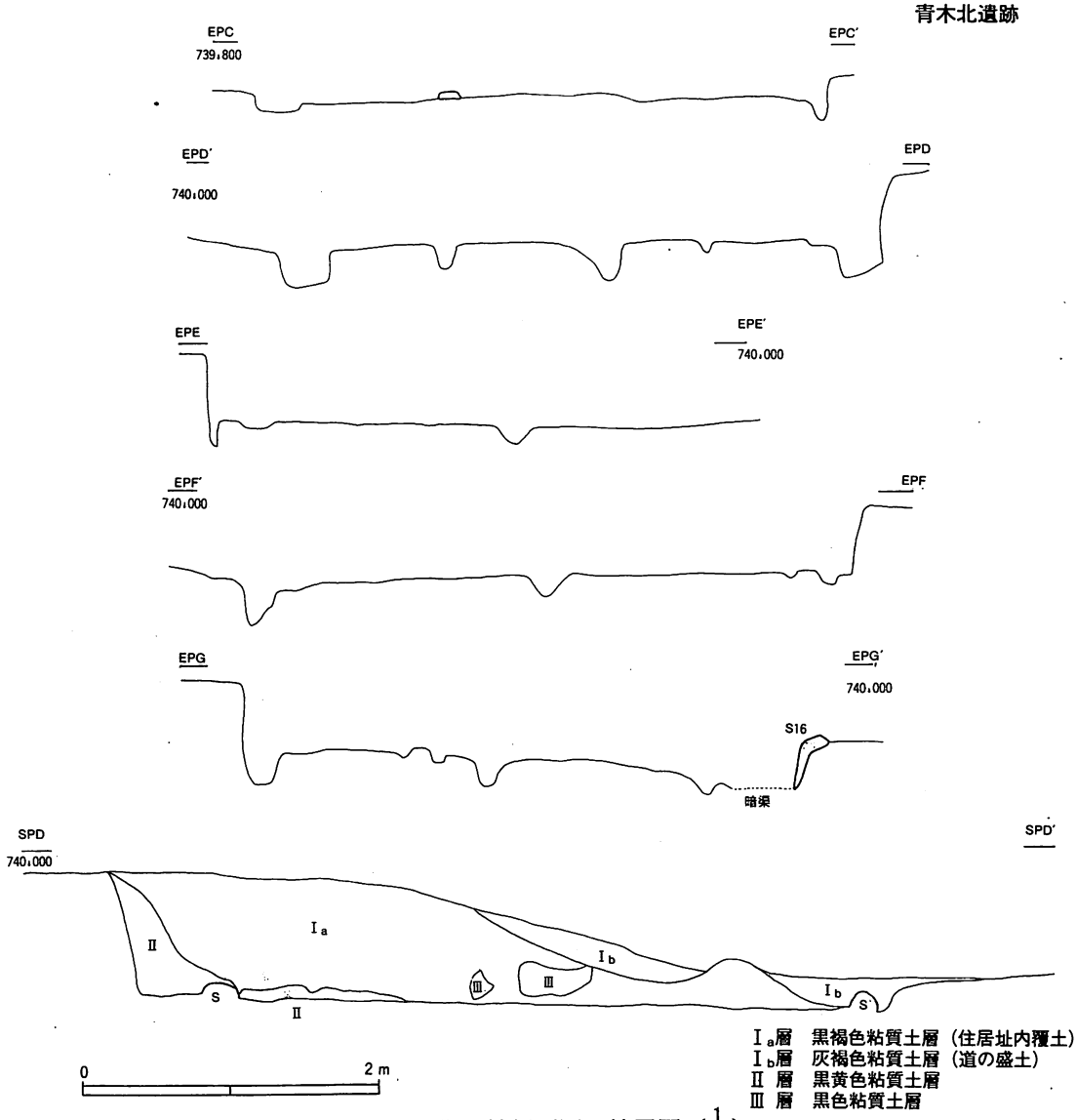


第26図　6号住居址カマド出土遺物実測図（⅓）

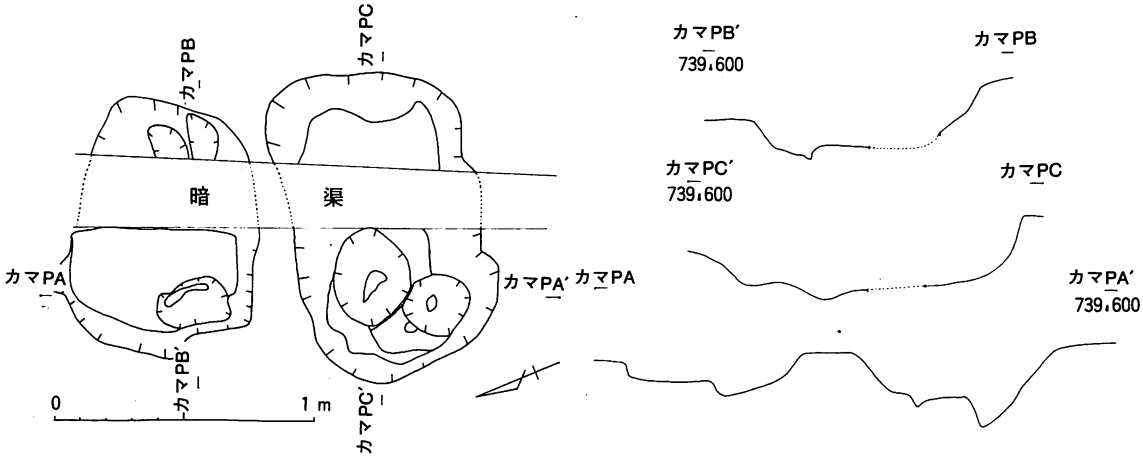
7号住居址　遺跡中央部にあり、道路で東半分の上部が破壊されている。プランは東西がやや長く、深さは40㎝以上ある。東北隅の一部に貼床が残っており、堅緻である。主柱穴はカマドがある南東隅を除く他の3隅にあり、主柱穴の間にある溝（東側を除く）中と住居中央部に補助的な柱穴がある。カマドは東側に2基あり、その前後関係は判明できなかった。住居址は廃絶後西側から埋没していったようすがセクション図に見られる。



第27図　7号住居址平面図・側面図（$\frac{1}{50}$）



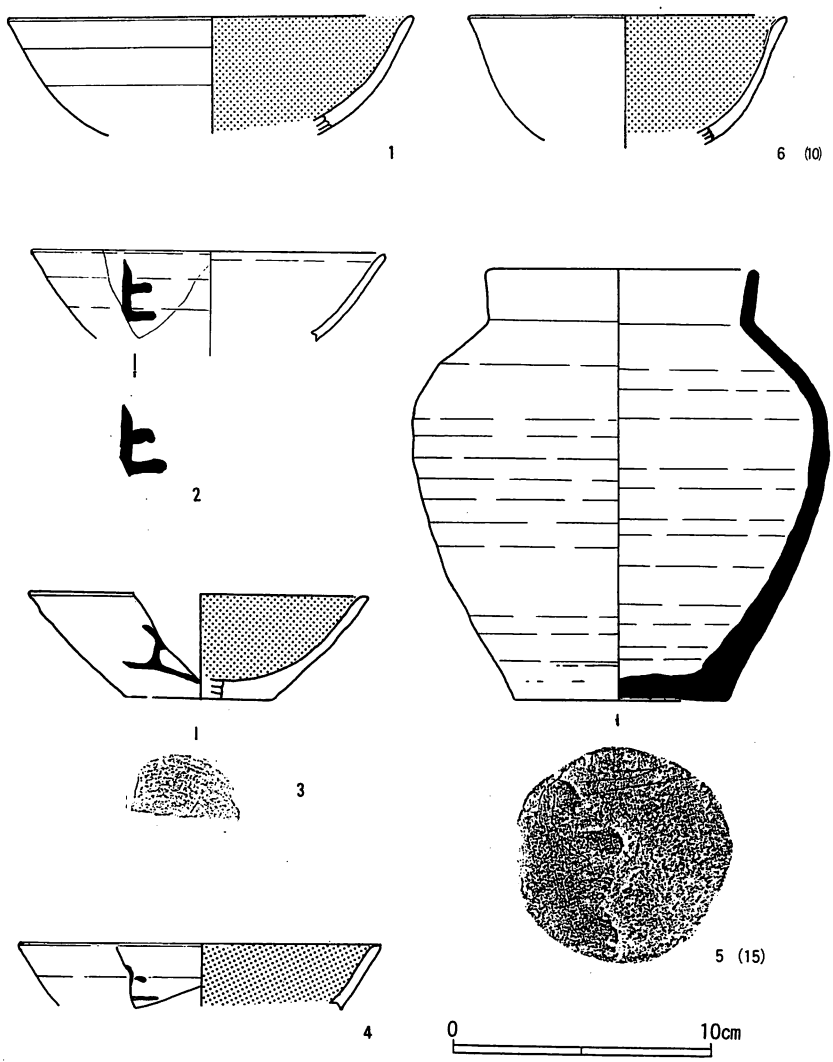
第28図　7号住居址側面図・地層図（$\frac{1}{50}$）



第29図　7号住居址カマド平面図・側面図

青木北遺跡

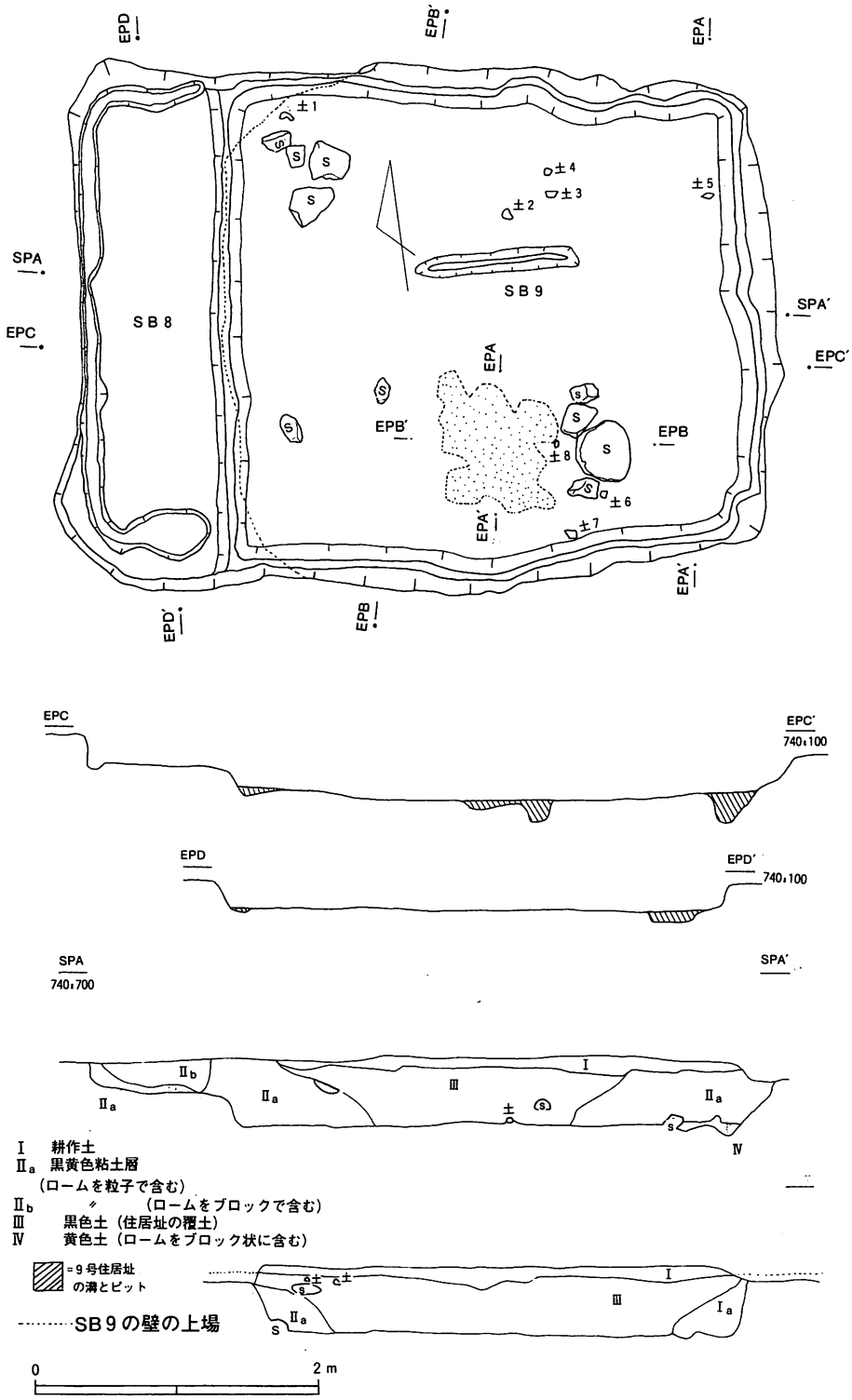
遺物は土師器の坏と須恵器が出土しているが、須恵器は住居址内東端にあった土壙に埋められていたので、住居址に伴うものかどうか疑問である。この他研磨された方形の石（砧石ではない）も覆土から出土している。なお「上」と書かれた墨書土器は第6表では3個としておいたが、No.3も筆法から推定すると「上」と考えられるので、そうであれば4個体である。土師器の時期は10世紀前半に位置づけられる。



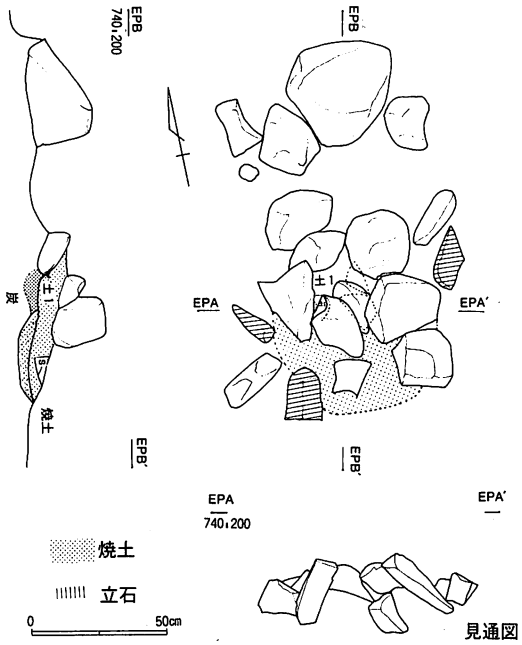
第30図　7号住居址出土遺物実測図（⅓）（5須恵器）

8・9号住居址　B区の北部にある。この2基の住居址は重複して構築されたものと考えられる。8号住居址が廃棄され埋没してから、ここを利用して9号住居址を構築したのであろうか。

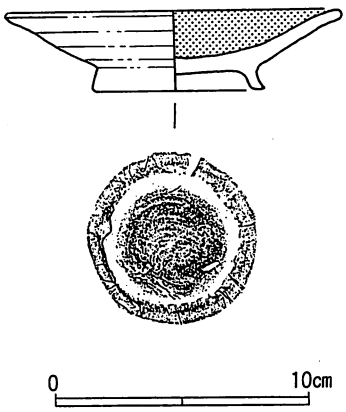
9号住居址は東西にやや長く、深さは約42cmである。住居址はハードロームを掘り込んでお



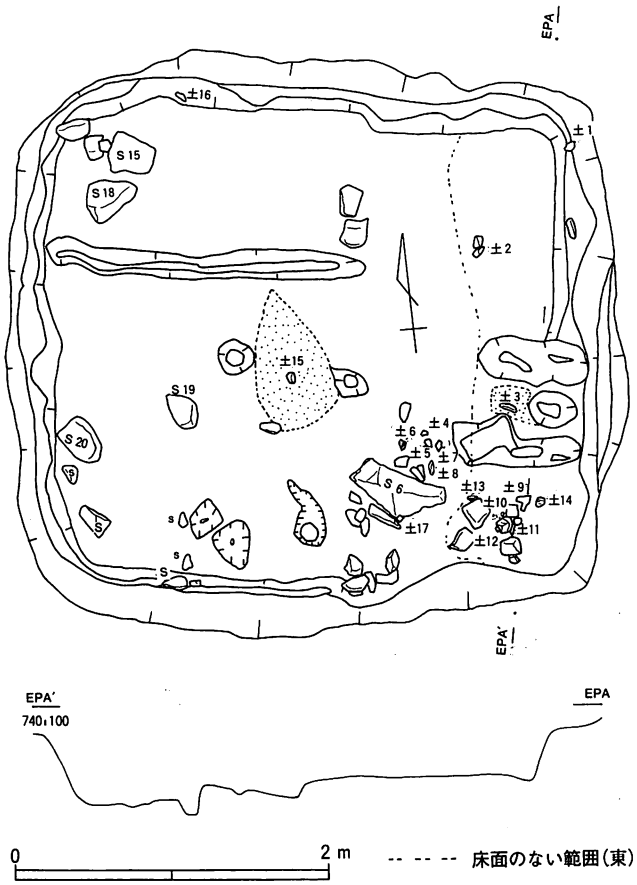
第31図　8・9号住居址平面図・側面図（$\frac{1}{50}$）



第32図　8号住居址カマド平面図・側面図



第33図　8号住居址カマド
出土遺物実測図(1/3)

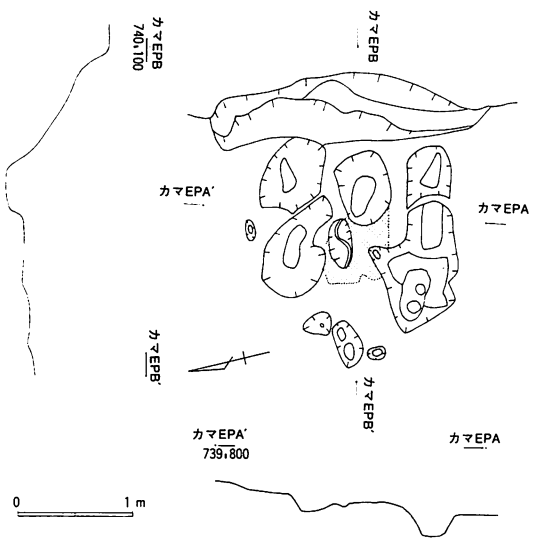


第34図　9号住居址平面図・側面図 (1/50)

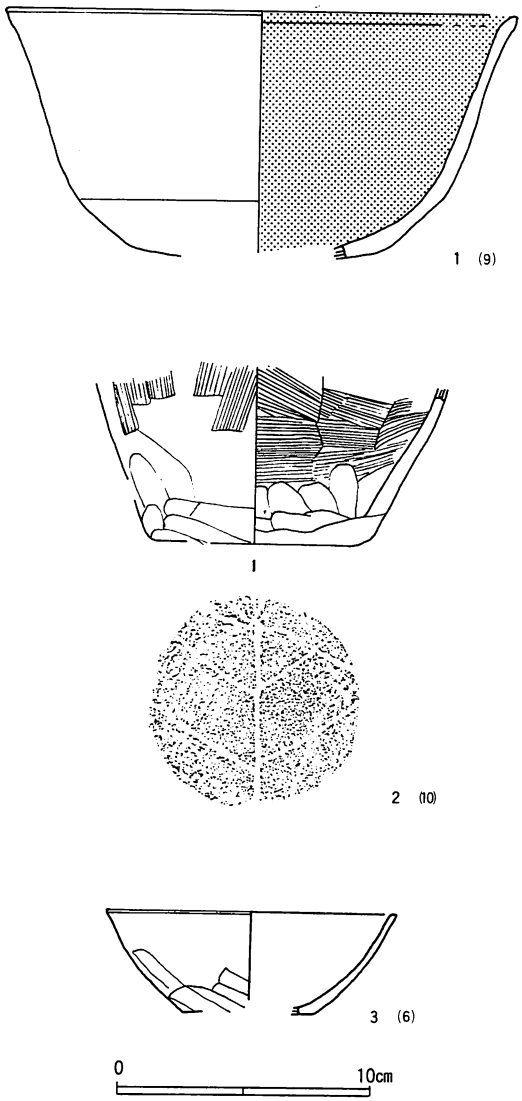
り、この上層は耕作土であるので、上部は攪乱され、構築時より浅くなった可能性は大きい。カマドの部分を除く他は壁に沿って周溝を巡らせている。また中央北寄にも東西方向に一本溝がある。カマドは東側の南寄りに石を芯にして築いている。また、南側中央にあるピット中から焼土を検出した。

8号住居址は9号住居址の西を拡張して建てなおしたのであろうか。拡張部は9号住居址の床面より約25cm高くなっている。セクション図ではなだれ込みによって埋没した状況が見える。拡張部はベッド状遺構であろうか。

遺物は甕、坏、皿などが出土し、時期は10世紀中葉から10世紀前半に比定できる。



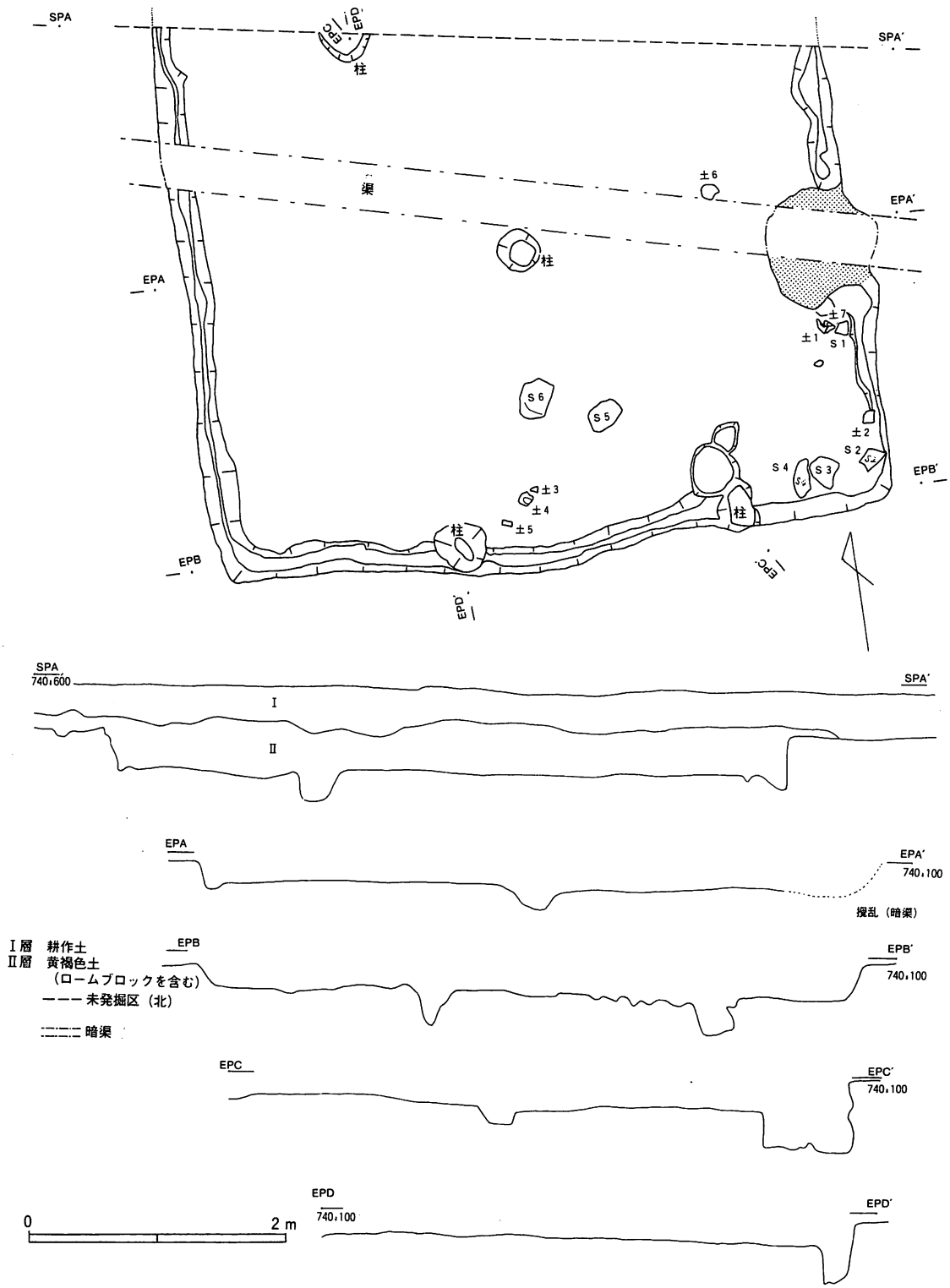
第35図　9号住居址カマド平面図・側面図



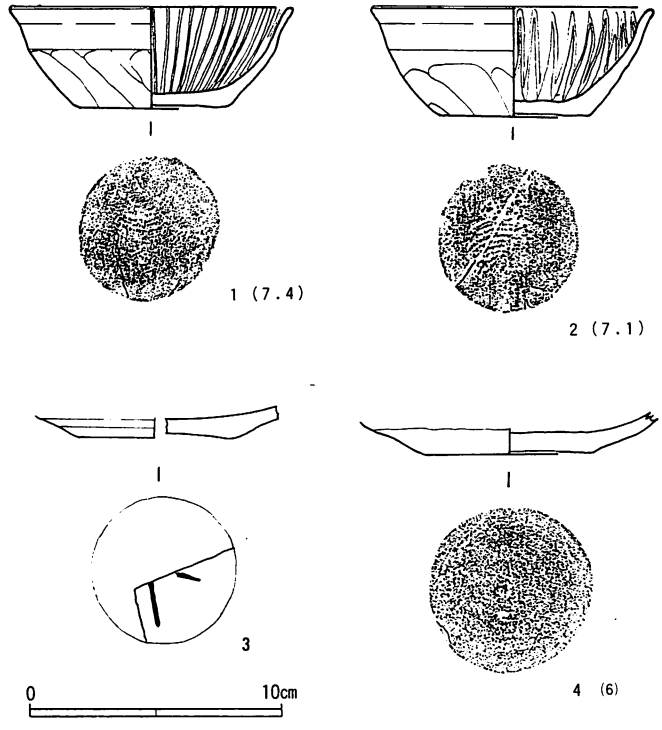
第36図　9号住居址出土遺物実測図（⅓）

13号住居址　B区北端にあり、その一部は工事区外に延長していたため完掘出来ず、また中央部を溝で攪乱されていた。プランは本遺跡で2番目に大きく、東西の長さは約5.3*m*である。深さは約30*cm*であるが、上部は削平されていると思われる。東南隅を除いて周溝を巡らせ、周溝の中に2基、中央部に1基柱穴がある。東側南寄りにカマド跡と考えられるピットがある。

遺物は坏などが出土し、時期は9世紀後半に位置づけられる。



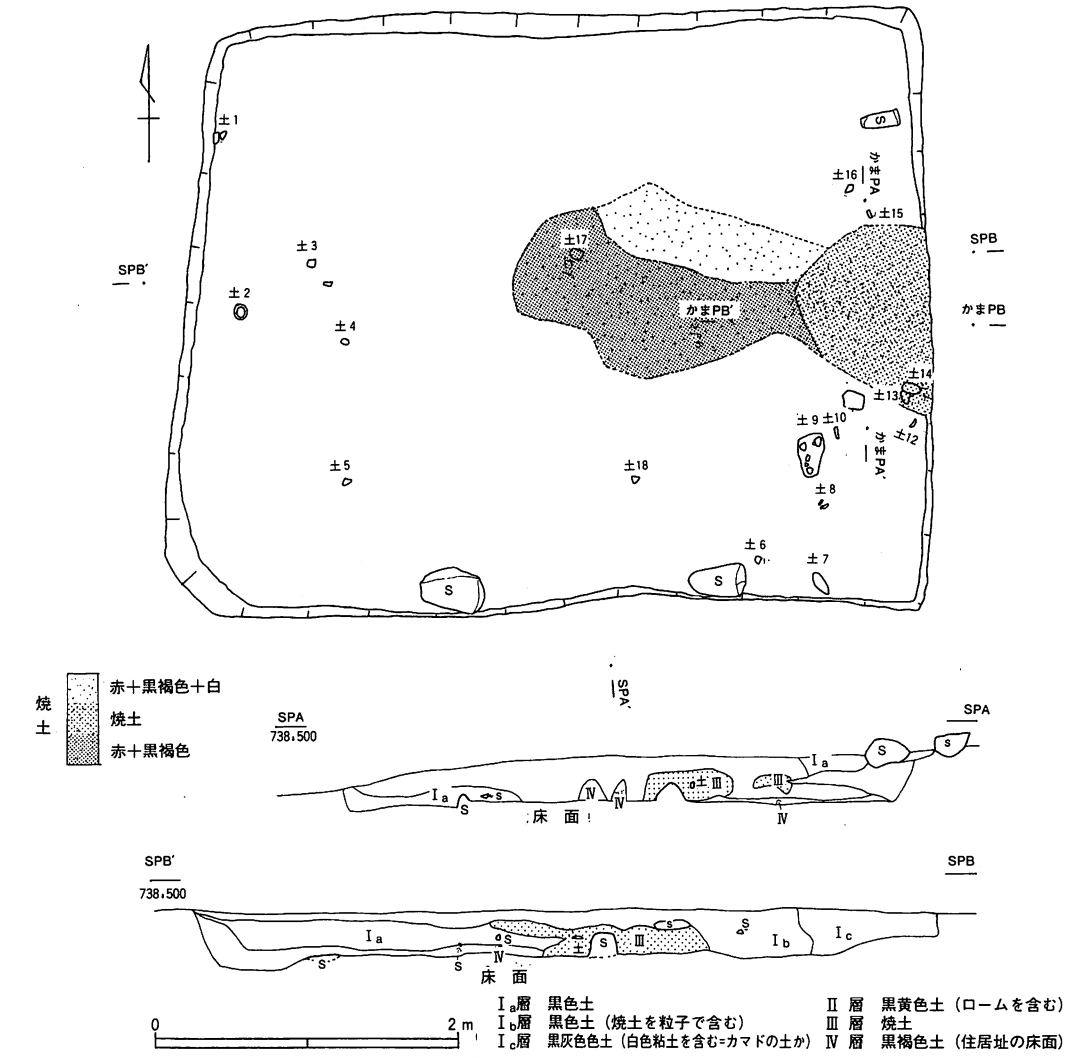
第37図　13号住居址平面図・側面図（$\frac{1}{50}$）



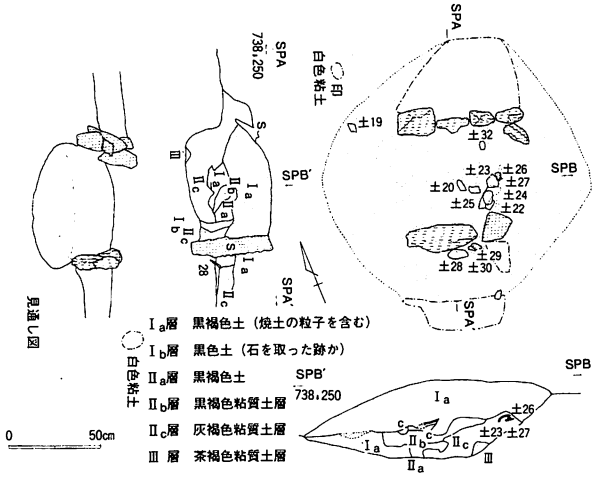
第38図　13号住居址出土遺物実測図（⅓）

14号住居址　A区の南側にある。包含層が黒色土だったためプランが非常に見分け難く、壁を若干削り過ぎたかも知れない。東西に長い。南壁に接して2箇の石が据えてあるのは、4号住居址と同様に柱の礎石ではないかと思われ注目されるが、他に検出できなかったので、確定できない。カマドは東側中央にあり、石を芯としている。この中に焼土が厚く堆積し、住居址中央部まで延びている。

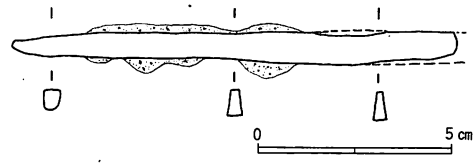
遺物は土師器の甕、坏、皿などと須恵器底部が1片および刀子が1本出土した。遺物№4の墨書は「木」であろうか。なお床面直上より桃か梅の種と思われるものが出土した。土師器の時期は10世紀に位置づけられる。



第39図　14号住居址平面図・側面図（$\frac{1}{50}$）

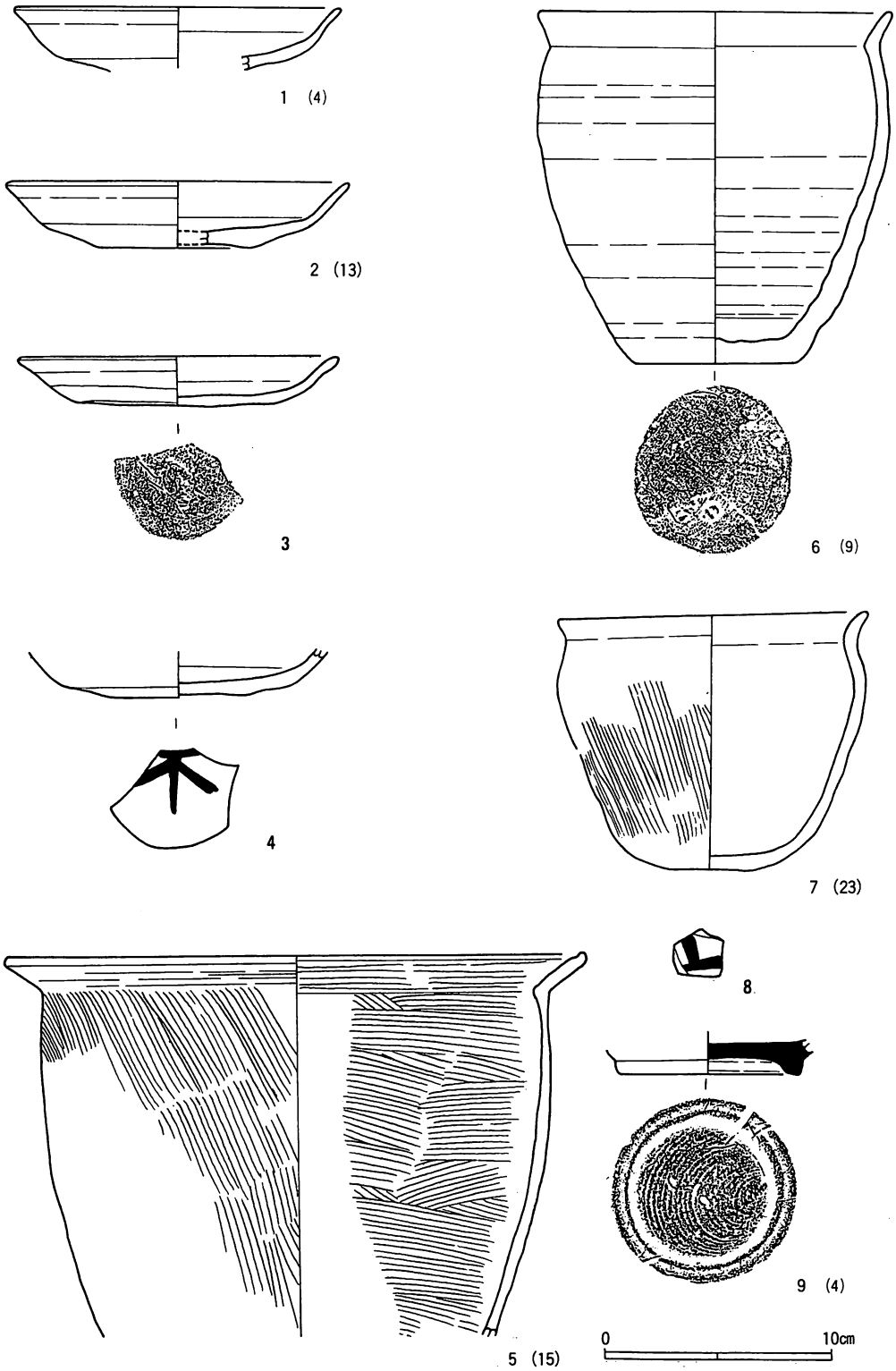


第40図　14号住居址カマド平面図・側面図

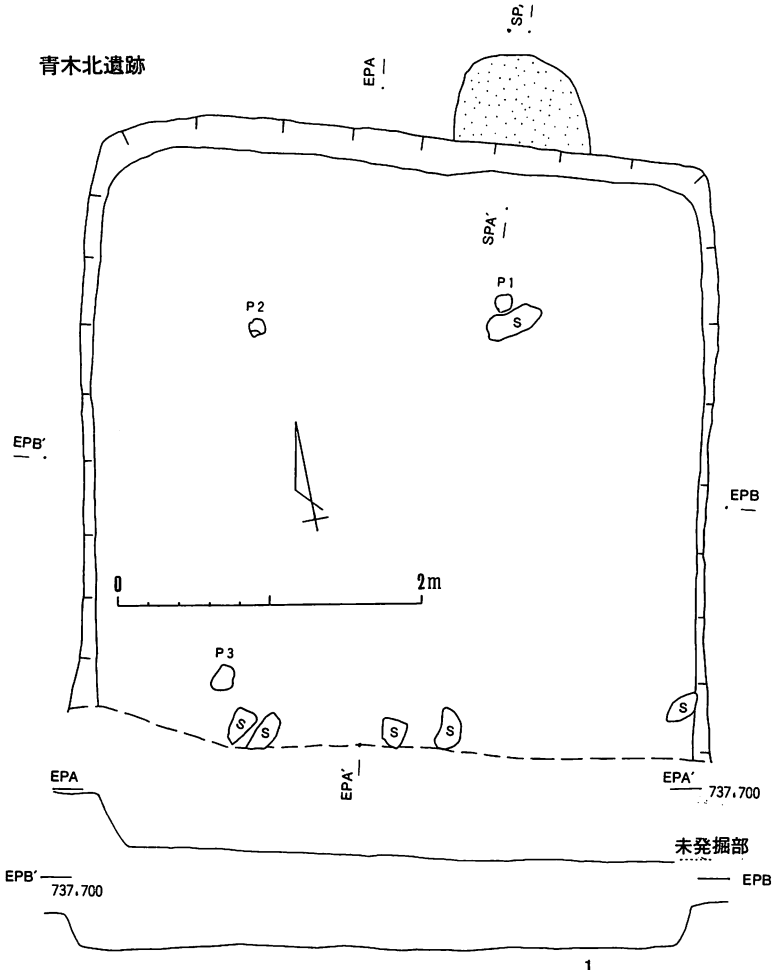


第41図　14号住居址出土鉄器実測図

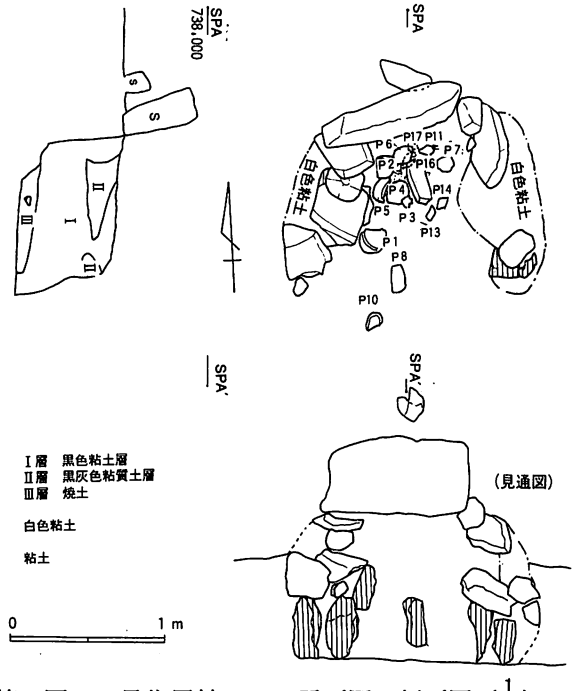
（鉄鏃）



第42図　14号住居址出土遺物実測図（⅓）



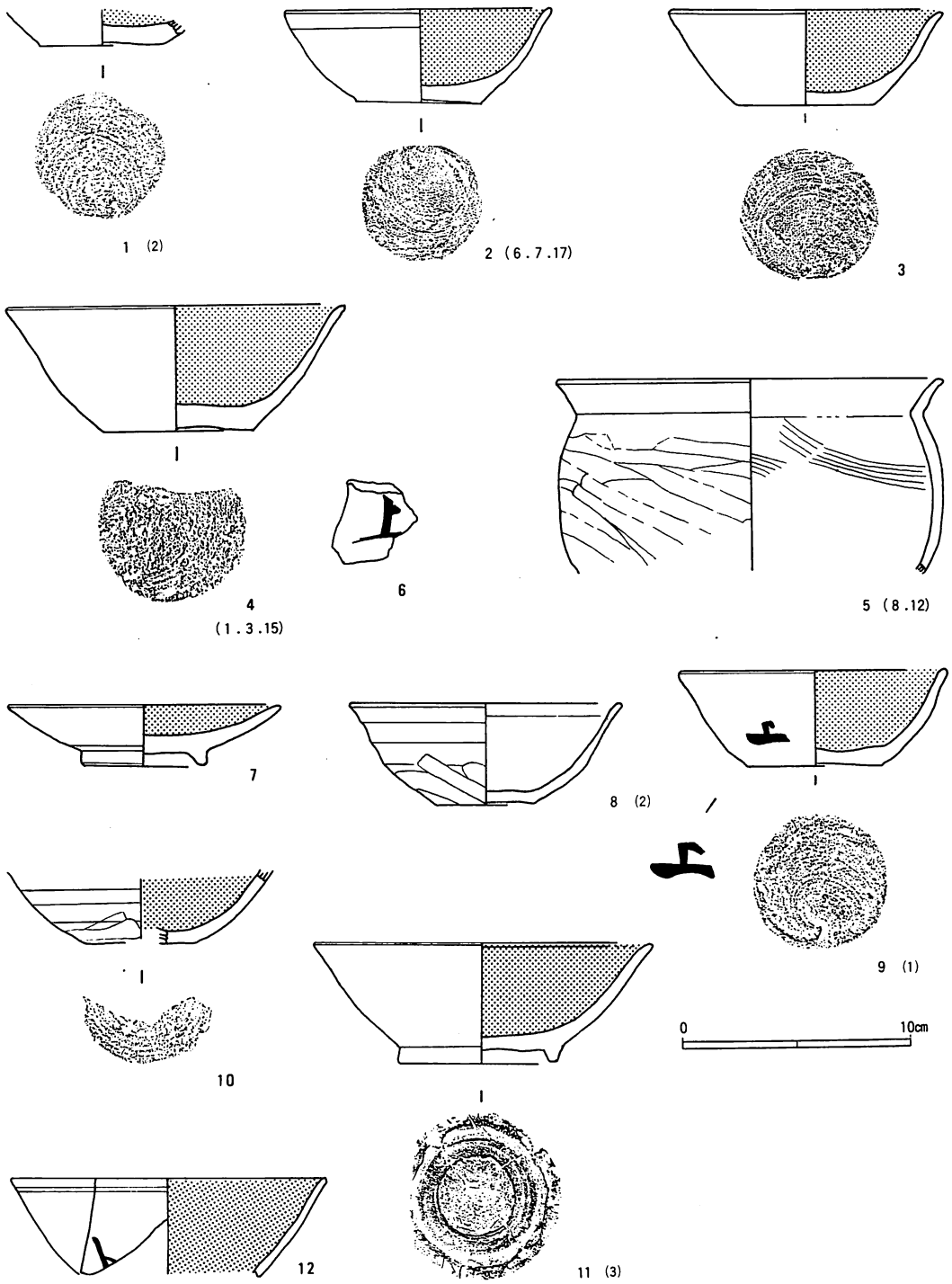
第43図　15号住居址平面図・側面図（$\frac{1}{50}$）



第44図　15号住居址カマド平面図・側面図（$\frac{1}{25}$）

15号住居址　A区の南端にあり、一部はその南にある低い道によって壊されていた。さらにその南は湧泉がある深い沼になっているのでここには遺構はないと考えられる。西側の一部が16号住居址を切っていて、床面はそれより約30cm高い。深さは北側で40cmあり、本遺跡内で最も深い。床面は軟弱である。カマドは北側にあって、住居址の外に突き出ている。カマドはよく残存していて、芯に石を用い、その囲りに白色粘土を貼り付け、奥の上部に石を置き、中央前面に石を立てている。中には焼土が少なく、前面に灰や炭が堆積していた。

遺物は甕、坏で全体に本遺跡では古手で、9世紀代から10世紀後半に位置づけられるであろうか。

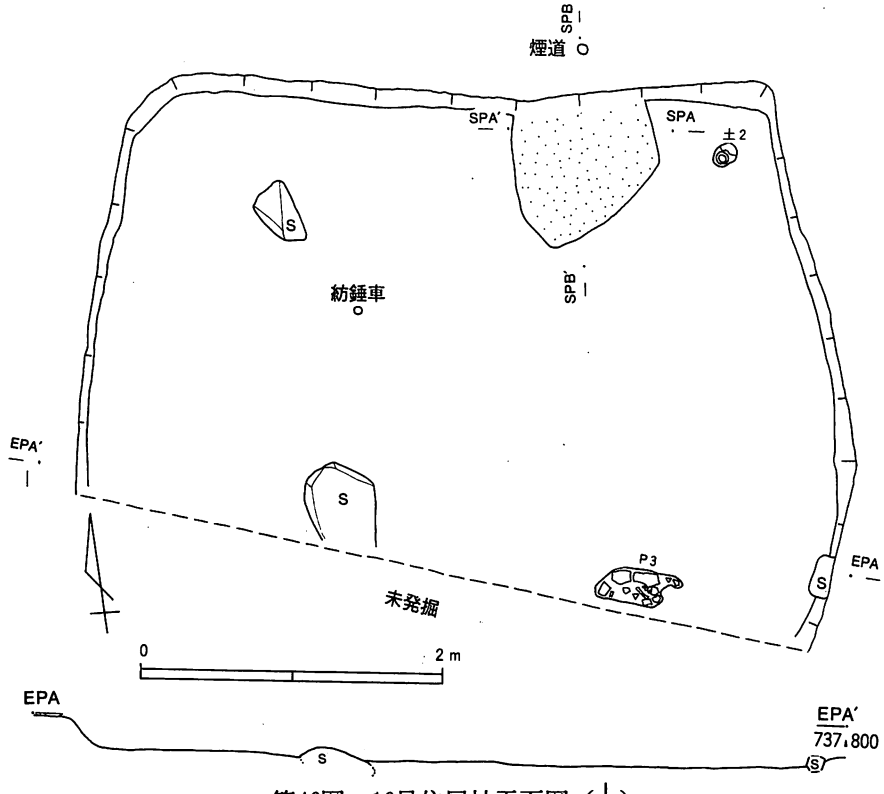


1～5　カマド　　9、11　床面直上

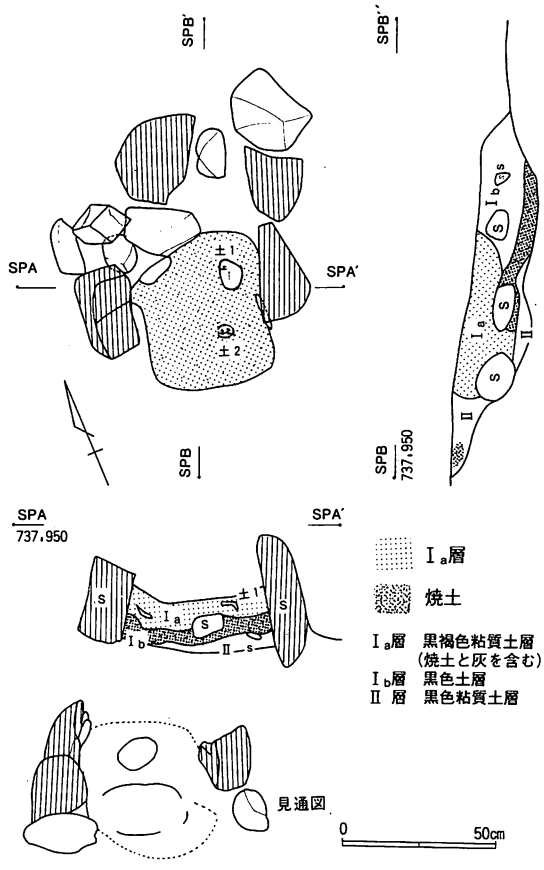
第45図　15号住居址出土遺物実測図（⅓）

16号住居址　A区の南端にあり、一部はその南にある低い道と15号住居址によって切られており、17号址より下で検出された。15号住居址との重複関係は前項のとおりである。床面は軟弱である。カマドが北側にあるのは、本遺跡では15号住居址と16号住居址の2基だけである。カマドの位置は住居址内にあり、石を芯としていて、その中には焼土が堆積している。

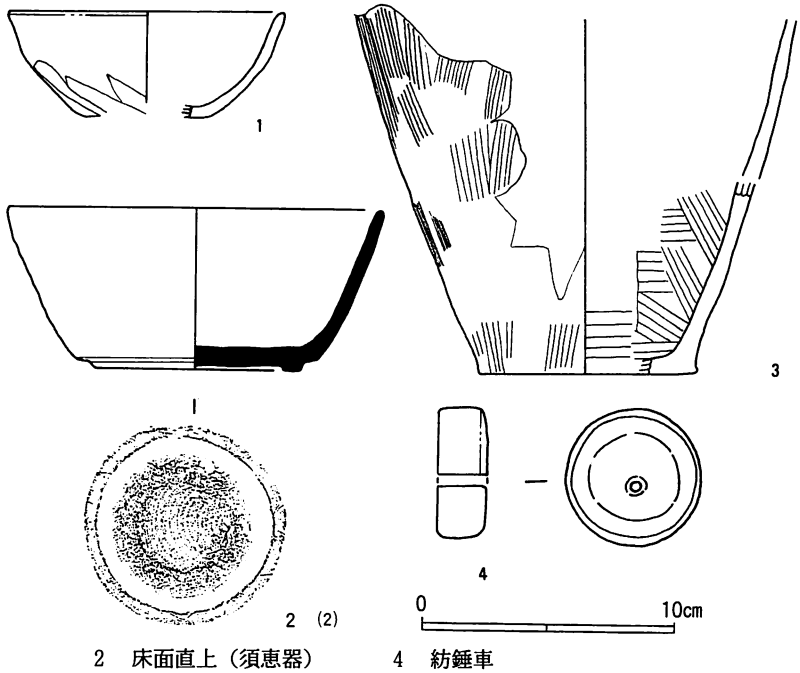
遺物は甕、須恵器の坏、紡錘車などが出土し、本遺跡の遺物中では古手で、8世紀後半に比定されよう。



第46図　16号住居址平面図（$\frac{1}{50}$）



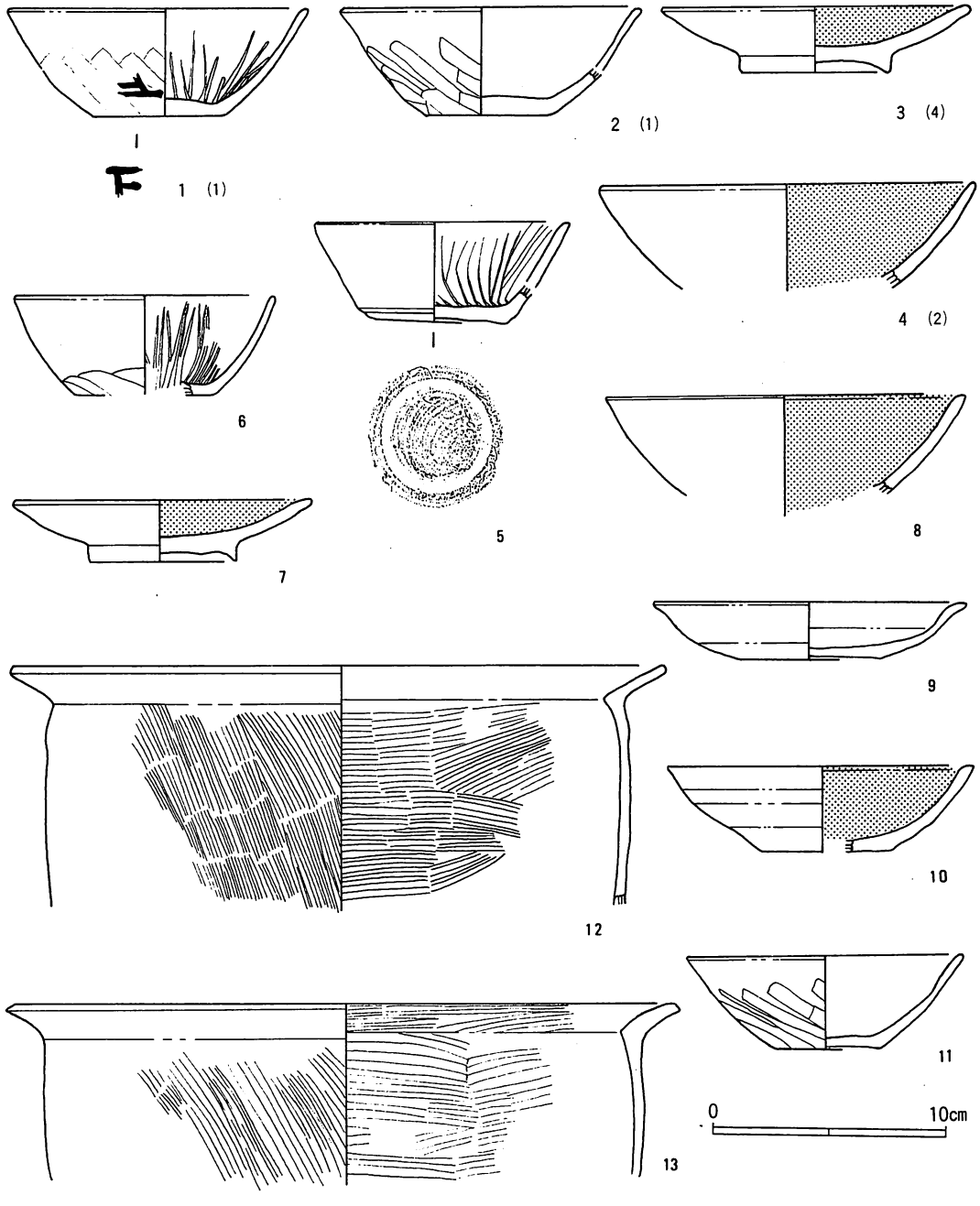
第47図　16号住居址カマド平面図・側面図（$\frac{1}{25}$）



2　床面直上（須恵器）　　4　紡錘車

第48図　16号住居址出土遺物実測図（⅓）

17号址　上に４号住居址が下に16号住居址がかかり、床面らしい所があったので住居址と思われる。やや古手の９世紀前半から中葉の土師器が出土した。



１～４　床面直上

第49図　17号址出土遺物実測図（⅓）

2　墨書土器について

遺物の中で注目されるのが墨書土器である。墨書は全て坏（皿）の外側に書かれていて、20個体あり、字の種類は他の遺跡に比べて少ない。この中の字で「上」が13個体あって最も多く、13個体のうち9個体は4号住居址から出土した。前述したように4号住居址は柱の礎石がある特殊な住居である。この外の墨書土器は住居址や土壙から出土している。その出土地域を分析すると、A区（道東）では「上」が10、「下」が7、「不」が2、その他1の計20である。B区（道西）では「上」が3で、住居址数の割合からみると、その出土数はA区の方が多い。

住居址No. ＼ 墨書	A　区（道東）							B区(道西)		合計
	3	4	5	14	15	17	小計	7	小計	
「上」	1	9					10	3	3	13
「下」	1	1		1	3	1	7			7
「不」		1		1			2			2
「罗」			1				1			1

第6表　青木北遺跡出土墨書土器集計表

住居址No. ＼ 地区	2	4	5	6	8	15	16	21	24	25	27	28	29	合計
道　東						2	1		2	1	1	2	1	10
道　西	1	8	1	2	5			2						19

第7表　東久保遺跡出土墨書土器集計表

前述した東久保遺跡では「宍」が3、「吉」が2、「丈」が1、「六万」が1、「定」が5、「家吉」が1、「須」が1、「石」が1、「火」が1、「酒」が1、「上」が2、「子」が1、「井」が1、「大麻呂」が1、「百」？などがある。両遺跡に共通してある字は「上」だけで、青木北遺跡では東久保遺跡に比べて字の種類が少なく、しかも「上」と「下」が圧倒的に多い。以上のように墨書された字の種類では両遺跡の違いが明らかであり、また筆跡から見たところでは、鑑定結果に共通点がないことがわかった。2遺跡の墨書を分析・鑑定していただいた報告を次に掲載する。

鑑　定　書

平成2年6月21日付で山梨県埋蔵文化財センターから鑑定を依頼された青木北遺跡及び東久保遺跡の2遺跡より発掘された土器に墨書された文字の筆跡を鑑定し、対照した結果、私見を交え考察したうえにおいて下記のとおりと推定されるので報告する。

記

1．筆跡対照資料

(1) 資料第1号　青木北遺跡より出土した土器に墨書された筆跡
（コピーにより複製(写)された墨書の筆跡）

(2) 資料第2号　東久保遺跡より出土した土器に墨書された筆跡
（コピーにより複製(写)された墨書の筆跡）

2．鑑定事項

(1) 青木北遺跡の墨書の筆跡は複数の者により書かれたものか同一人か否か。

(2) 東久保遺跡の墨書した者と、青木北遺跡の墨書した者は同一人か否か。

(3) 両遺跡について墨書した者は同一時に書いたか、日時を隔てて書いたものか否か。

(4) 東久保遺跡より出土した土器墨書についての概要。

(5) 墨書された筆及び筆致についての所見。

(6) 墨書した者は男性か女性か、なお性格年令等についての所見。

(7) 墨書した者は筆の文字を習得した者か否か。

3．鑑定検査方法

指定された筆跡は遺跡より発掘された土器に書かれた古いものであり、検査にあたり、両資料の共通する同一訓読文字の同一性を比較検査することが最も容易にして合理的と思考し、共通する文字の共通同一性、並びに相違性について子細に比較検査した。

また、検査にあたり文字の個々について、筆致上の文字の形態、文字構成からしての画線の長短、画折廻転間隔角度、筆致の強弱、起筆部の筆の動向、及び終筆の止め撥ね筆圧等筆者の筆意に対する恒常性（一定で変りがないこと）を子細に検査して、総合的な結論を得ることにした。

4．墨書文字の識別

資料概見

指定された筆跡は遺跡住居址出土より発掘された土器に書かれたもので、年代的に9世紀後半から10世紀後半の古いものと推定されるとの事であり、鑑定人としては筆跡のみを概観し、鑑定検査事項のみについて記述する。

(1) 青木北遺跡の墨書筆跡は同一人によって書かれたものと推定する。

文字も「上」「皿」など僅かな文字しかなく、筆致構成に対し画線を組み合せた幼稚の書法であり、他に対照すべき筆跡なく共通し同一人の筆跡と推定する。

(2)(3) 東久保遺跡の墨書した人と、青木北遺跡の墨書した人は相違し複数（2人以上）の者の筆跡と推定する。

東久保遺跡よりは「丈」外十余文字が墨書されており、仔細に筆致構成を検査するに、画線の横画左側起筆部に筆圧を加え、太く右側に細く上下して書かれている。この筆法は「上」「六」「丈」「子」「宍」「井」「吉」などの文字と、人名と思料される「大麻呂」「家吉」「六万」などにこの筆法が見られる。この筆法に対し青木北遺跡の文字は前者と

は異り、逆筆致で左側起筆部は細く書かれ、終筆止め部を太く書くは相違する筆跡と推定する。

両遺跡についての墨書は、文字又は記号（古代人）を考え、同一時かについては判定は困難である。

(4) 東久保遺跡の墨書を概観し、第4号住居址より第28号住居址出土土器の筆跡には筆致形態からして、共通点が認められ、同一人により書かれたものと推定する。

(5) 出土土器に墨書された筆跡は古いものであり、筆致に使用した筆記具は毛筆と思料されるが、獣毛によるものか繊維質の筆か否か判定困難であるが、筆致上の線が割合なめらかに書かれており毛筆と推定される。

(6) 墨書した筆跡は筆致状態からして、男性の筆跡と推定されるが、能力ある者の筆跡とは認め難く、文字構成上からして他人等より習得、教えを受けた者の筆致とは認められず、絵か字か見様見真似で書いたものと考察される。

(7) 墨書した人は毛筆字体を習得した者の筆跡とは認められない。

5．鑑定検査結果

以上指定に基き、筆跡文字の検査を鑑定項目に従い実施した。結論としては文字の識別の項において述べたように、古い時代にも、現在用語文字とし使用されている漢字であり、古代人が該筆跡文字を使い読み書きされていた事実であり、不思議ではないと考察思料される。しかしながら当時代において一般社会通念からし、教えを受け習得した筆跡とは認められない筆跡と推定する。

以上筆跡の鑑定検査は平成2年7月1日着手し、今年今月23日これを終了した。

平成2年7月23日

鑑定人

文書鑑定行政書士　山本　　潔

3　掘立柱建物址

掘立柱建物は甲府盆地には比較的少ないが、北巨摩から長野方面に多くある。1集落の中で、1住居に1棟或は2～3住居に1棟の割合でもつもの（武川村宮間田遺跡等）が多くある。隣接する東久保遺跡も2～3棟の住居址に伴って掘立柱建物址が1棟あるとみられる（柱穴と思われるものもあるが、掘立柱建物址として連結していないものもあるので、これを考慮に入れるとすると）。しかし、青木北遺跡にはこのような配置はなく、集落全体で共有しているようである。

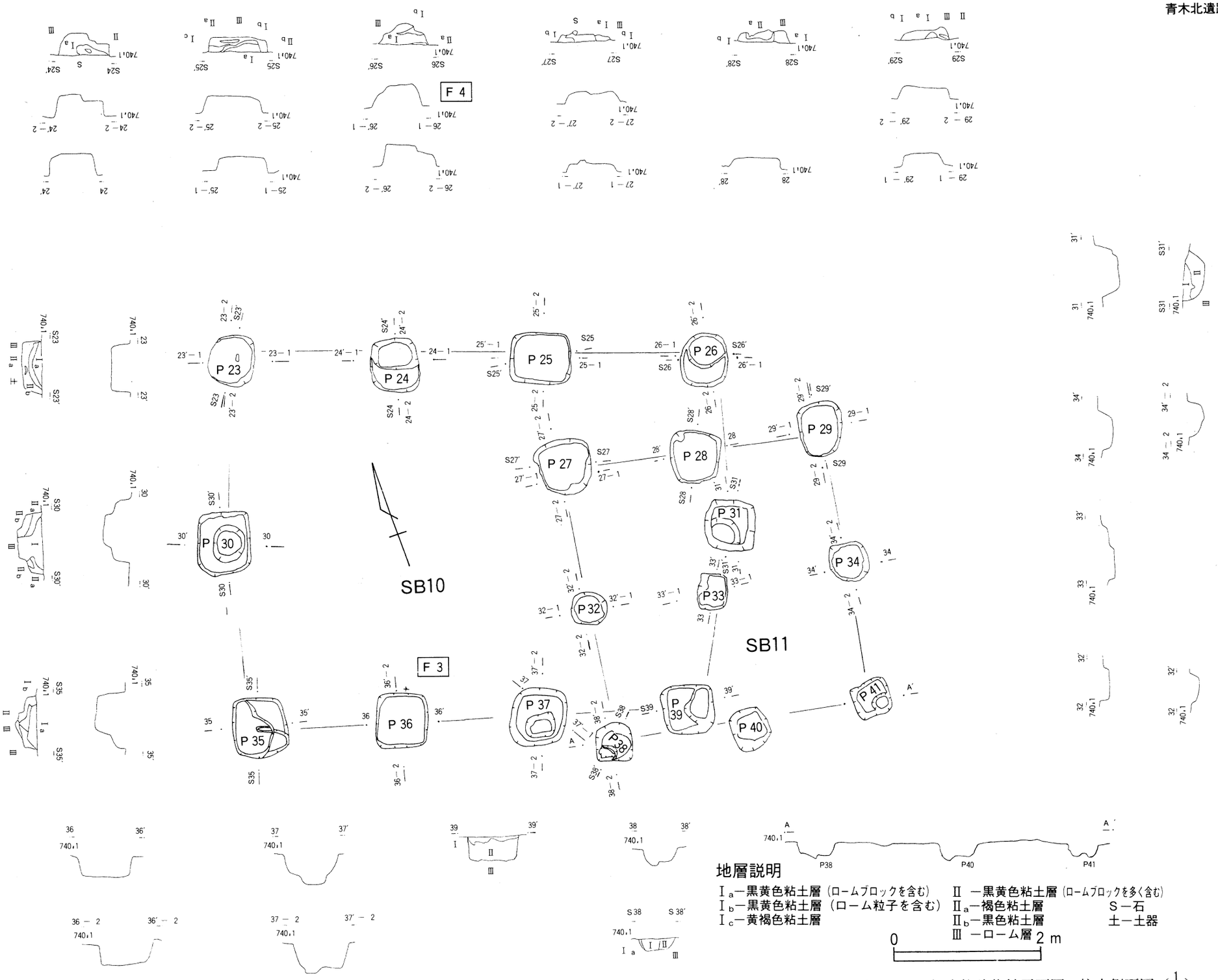
青木北遺跡では掘立柱建物址は5棟検出された。その他に7号住居址の東に柱穴と思われる穴が3基並んで検出されたが、建物かどうかを決めることができなかった。この5棟の内12号と18号建物は簡単な小屋だったと思われる。10号建物にみられる梁間（妻側）の中心にある柱穴はやや外側に出ているので、棟持柱だったと考えられ、本県では、平安時代のものとしては例のない建物のようである。棟持柱のある掘立柱建物は、既に縄文中期末から後期にかけて、富山県桜町遺跡や新潟県岩野遺跡で数棟検出されており、これらは高床式で住居の可能性もあることが指摘されている

（「高床式建物の起源」駒井敏朗1990『季刊考古学32』）。しかし10号掘立柱建物とは趣を異にしている。又「日本技術の社会史７・建築」（宮本長二郎　1983）では『棟持柱は現在アムール河流域、中国雲南省から東南アジアにかけて、広く東アジア全域にわたって分布しており、日本に米作とともに移入された当時は、平屋・高床ともに付設していたが、次第に祭祀的用途に限定されると同時に高床にのみ採用されたものと推定される』とある。また４号住居址も、渡来人に関係する住居かもしれないことを考えると、青木北遺跡は巨摩地方に居住していたといわれる高麗人の集落であった可能性もあろう。

10号掘立柱建物址　Ｂ区の南側にあり、11号掘立柱建物址と重複している。遺構が少ない場所に占地しているのは、この建物の特殊性によるものかもしれない。とすれば11号掘立柱建物址と同様に特殊な性格をもつ建物であったのであろう。

平面形は２柱間（梁行約５ｍ）×３柱間（桁行約６ｍ）で、梁行の中心柱穴が30～40㎝外側にあるので棟持柱穴であろう。柱穴は全てが大きく、しっかり掘ってある感じで、この内№24、№26、№31、№30、№37、№39は柱穴の底に、さらに柱を立てた位置が掘ってある。柱穴の芯芯間の距離な必ずしも正確に同じではない。このピットはいずれもほぼ円形であるから、柱の埋められた部分も円形に近いものであったかも知れない。この建物は倉庫なようなものではなく、前述したような信仰関係の建物と考えられる。集落の精神的支えとなり、また伝統的建築技術によって建てられる信仰関係の建物が大陸系文化の影響を受けているとすれば、この建築技法はこの集落の出自を表わしていると考えられる。なお11号掘立柱建物址との前後関係は把握できなかった。また確実な伴出遺物は出土しなかったが、他の遺構とのレベルを比べて、同時期と考えてさしつかえないと思われる。

11号掘立柱建物址　10号掘立柱建物址と一部が重複している。２柱間（芯々間約3.9ｍ）×２柱間（芯芯間約3.9ｍ）で、中央にも束穴と考えられる柱穴があるので、いわゆる総柱建物である。柱穴は10号掘立柱建物址に比べると全体的にやや小さく、貧弱であるが、柱間などは他より正確で、高級な建物の感がある。この内№38と№41柱穴には底に柱を立てたと思われる位置に穴が掘ってあり、いずれも円形である。前述した柱間の距離はこの底の小ピットの芯々間距離である。高級な建物の感があり、また10号掘立柱建物址と同じ場所にあるので、両者は同じ性格の建物と考えられる。



第50図　10号・11号掘立柱建物址平面図、柱穴側面図（$\frac{1}{50}$）

12号掘立柱建物址　B区の中央部にある。18号掘立柱建物址が近くにあるが、遺構の少ない場所にある。柱穴は3基しか検出できなかったが、その位置関係や柱穴の大きさ、深さなどから1建物とした。大きさは2.8m×3.9mくらいであるが、柱穴も小さく貧弱であるので、簡単な物置小屋程度のものであったと思われる。

18号掘立柱建物址　B区中央部にあり、遺構の少ない区域にある。大きさは1柱間（東西3.6m）×1柱間（南北2m）で、ゆがんだ貧弱なプランであり、ピットも小さいので、建物であるか否か若干疑問である。

19号掘立柱建物址　A区中央部にあり、土壙等が集中する区域にある。大きさは2柱間（南北約3.9m）×3柱間（東西約4m）であるが、南側は出張っていて、不整形である。東側などの柱穴は土壙と重複していたり、また柱穴も大小があったり、深さも一定していないが、一応建物址とした。

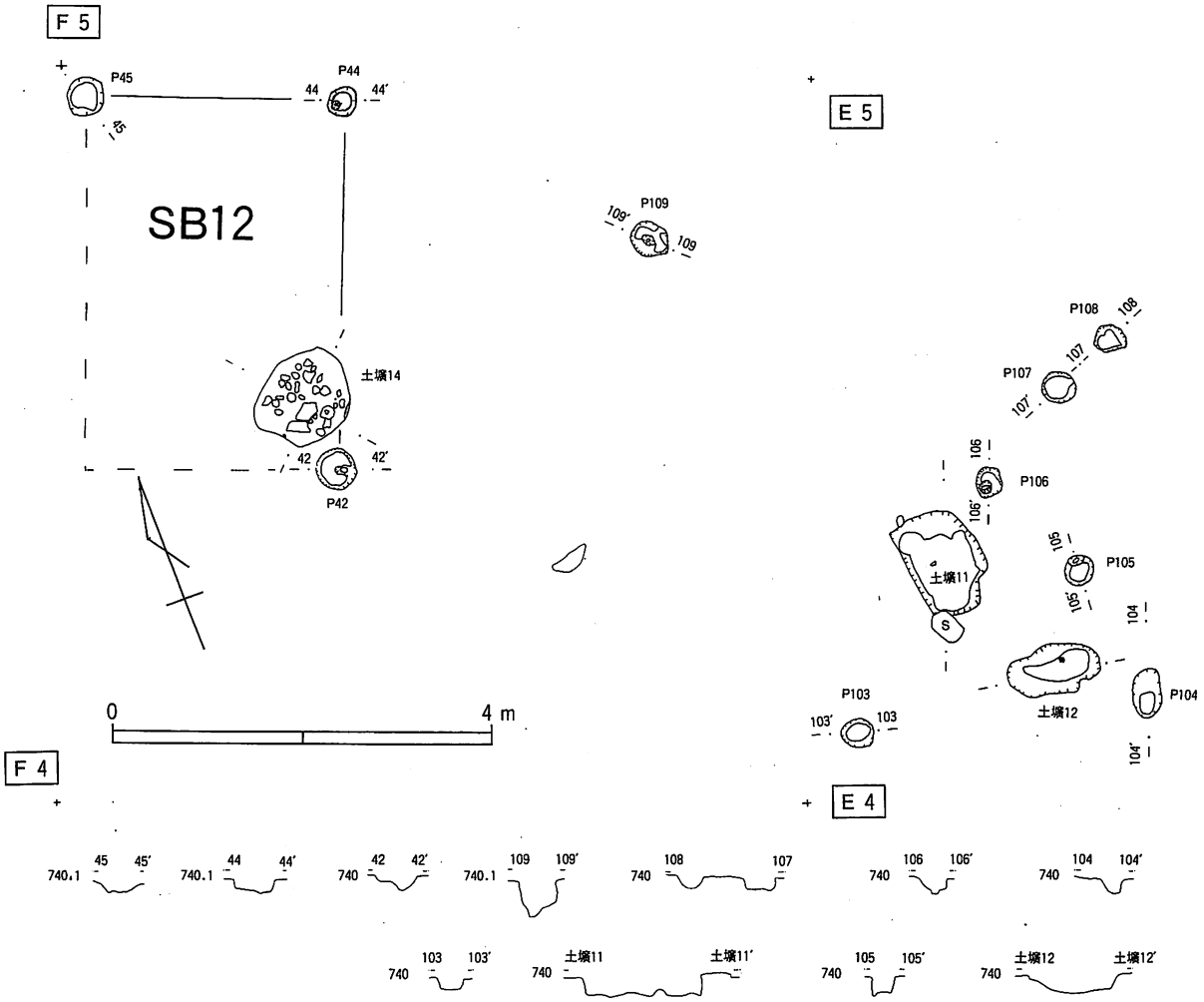
4　土壙・ピットと遺物

土壙とピットを合せて45基くらい検出し、この内ほぼ半数の大き目のものを土壙とした。両者とも深さは多様で、土壙の中には1号や14号土壙のように、石が並べてあるものや、石が乱雑に積上げられているものもある。

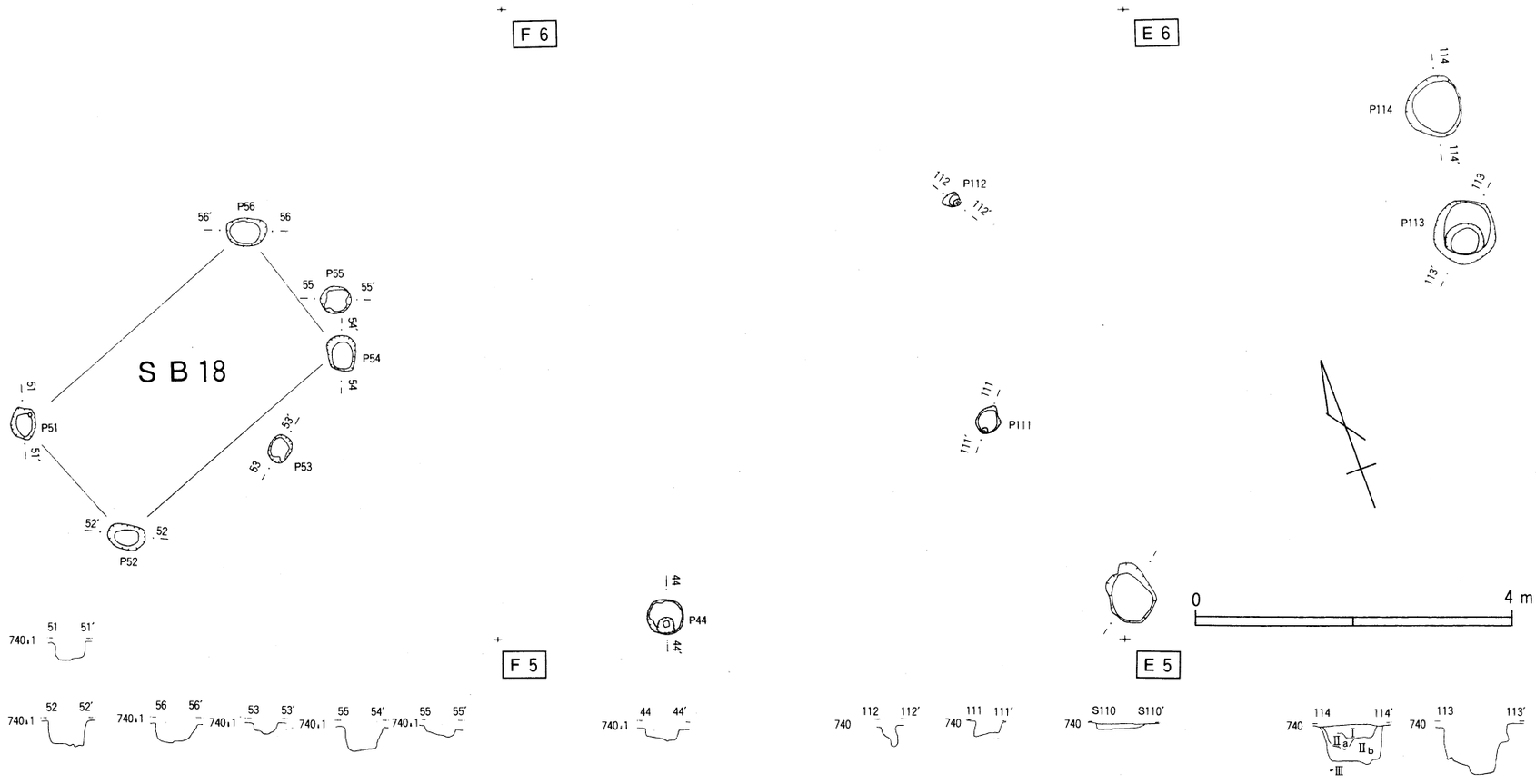
19号掘立柱建物址の北東には7基の土壙群があり、この中の細長い土壙は比較的浅く、覆土から中期縄文式土器片が出土したものもあるので、該期の土壙墓である可能性もある。土壙No.2とピットNo.17（土壙的である）の底面には焼土がある。また7号住居址の南西にあるNo.11土壙では積重なった焼けた石が検出され、炭がその間に充満していて、周囲には20〜30cmの巾で焼土が巡っているので、焼石料理の施設跡かもしれない。1号住居址では4基の土壙が検出されたが、全て床面下にあった。

土壙には群を成しているものがあり、東久保遺跡にも集落内に6カ所あることは注意すべきである。

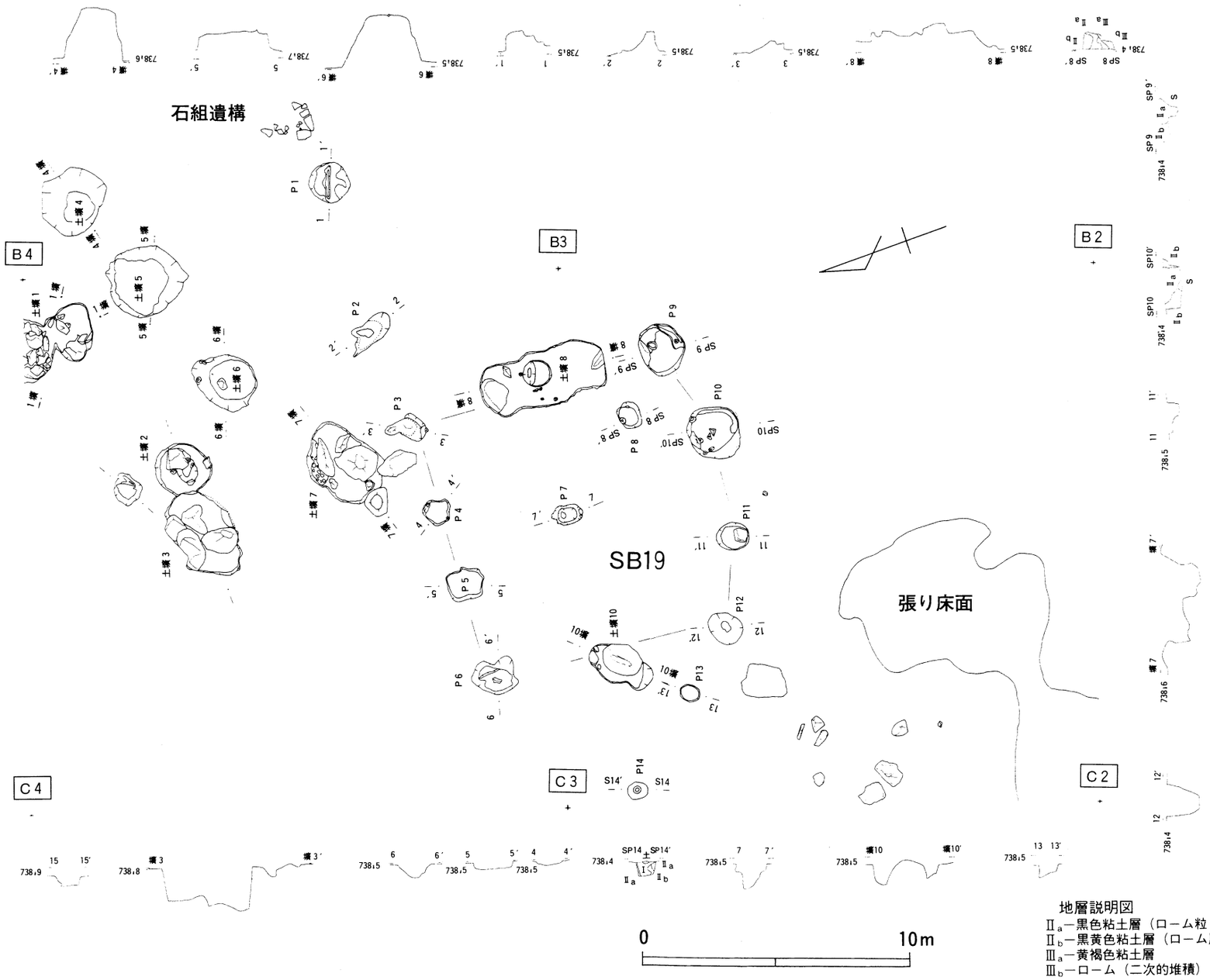
ピットは遺跡内全体に広がって散在していて、掘立柱建物址にもならないものであるが、その構築目的は不明である。



第51図　D・E・F－4グリッド平面図（12号掘立柱建物址他）（$\frac{1}{80}$）

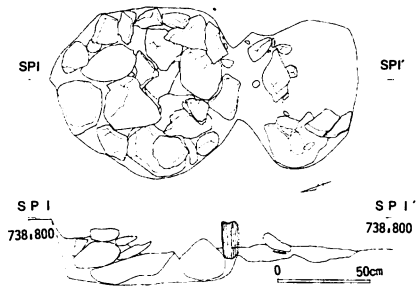


第52図　D・E・F－5グリッド平面図（18号掘立柱建物址他）（$\frac{1}{80}$）

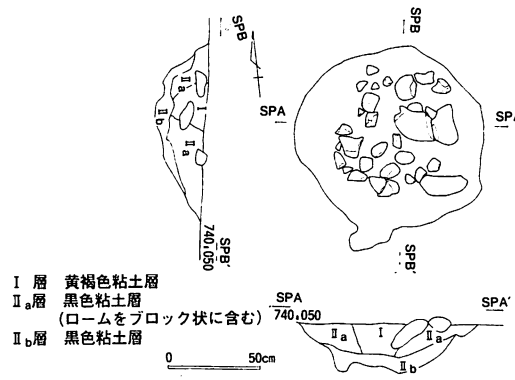


地層説明図
Ⅱa－黒色粘土層（ローム粒を含む）
Ⅱb－黒黄色粘土層（ローム層を含む）
Ⅲa－黄褐色粘土層
Ⅲb－ローム（二次的堆積）

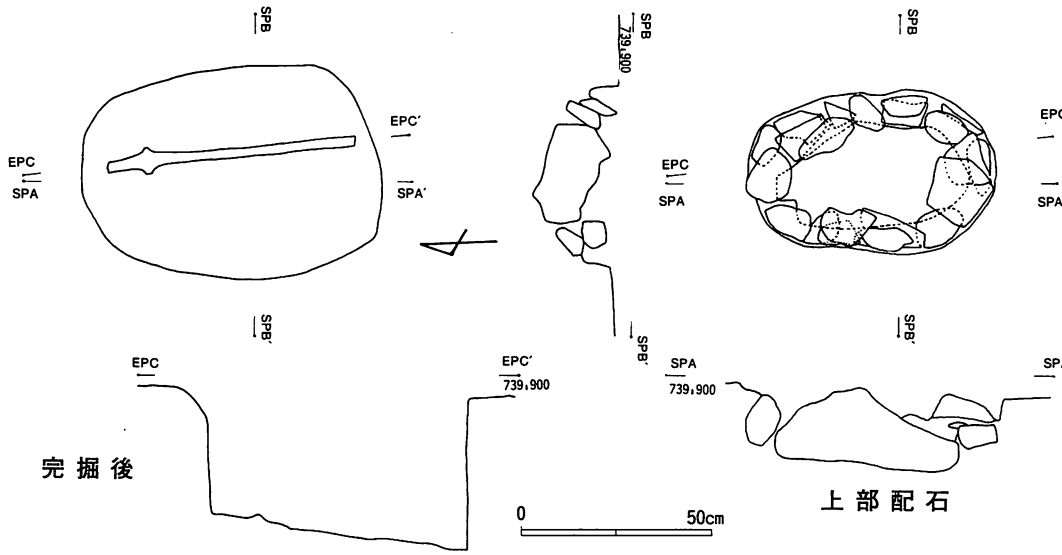
第53図　C－2・3、B－2・3グリッド平面図（19号掘立柱建物址他）（$\frac{1}{80}$）



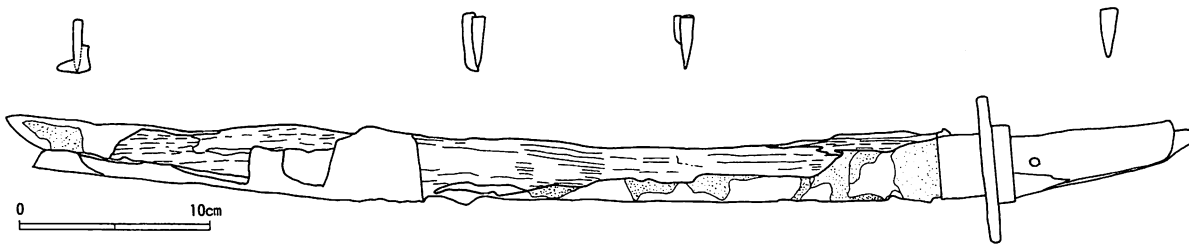
第54図　1号土壙平面図・側面図($\frac{1}{40}$)



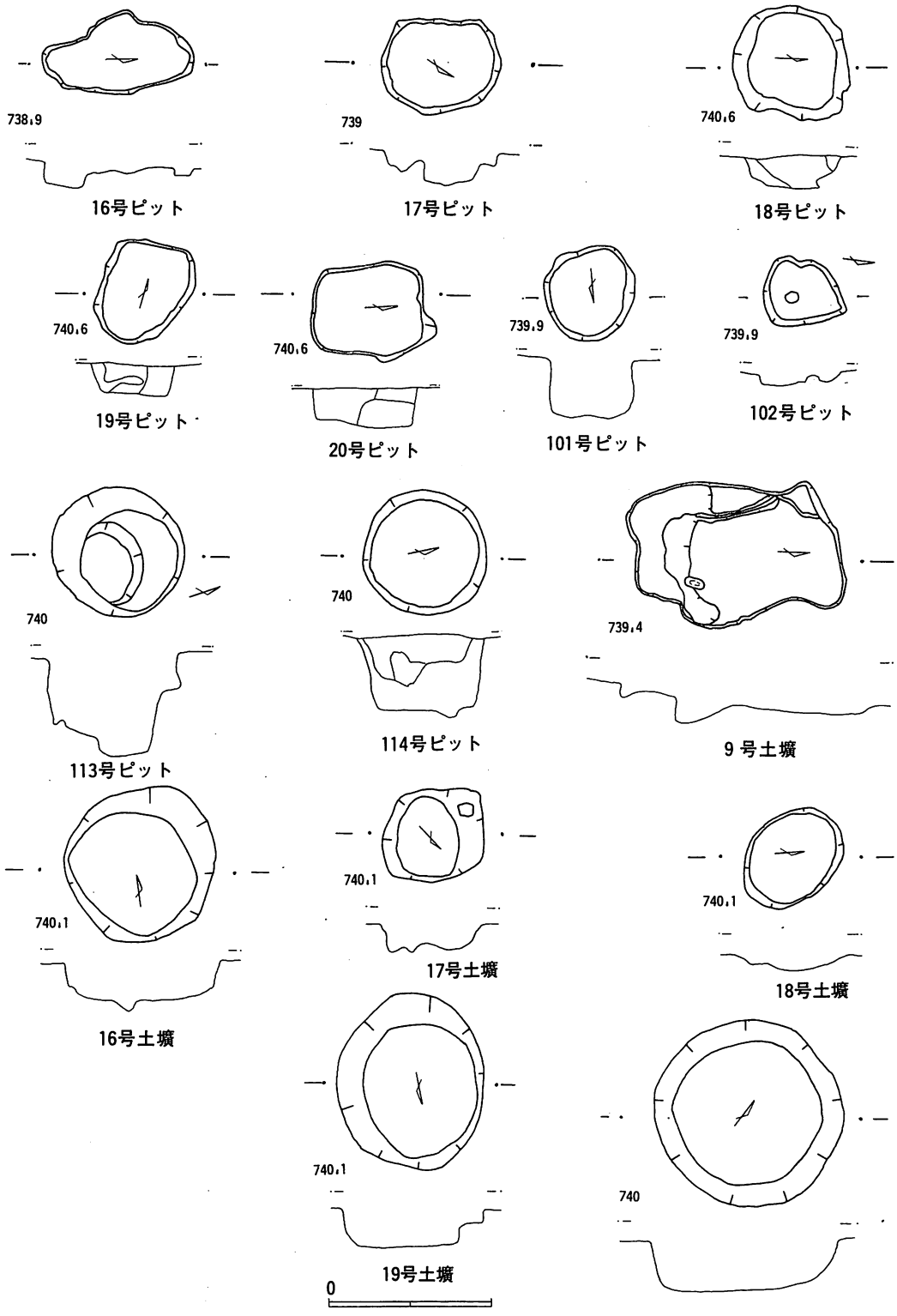
第55図　14号土壙平面図・側面図($\frac{1}{40}$)



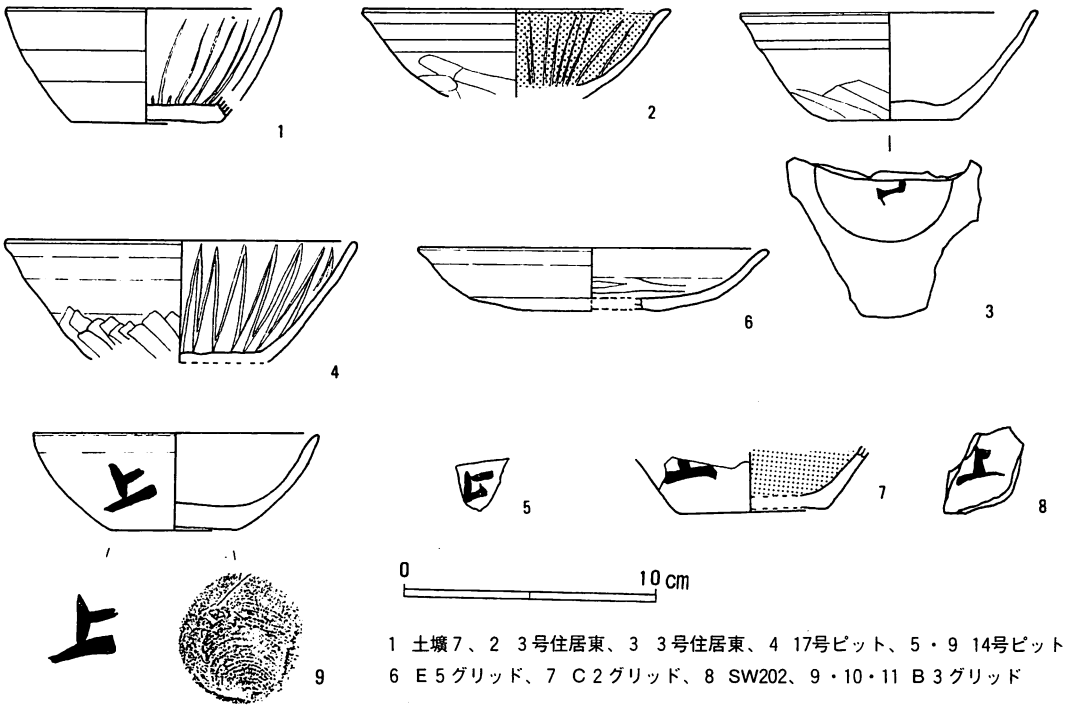
第56図　15号土壙平面図・側面図($\frac{1}{20}$)



第57図　15号土壙出土脇差実測図(¼)



第58図　土壙及びピット平面図・側面図（$\frac{1}{80}$）



1 土壙7、2 3号住居東、3 3号住居東、4 17号ピット、5・9 14号ピット
6 E5グリッド、7 C2グリッド、8 SW202、9・10・11 B3グリッド

第59図　土壙・グリッド出土遺物実測図（⅓）

第8表　青木北遺跡出土遺物一覧表

◦□内墨書は推定

◦備考の数字は平面図土器番号

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量 cm 口径	器高	底径	調整 口縁	外面	内面	底	胎土 色調 焼成	備考
9-2	1号住居 フク土	土師	甕	30.4	—	—	器肉厚長い	口縁部横刷毛目 縦刷毛目	口縁部横刷毛目 胴部横刷毛目		砂粒を含む 暗褐色 良	1、2、4
9-3	〃 フク土	陶器	坏（底部）	—	—	8.2	—	施釉	施釉	糸切↓篦削	砂粒を含む 灰色 良好	底中心に1本線の陰刻 3
9-4	〃 フク土	土師	甕	27.4	—	—	器肉厚長い	口縁部横なで 胴部縦刷毛目	口縁部、胴部 横刷毛目	—	砂粒を含む 暗褐色 良	
9-5	〃 3号ピット	土師	坏	15.0	—	—	玉縁	ロクロ水びき	黒色	—	砂粒を含む 赤黒色	8
9-6	〃 フク土	土師	甕	27.4	—	—	肥厚	口縁部横なで 胴部縦刷毛目	口縁部、胴部 横刷毛目	—	砂粒を含む 薄褐色 良	5
9-7	〃 カマド	土師	坏	15.6	—	7.4	玉縁	ロクロ水びき	黒色	糸切		14、15
12-1	2号住居 床面直上	土師	坏	13.0	3.8	6.4	先尖	ロクロ水びき	黒色	糸切 反転	やや荒い 黄褐色 良好	11
12-2	〃 床面直上	土師	坏	12.4	4.2	4.0	隆玉縁	下半斜位篦削り		糸切	緻密 黄褐色 良好	3

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量 cm 口径	器高	底径	調整 口縁	外面	内面	底	胎土 色調 焼成	備考
12	2号住居	灰釉	高台付	14.4	5.2	6.6	隆玉縁	ロクロ水びき 上半部施釉	上⅔釉あり	反転	緻密 灰白色 良好	7
12	〃 カマド	土師	坏	—	—	7	—		黒色	糸切	砂粒を含む 黄褐色 良好	
12	〃 カマド	土師	坏	13	4.1	5.8	玉縁	化粧粘土貼付 ロクロ水びき		糸切 反転	やや粗い 黄褐色 良好	5
12	〃 フク土	土師	坏	14.8	6	3.2	隆玉縁	下半部斜位篦削り	回転ナデ	回転糸切 ↓ 篦磨き	砂粒を含む 灰褐色 良好	2
14	3号住居 フク土	土師	坏	13	4.2	5.4	先尖	ロクロ水びき 下部篦磨き	黒色	糸切	緻密 黄褐色 良好	墨書「上」
14	〃 フク土	土師	坏	12.4	4.9	5.2	先尖	ロクロ水びき		反転	やや荒く 小石を含む 白褐色 良好	墨書「下」 21
14	〃 フク土	土師	甕	—	—	11.4	—	縦刷毛目	横刷毛目	木葉痕 反転	粗い 赤褐色 良好	4
14	〃 フク土	土師	坏	13	4.5	5.8	先尖	篦削→回転ナデ 下半部斜位篦削り	篦削→回転ナデ 斜位暗文 黒色	糸切	小石、砂粒を含む 白褐色 良好	2
14	〃 フク土	土師	皿	14		5.2						
19	4号住居 カマド	土師	高台付 坏	17.8	3.6	9	玉縁	ロクロ水びき 下半部篦削り	花弁状暗文		砂粒を含む 赤褐色 良好	7、10
19	〃 カマド	土師	高台付 坏	16	3.6	3.6	玉縁	ロクロ水びき 下半部回転篦削り	花弁状暗文		砂粒を含む 赤褐色 良好	23
19	〃 カマド	土師	皿	12.3	2.6	—	隆玉縁	ロクロ水びき ↓ 篦磨き、篦削り	横ナデ ロクロ水びき	篦削	緻密 赤褐色 良好	灯明皿
19	〃 床面直上 フク土	土師	坏	—	—	4.1	—	ロクロ水びき 下部篦削り		篦削	砂粒を含む 赤褐色 良好	墨書「上」 74
19	〃 床面直上	土師	坏	15.1	5.4	5.7	丸形	ロクロ水びき	黒色	糸切 ↓ 篦削	砂粒・石を含む 褐色 良好	73
19	〃 フク土	土師	皿	14	—	5.2	玉縁	ロクロ水びき 下部篦削り	円状暗文	篦削	砂粒を含む 黄褐色 良好	墨書上
19	〃 床面直上	土師	甕	—	—	5.7	—	ロクロ水びき		回転 糸切	砂粒・石を含む 暗黄褐色 良好	1
19	〃 床面直上	土師	坏	13	4.3	4.7	玉縁	ロクロ水びき 下半部篦削り	放射状暗文	篦削	砂粒を含む 赤褐色 良好	墨書「不」 82、83
19	〃 床面直上	土師	坏	11.8	3.9	4.6	玉縁	ロクロ水びき	黒色	低高台	砂粒・石を含む 黄褐色 良好	75
19	〃 床面直上	土師	甕	—	—	8.9	—	底部斜め刷毛目	下部横刷毛目、上部斜刷毛目	木葉痕	砂粒を含む 暗褐色 良好	74
19	〃 床面直上	土師	甕	—	—	8.1	—	ロクロ水びき	暗褐色 ロクロ水びき	回転 糸切	砂粒を含む 赤褐色 良好	3
20	〃 フク土	土師	坏	11.3	3.7	4	玉縁	ロクロ水びき 下半部篦削り	花弁状暗文	回転糸切 ↓ 篦削	砂粒を含む 赤褐色 良好	墨書「上」 61、63

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量 cm 口径	器高	底径	調整 口縁	外面	内面	底	胎土 色調 焼成	備考
20	4号住居	土師	坏	11.9			隆玉縁	ロクロ水びき	花弁状暗文	—		墨書[上]
2	フク土			—				下半部篦削り			黄褐色	
				—							良好	
20	〃	土師	坏	11.4			先尖	下半部篦削り	花弁状暗文	—	小石を含む	墨書「上」
3	フク土			—				ロクロ水びき			赤褐色	52
				—				→篦磨き			良好	
20	〃	土師	皿	14.4			玉縁	ロクロ水びき	円状暗文	篦削	砂粒を含む	墨書
4	フク土			2.3				下部篦削り			赤褐色	14
				7							良好	
20	〃	土師	坏	11.5			丸形	ヘラ整形	黒色	—	砂粒を含む	墨書「上」
5	フク土			—							赤褐色	77
				—							良好	
20	〃	土師	坏	—			—	ロクロ水びき		回転糸切	砂粒を含む	墨書「上」
6	フク土			—				下部斜篦削り		↓	赤褐色	14
				5.3						篦削	良好	
20	〃	土師	坏	15.3			丸形	ロクロ水びき	白褐色	篦削	砂粒・石を含む	
7	フク土			5.9				下部篦削り			赤褐色	
				7.6							良好	
20	〃	土師	坏	15.7			先尖	ロクロ水びき	黒色	篦削	砂粒・石を含む	
8	フク土			5				胴部篦磨き			褐色	16
				7.3				下部篦削り			良好	
20	〃	土師	坏	11.8			丸形	ロクロ水びき	花弁状暗文	—	砂粒を含む	
9	フク土			—				下半部篦削り			赤褐色	
				—							良好	
20	〃	土師	(底部)	—			—	ロクロ水びき	円状暗文	糸切	砂粒を含む	墨書「上」
10	フク土			—				下部篦削り		↓	赤褐色	53
				6.5						篦削	良好	
20	〃	土師	坏	21.3			丸形	ロクロ水びき	黒色	—	砂粒・石を含む	58
11	フク土			—				下半篦削り			白褐色	墨書「上」
				—							良好	
20	〃	土師	坏	15.8			玉縁	ロクロ水びき	花弁状暗文	付高台	砂粒を含む	
12	フク土			6.1							赤褐色	7
				7							良好	
20	〃	土師	皿	18.7			玉縁	ロクロ水びき	円状暗文	篦削	赤・黒粒子を含む	
13	フク土			2.2				↓			赤褐色	64
				4.1				下部ヘラ削り			良好	
20	〃	土師	坏	15			丸形	ロクロ水びき	黒色	糸切	石を含む	
14	フク土			5.3				横位回転篦削り		↓	褐色	16
				7.1						篦削	良好	
20	〃	土師	坏	13.5			丸形	ロクロ水びき	黒色	回転糸切	砂粒を含む	
15	フク土			4							黄褐色	76、42
				5.1							良好	
24	5号住居	土師	皿	12.8			玉縁	ロクロ水びき	ロクロ水びき	反転	緻密	
1	床面直上			2.5				下半部篦削り	円状暗文		赤褐色	6
				5.8							良好	
24	〃	土師	坏	12.5			隆玉縁	ロクロ水びき		篦削	緻密	
2	カマド			4				下半部斜篦削り			赤褐色	35
				3.8							良好	
24	〃	土師	皿	12.5			隆玉縁	下半篦削り	ロクロ水びき	糸切	緻密	墨書「労」
3	フク土			3.6						↓	赤褐色	15
				2.6						篦削	良好	
26	6号住居	土師	蓋	17.8			玉縁	上部篦削り		—	緻密	
1	カマド			—							赤褐色	8
				—							良好	
26	〃	土師	坏	15.9			丸形	ロクロ水びき	暗文	—	赤粒子を含む	
2	カマド			—							褐色	4
				—							良好	
26	〃	土師	甕	14			丸形	口縁部ナデ	横刷毛		砂粒・雲母を含む	
3	カマド			—			短い	胴部縦刷毛目			赤褐色	12
				—								
26	〃	土師	甕	—			—	縦刷毛目		木葉痕	砂粒・金雲母を含む	
4	カマド			—							暗褐色	6、3
				8.2							良好	

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量 cm 口径	器高	底径	調整 口縁	外面	内面	底	胎土	色調	焼成	備考
30	7号住居	土師	坏	15.8	—	—	丸形	ロクロ水びき ↓ 篦磨き	黒色	—	やや粗い	黄褐色		
30	〃	土師	坏	13.7	—	—	丸形	ロクロ水びき	磨き	—	砂粒を含む	赤褐色	良好	墨書「上」
30	〃	土師	坏	13	4	5.7	玉縁	ロクロ水びき	黒色	糸切	緻密	褐色	良好	墨書上
30	〃	土師	坏	13.8	—	—	丸形	ロクロ水びき			砂粒を含む	黄褐色	良好	墨書上
30	〃	須恵	壷	10.2	17.5	8.2	丸形	ロクロ水びき		篦削	砂粒 白粒子 を含む	灰色	良好	15
30	フク土	土師	坏	12.2	—	—	玉縁	ロクロ水びき	黒色		緻密	白	良好	10
33	8号住居 カマド	土師	台付坏	13.4	3.2	6.7	丸形	ロクロ水びき	黒色	糸切	緻密	褐色	良好	
36	9号住居	土師	鉢	20	—	—	玉縁	下1/3横ナデ 上ロクロ水びき	黒色 篦磨き	—	緻密	黄褐色	良好	9
36	〃	土師	甕	—	—	8.5	—	縦刷毛目 下部指頭痕	横刷毛目 下部・底指頭痕	木葉痕 反転	粗 雲母を含む	暗褐色	良好	10
36	〃	土師	坏	12.6	—	—	玉縁	上半部横ナデ 下半部斜篦削り	横ナデ	— 反転	緻密	赤褐色	良好	6
38	13号住居	土師	坏	11.2	3.9	5.8	玉縁	ロクロ水びき 下半部斜篦削り	放射状暗文	回転糸切 ↓ 篦削	微砂粒を含む	赤褐色	良好	4、7
38	〃	土師	坏	11	4.3	6	玉縁	ロクロ水びき 下半部斜篦削り	花弁状暗文	回転糸切 ↓ 篦削	微砂粒を含む	赤褐色	良好	1
38	〃	土師	皿	—	—	6.1	—	ロクロ水びき			砂粒を含む	赤褐色	良好	墨書
38	〃	土師	皿	—	—	6.8	—	下部篦削		糸切 ↓ 回転篦削	赤色粒子を含む	赤褐色	良好	6
42	14号住居	土師	皿	14.3	—	—	隆玉縁	ロクロ水びき 下部篦削り	下半部篦磨き	—	微砂粒を含む	赤褐色	良好	4
42	〃 カマド	土師	皿	15	2.9	6.8	玉縁	ロクロ水びき ↓ 篦削り	磨き		微砂粒を含む	赤褐色	良好	13
42	〃 カマド	土師	皿	14.2	2.2	8.8	玉縁	ロクロ水びき 下半部篦削り		糸切 ↓ 篦削	赤色粒子を含む	赤褐色	良好	
42	〃	土師	皿	—	—	3.2	—	ロクロ水びき 下部篦削り	磨き		砂粒を含む	赤褐色	良好	墨書不
42	〃	土師	甕	25.5	—	—	器肉厚 長い	口縁横刷毛目 胴部斜刷毛目	口縁・胴横刷毛目	—	砂粒 雲母を含む	暗褐色	良好	15
42	〃 床面直上 カマド	土師	甕	15.4	15.6	7	器肉厚 短い	ロクロ水びき		回転 糸切	砂粒を含む	赤褐色	普通	9
42	〃 カマド	土師	甕	13.5	11.2	3.5	器肉厚 短い	下半部縦刷毛目	ナデ	篦削り	砂粒を含む	白褐色	やや悪	23

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量 cm 口径	器高	底径	調整 口縁	外面	内面	底	胎土 色調 焼成	備考
42	14号住居	土師	坏	11.2	3.8	4.9	丸形	ロクロ水びき	磨き	回転糸切	精製 白褐色 良好	墨書「上」
42	〃 フク土	須恵	台付坏か	—	—	6.9	—	ロクロ水びき	ロクロ水びき	回転糸切 ↓ 付高台	白色粒子を含む 暗灰色 良好	
45	15号住居 カマド	土師	坏	—	—	5.6	—		黒色	糸切	黄褐色 良好	2
45	〃 カマド	土師	坏	11.8	4.1	5.4	玉縁	ロクロ水びき	黒色	糸切	緻密 灰褐色 良好	6、7、17
45	〃 カマド	土師	坏	11.7	4.2	6	玉縁	ロクロ水びき	黒色	糸切		
45	〃 カマド	土師	坏	14	5.5	7.6	玉縁	ロクロ水びき ↓ 篦磨き	黒色	糸切	黄褐色	1、3、15
45	〃 カマド	土師	甕	17	—	—	器肉厚長い	斜篦削り 反転	一部斜刷毛目	—	緻密 褐色 良好	8、12
45	〃 フク土	土師	台付皿	11.8	2.7	5.2	丸形		黒色	反転		
45	〃 フク土	土師	坏	11.9	4.5	4.3	玉縁	ロクロ水びき 下半部斜篦削	ロクロ水びき			2
45	〃 床面直上	土師	坏	11.8	4.2	6	丸形	ロクロ水びき	黒色	糸切	やや粗い 黄褐色 良好	墨書「上」 1
45	〃 フク土	土師	坏	—	—	4.7	—	ロクロ水びき 下部篦削り	黒色	反転	黄褐色 良好	
45	〃 床面直上 フク土	土師	坏	15	5.3	7	丸形		黒色	糸切		3
45	〃 フク土	土師	坏	13.9	—	—	玉縁	ロクロ水びき	黒色	—		墨書上
48	16号住居 フク土	土師	坏	11	—	—	玉縁	下半部斜篦削り	横ナデ	反転	緻密 褐色 良好	
48	〃 床面直上	須恵	台付坏	14.9	8.2	6.3	丸形	ロクロ水びき ↓ 篦調整	ロクロ水びき	糸切	緻密 灰色 良好	2
48	〃 フク土	土師	甕	—	—	8.8	—	縦刷毛目	横、斜刷毛目		粗い 茶褐色 良好	
48	〃	石製品	紡錘車					直径2.6、厚1.9、穴直径0.5			灰色	
49	17号址 フク土	土師	坏	12.8	4.6	5.7	玉縁	下⅔篦削り	放射状暗文	篦削	緻密 赤褐色 良好	墨書下 1
49	〃 床面直上	土師	坏	13	4.6	5.6	玉縁	下⅔斜篦削り		篦削		1
49	〃 床面直上	土師	台付皿	13.3	6.5	2.8	玉縁	横ナデ	黒色		緻密 褐色 良好	4
49	〃 床面直上	土師	坏	16.2	—	—	丸形	横ナデ 反転	黒色	—	緻密 褐色 良好	2

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量 cm 口径	器高	底径	調整 口縁	外面	内面	底	胎土	色調	焼成	備考
49	17号址	土師	坏	11	4.3	6.2	丸形		放射状暗文 上半部黒	糸切	緻密	褐色	良好	
49	〃	土師	坏	11.4	—	—	玉縁	横ナデ 下部斜篦削	放射状暗文	反転	緻色	赤褐色	良好	
49	〃	土師	台付皿	12.9	2.7	6.3	玉縁	横ナデ	黒色		緻密	褐色	良好	
49	〃	土師	坏	15.4	—	—	丸形	横ナデ	黒色	—		暗褐色	良好	
49	〃	土師	皿	13.4	6.2	2.4	玉縁	上半部横ナデ 下部回転篦削り	横ナデ	反転	緻密	赤褐色	良好	
49	〃 床面直上	土師	坏	13.2	5.7	3.7	玉縁	ロクロ水びき ↓ 横ナデ	黒色		緻密	灰褐色	良好	
49	〃	土師	坏	11.8	4.1	4.4	玉縁	下⅔斜篦削り		糸切	緻密	赤褐色	良好	
49	〃	土師	甕	28.6	—	—	器肉厚 長い	口縁部ナデ 斜刷毛目	横刷毛目	—	粗い	暗褐色	良好	
49	〃	土師	甕	29.4	—	—	肥厚	口縁部ナデ 斜刷毛目	口縁部、胴部横刷 毛目	—	粗い	茶褐色	良好	
59	土　　壙	土師	坏	11	5	5.2	丸形	ロクロ水びき	放射状暗文		緻密	赤褐色	良好	
59	3号住居の東	土師	坏	11.6	—	—	玉縁	ロクロ水びき ↓ 斜篦削り	黒色 放射状暗文	反転	緻密	黄褐色	良好	
59	〃	土師	坏	11	5	5	玉縁	ロクロ水びき ↓ 斜篦削り			緻密	黄褐色	良好	墨書
59	17号ピット	土師	坏	13.7	4.8	7	玉縁	ロクロ水びき ↓ 下部斜篦削り	花弁状暗文		微砂粒を含む	赤褐色	良好	
59	E－5 グリッド	土師	坏	13.7	2.5	3.6	隆玉縁	ロクロ水びき ↓ 下部篦削り	磨き 円形暗文	篦削	赤色粒子を含む	赤褐色	良好	
59	C－2 グリッド	土師	坏	—	—	5.8	—	ロクロ水びき	黒色		砂粒・石を含む	茶褐色	良好	墨書上

第3節　青木北遺跡と東久保遺跡の関連について

青木北遺跡とこれに隣接する東久保遺跡の住居址群を土師器の型式編年によって、時代別にみると次のようである。まず青木北遺跡では、8世紀代かと思われる16号住居址の1軒、9世紀前半から中葉の1号住居址の1軒、9世紀中葉から後半の3、4、9、13、15号住居址の5軒、9世紀後半から10世紀前半の1、5号住居址の2軒、10世紀前半の2、7、8、14号住居址の4軒である。次に東久保遺跡では、9世紀後半が7軒、10世紀前半が10軒、10世紀後半が13軒である。この内青木北遺跡の16号住居址は出土した遺物が少ないので、8世紀に比定するのは疑問が残るためこれを除いて、両遺跡の集落の消長を整理すると次のようになる。1、青木北遺跡では9世紀中葉から後葉にかけて集落が形成されるが、東久保遺跡ではやや遅れて9世紀後半に集落が形成される。2、青木北遺跡と東久保遺跡の集落は9世紀後半から10世紀前半まで併存している。3、青木北遺跡は10世紀中葉には集落が廃絶したけれども、東久保遺跡は10世紀後半まで続く。4、青木北遺跡は集落存続期間の中頃から戸数が減少する傾向があるが、東久保遺跡では、この頃から逆に増加する。以上時期については住居址に伴うカマドの位置からも推察することができ、南に寄る程新しくなると考えられているように、東久保遺跡のカマドは、青木北遺跡のそれより南寄りに位置する傾向があり、南東隅にあるものも多くある。

この両集落は『八ケ岳南麓における平安集落の展開』（萩原三雄　1986「山梨考古学論集」Ⅰ）の第6章で論じられているように、当地域における平安時代の集落が9世紀後半に急増し、10世紀前半に急減することなど5項目に上げられていることとよく当てはまるものである。

青木北遺跡と東久保遺跡との関係は、同一集落であったかどうか、同一集落でなかったとすれば、何らかの関係がなかったかどうか、をみてみると次のようである。先ず、この2遺跡の住居が連続していたかどうかは前述したように、工事でその接する場所が破壊されてしまっていたので、住居址があったかどうかわからない。集落構成の面からみると、両遺跡には、それぞれ大型住居址が1軒ずつある。青木北遺跡の4号住居址、東久保遺跡の28号住居址である。両住居址からは墨書土器や鉄滓など特殊な遺物が出土しているので、集落の首長層の住居と考えられる。また掘立柱建物址と住居址との関係も、第3章第2節で前述したように両遺跡で異なる点もある。墨書土器の面では、前述した筆跡鑑定のように、その筆跡に共通点がなく、ただ「上」という同じ文字が両遺跡にあるだけである。

以上のように共通する点もあるが大略は異なる点が多い。

第4節　そ　の　他

10号掘立柱建物址の南西で、脇差を底に埋納した15号土壙を検出した。土壙は長径79㎝、巾55㎝で深さは最深部が39㎝である。上層の中央に長径約48㎝の石を置き、その周囲に拳大の石を乱雑に置いている。脇差は刃を下に向け、切先を南にして安置してあった。脇差の長さは630㎜、身巾は28㎜である。鞘には漆が塗られて黒い。この形状から中世末か江戸時代前半期のものと思われる。鞘が刀身に錆び付いていたので、そのまま樹脂を含浸する方法により当セン

ターで保存処理を行った。

第4章　結　　び

八ケ岳東南麓にある青木北遺跡は平安時代前期末葉の9世紀に成立し、中期の10世紀に消滅したと考えられる集落遺跡である。遺構は竪穴住居址12基、掘立柱建物址5棟や、約10基の土壙などが検出された。このうち柱の礎石がある4号住居址及び棟持柱をもつ10号掘立柱建物は大陸文化の影響を受けている可能性がある。また10号掘立柱建物は信仰関係遺物と考えられ、特筆されるものである。前述したように、この遺跡の付近は、八ケ岳東南麓では平安時代中期の遺物散布地が集中している地域である。これは平安時代中期頃急速に人口が増加し、開発が進んだことを意味するものと考えられる。「巨麻」という地名が朝鮮半島にあった「高麗」に由来するとの説に示されるように、増加した人口の中には渡来人がその地名の原因となる程含まれていたのではないかと思われる。青木北遺跡の中には、大陸系文化の影響によると考えられるような性格をもつ遺構があることは注目される。

1

2

図版１　遺跡遠景・近景　　１遠景．２近景

図版２　遺構全景（北より）

1

2

図版 3　　1 号住居址、2 号住居址　　1 ― 1 号住居址．2 ― 2 号住居址

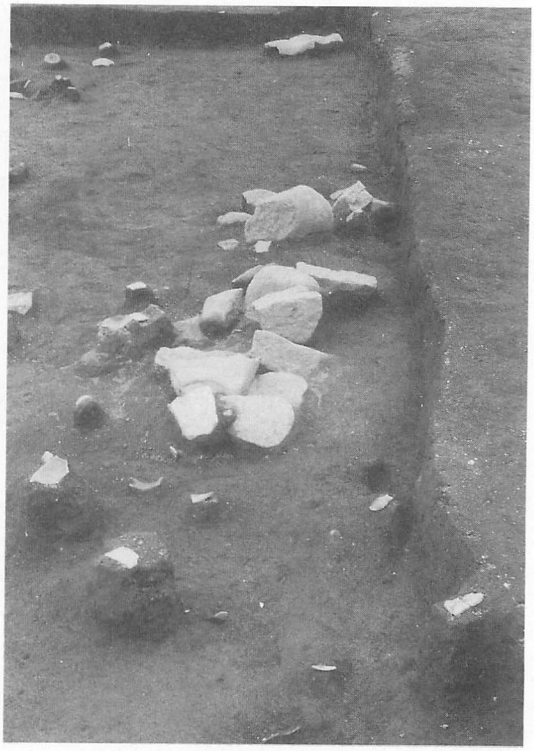
1

2

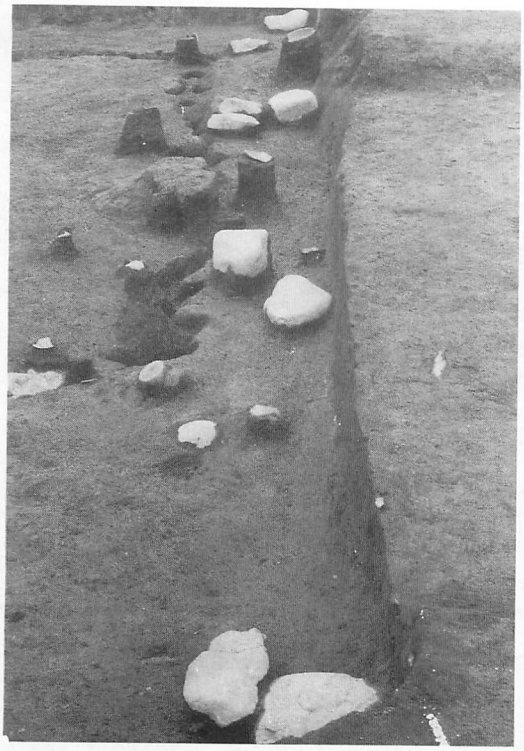
図版4　　3号住居址、4・5号住居址　　1－3号住居址．2－4・5号住居址

1

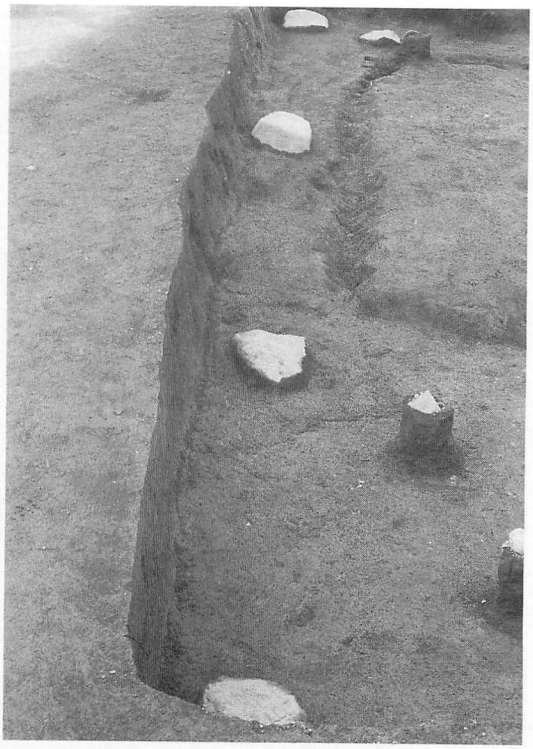
2



3



4



図版５　４号住居址礎石　　１ 南側、２ 東側、３ 北側、４ 西側

1

2

図版6　　7号住居址、8号住居址　　1－7号住居址．2－8号住居址

1

2

図版７　　９号住居址、13号住居址　　１－９号住居址．２－13号住居址

1

2

図版 8　　14号住居址、15号住居址　　1 ―14号住居址．2 ―15号住居址

1

2

図版 9　16号住居址、10号掘立柱建物址　1 ―16号住居址．2 ―10号掘立柱建物址

1

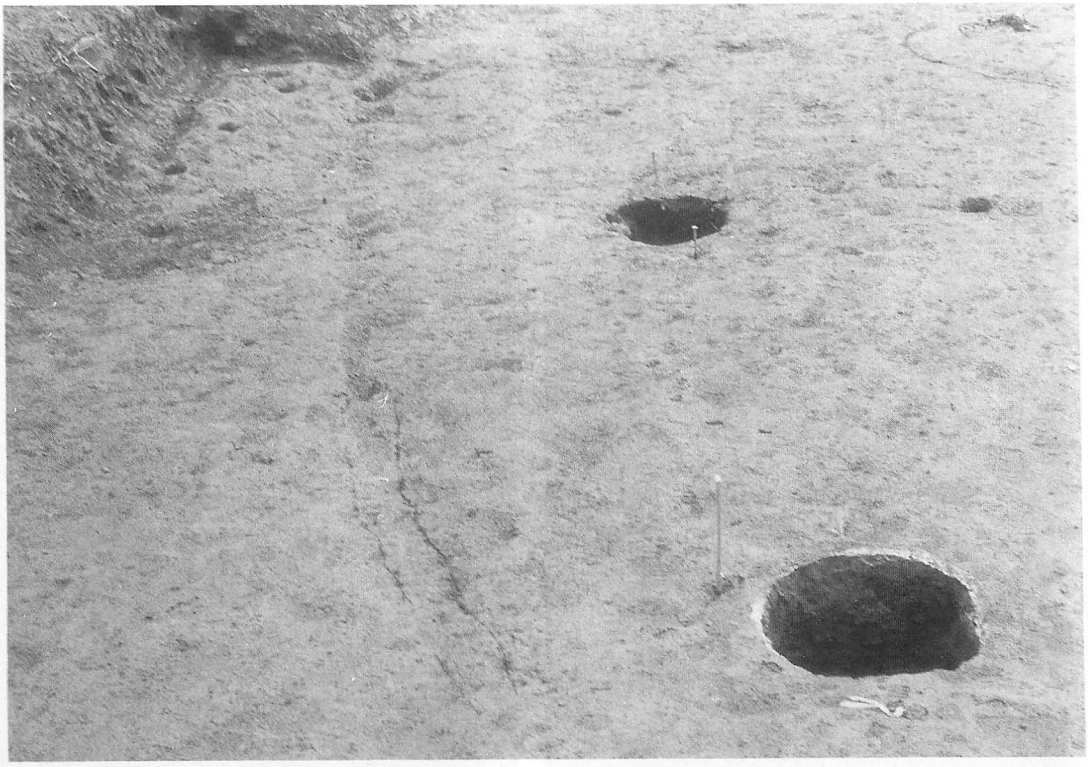
2

図版10　11号掘立柱建物址、18号掘立柱建物址

1 ―11号掘立柱建物址
2 ―18号掘立柱建物址

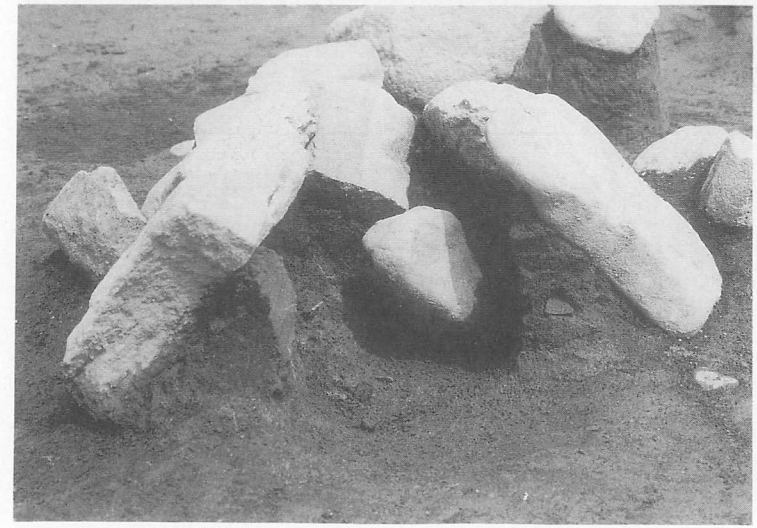
1

2



図版11　18・19・20号ピット他

1 ―18・19・20号ピット
2 ― 7 号住居址東側のピット



図版12　カマド(1)　　1－2号住居址、　2－3・4号住居址．　4－9号住居址

1

2

3

4

図版13　カマド(2)・須恵器出土状態　　1 ―14号住居址、 2 ―15号住居址.　3 ―16号住居址.　4 ― 7 号住居址の須恵器

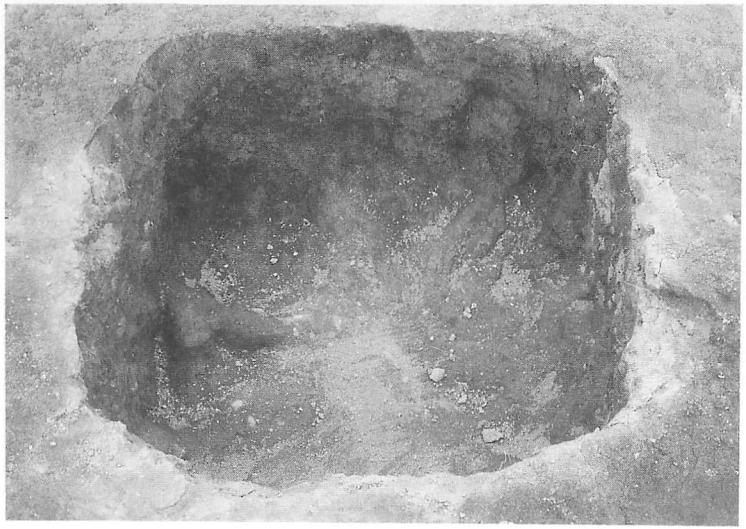
1

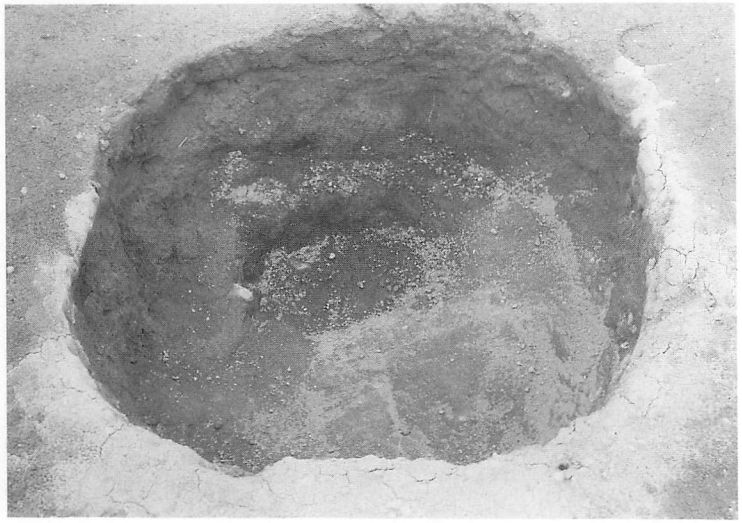
2

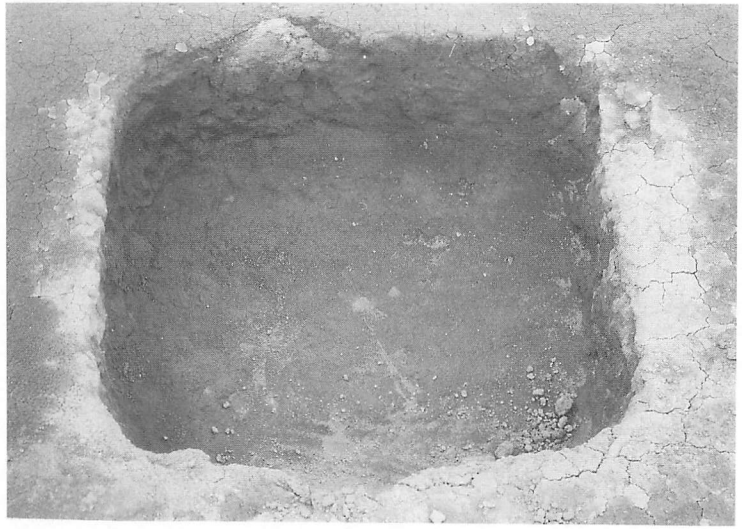
3

4

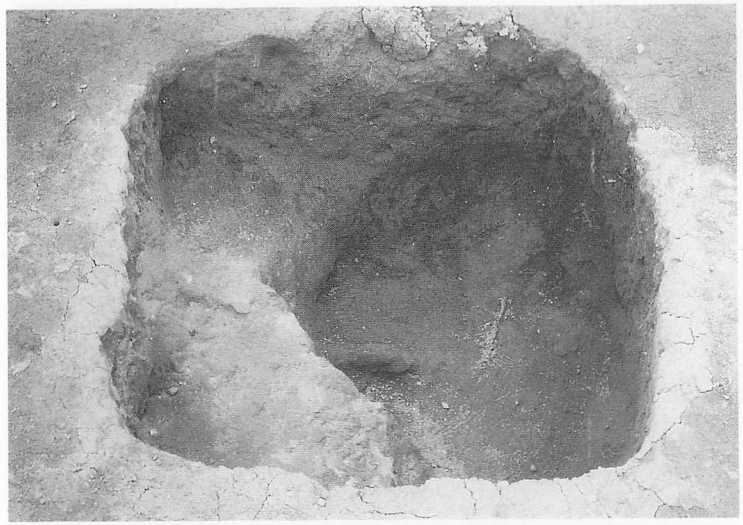
図版14　10号掘立柱建物址柱穴(1)　1－P 23.　2－P 24.　3－P 25.　4－P 26

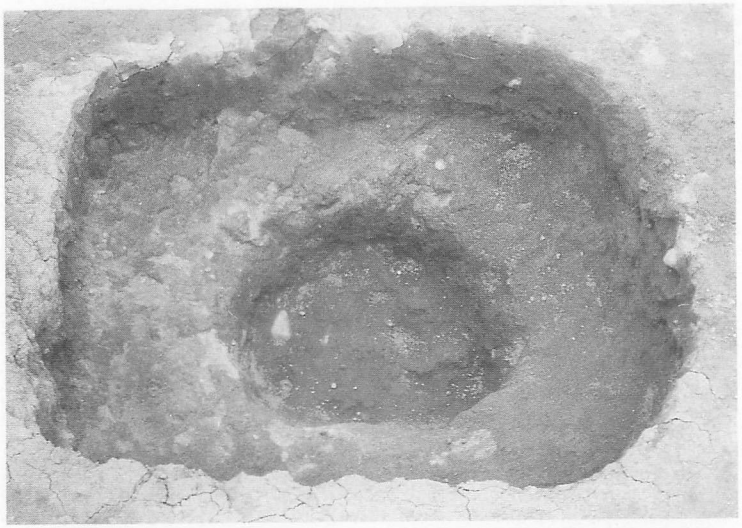




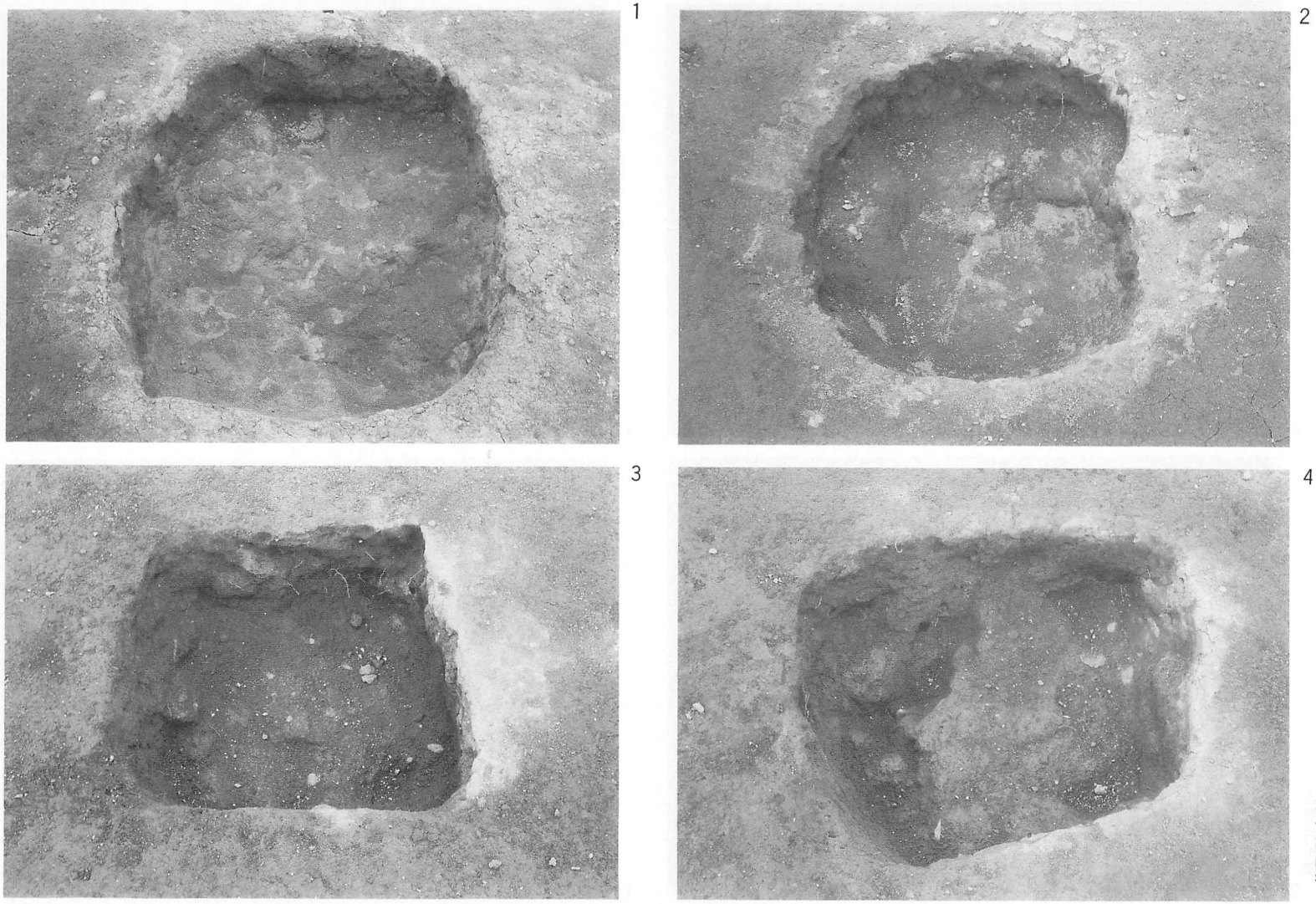


図版15　10号掘立柱建物址柱穴(2)　1－P 31.　2－P 39.　3－P 37.　4－P 36



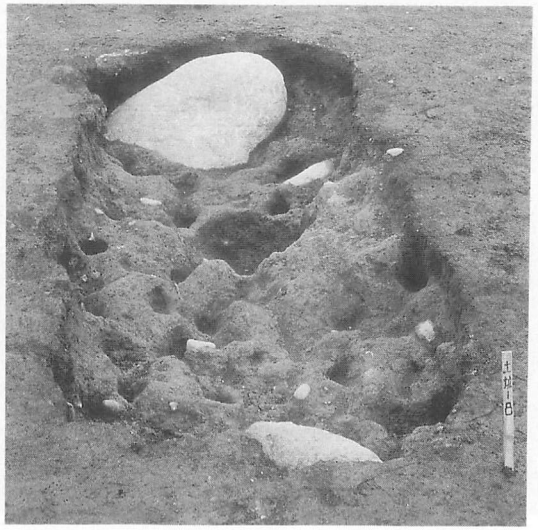


図版16　10・11号掘立柱建物址柱穴　1－P35(10号)．2－P30(10号)．3－P27(11号)．4－P28(11号)



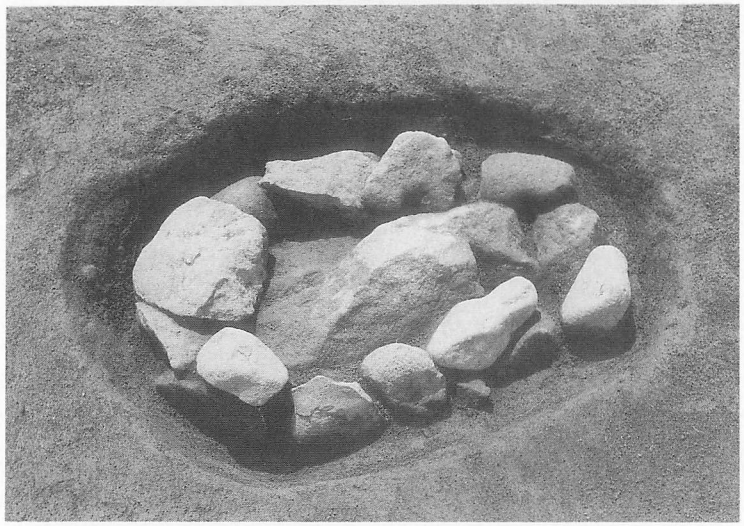
図版17　11号掘立柱建物址柱穴　1－P29.　2－P34.　3－P41.　4－P40

図版18　11号掘立柱建物址・土壙　1－P38.　2－P32.　3－P33.　4－1号土壙

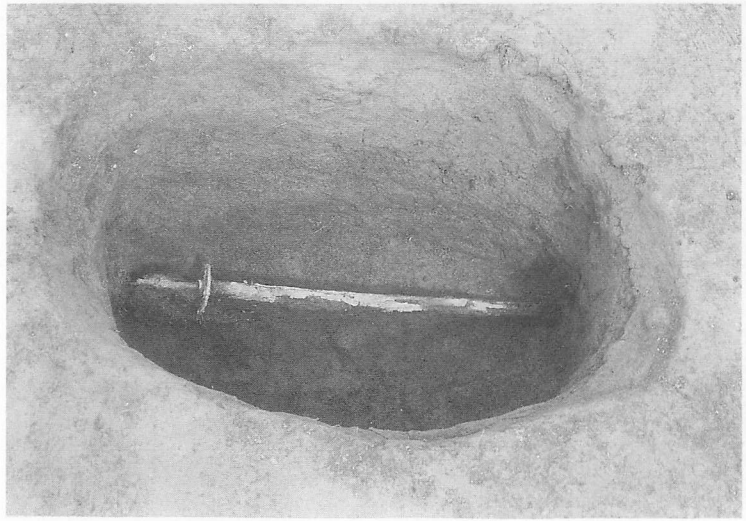


図版19　土壙(1)　1－3号.　2－6号.　3－7号.　4－8号

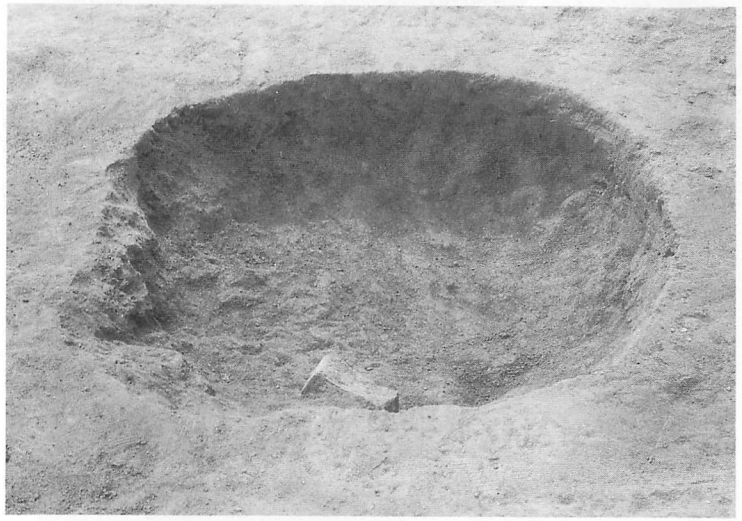
1

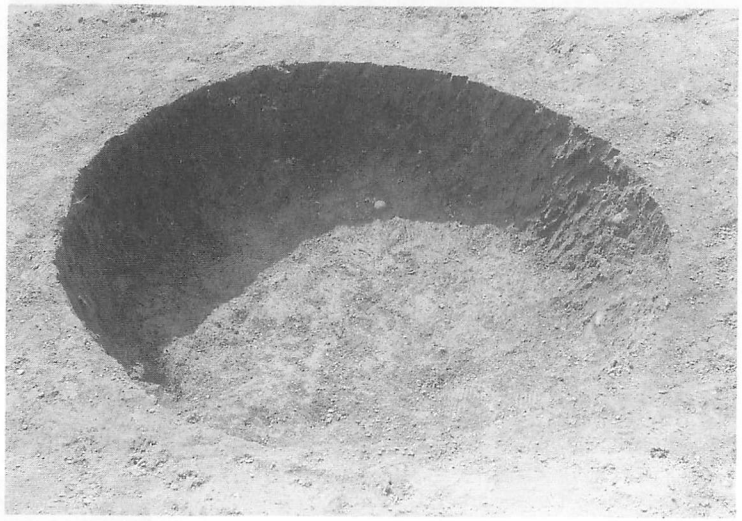

2

3


4

図版20　土壙(2)　1－14号．2－15号．3－18号．4－15号


1

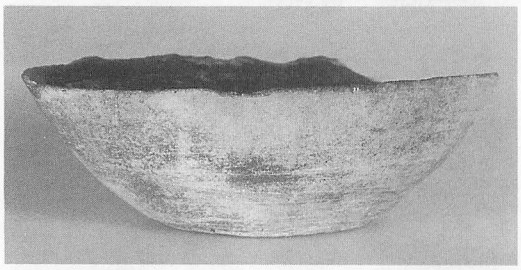

2

3

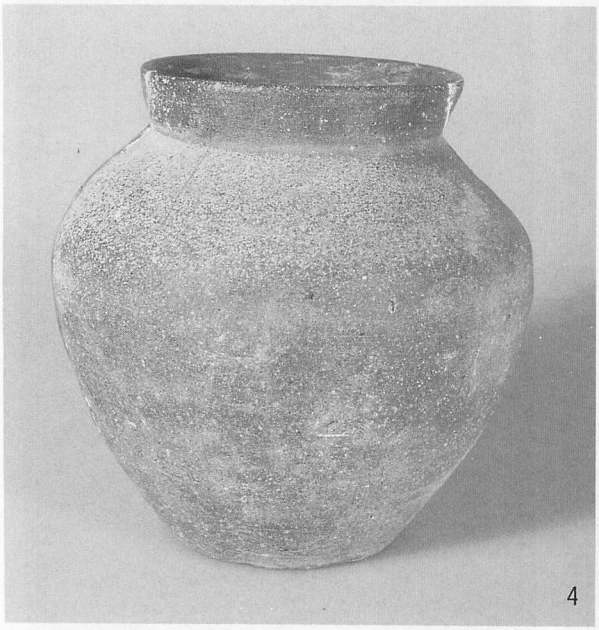
4

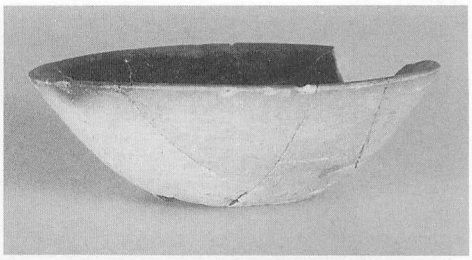
図版21　土壙(3)　発掘参加者　1－19号．　2－20号．　4－発掘参加者

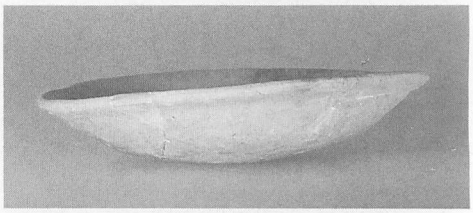
1

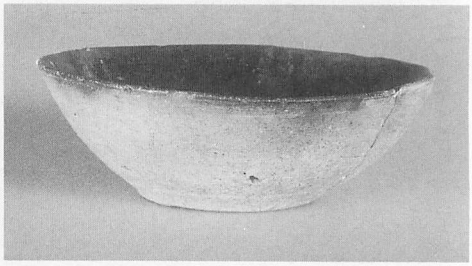

2

3

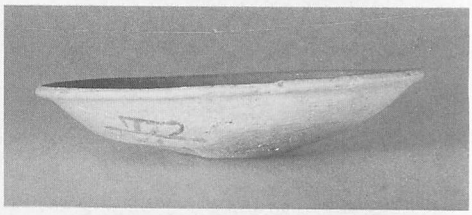

4


5


6


7

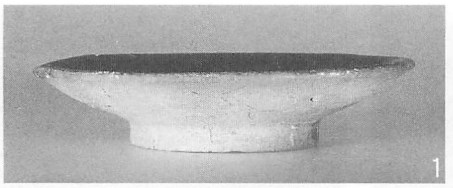
8

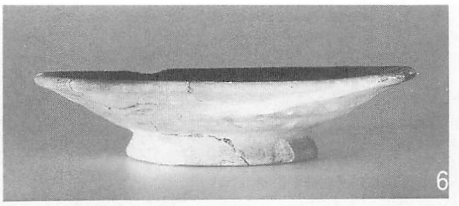

9

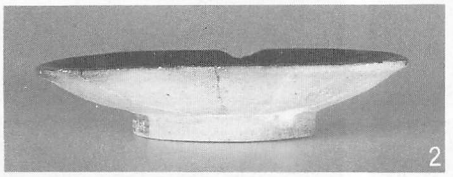
10

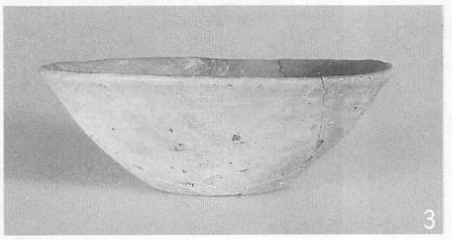
1 SB 2 (7) 3.　2 SB 4 (73) 5
3 SB 4 - 7.　4 SB 7 (15) 5
5 SB 3 (61.63) 1.　6 SB 4 - 3
7 SB 4 (76.42).　8 SB 5 (35) 2
9 SB 5 (15) 3.　10 SB 3 (21) 2

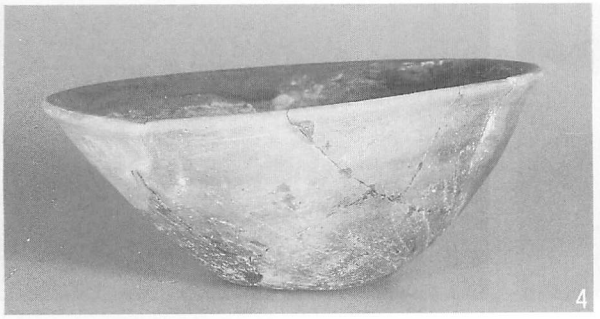
図版22　住居址出土遺物(1)

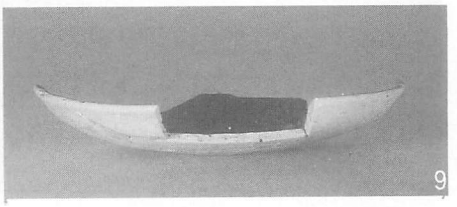


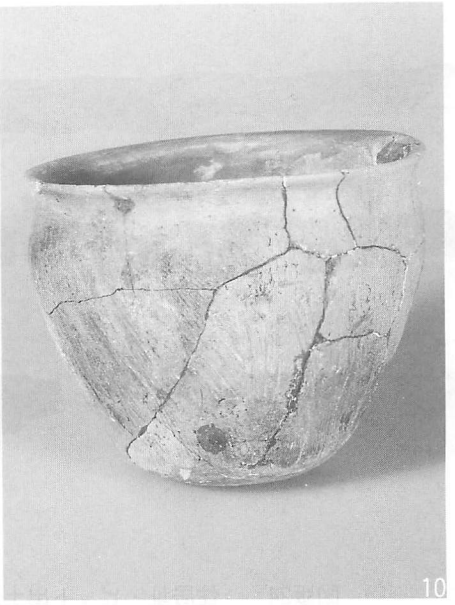






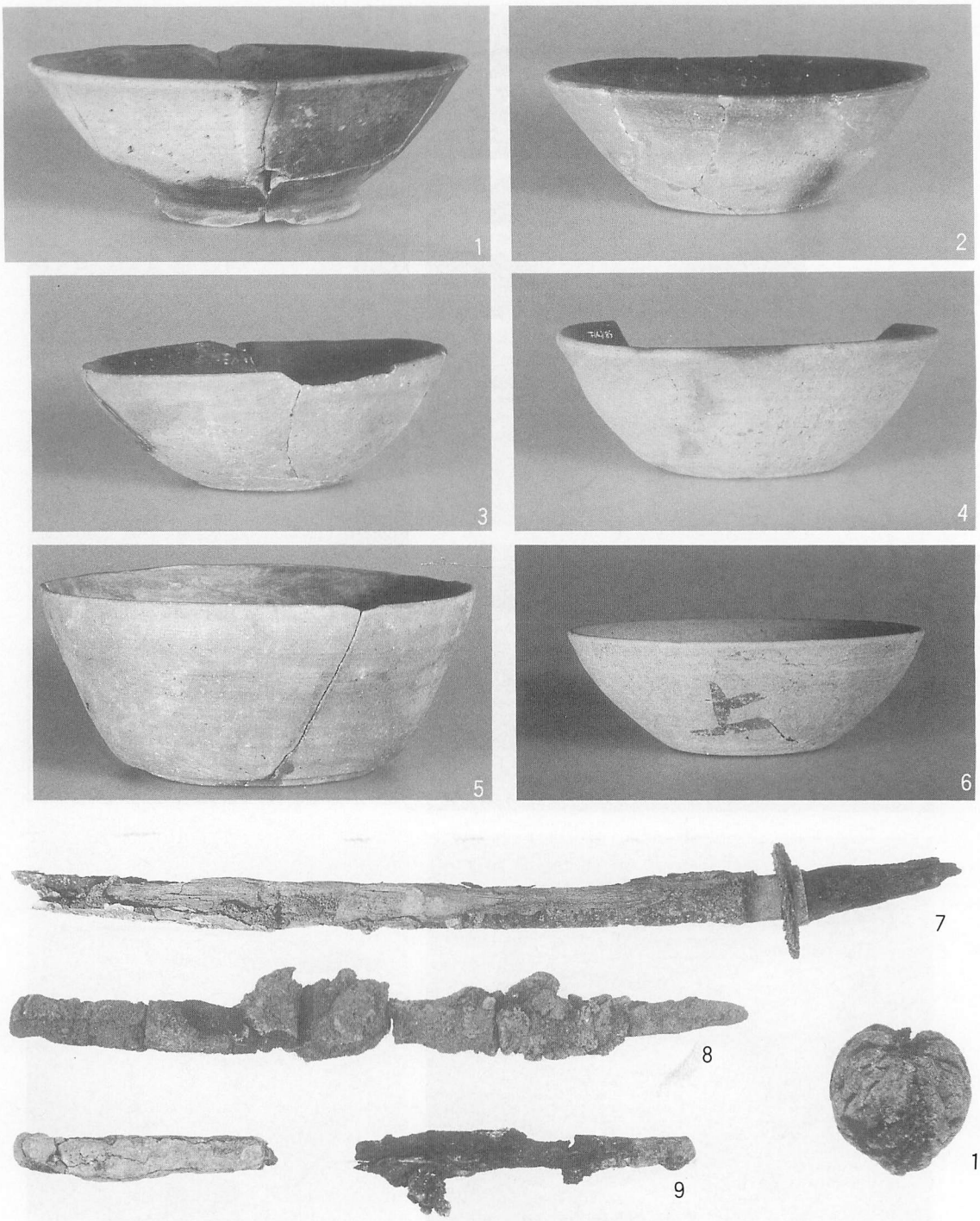






図版23　住居址出土遺物(2)

1 17号遺構(4)3.　2 17号遺構-7
3 17号遺構-11.　4 SB12(2.12)
5 SB14(9)6.　6 SB8（カマド1内)
7 SB13(4).　8 SB13(7)
9 SB14-3.　10 SB14(23)7



1 SB15-11(3). 2 SB15-4(13.15)
3 SB15-カマド7 4 SB15-1
5 SB16-(2) 6 ピット14
7 土壙15 8 SB14
9 10 SB14（桃）

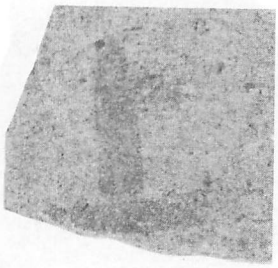
図版24　住居址・ピット出土遺物

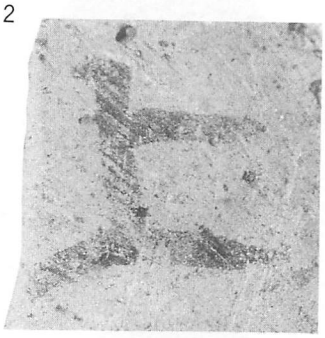
1

2

3

4


5


6

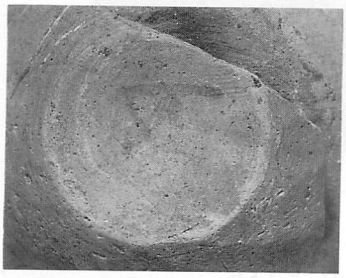
7

8

9

10

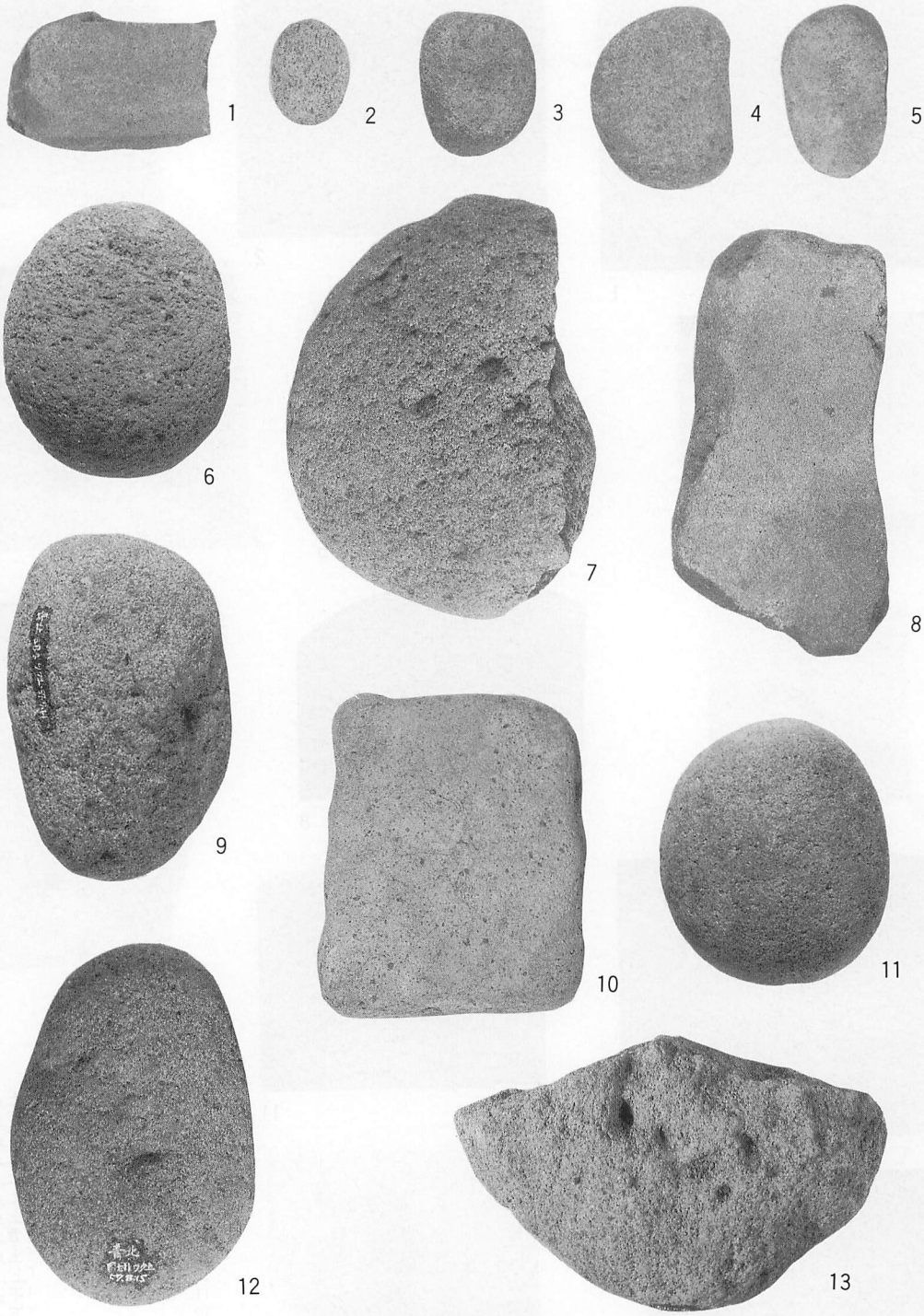
11


12

13

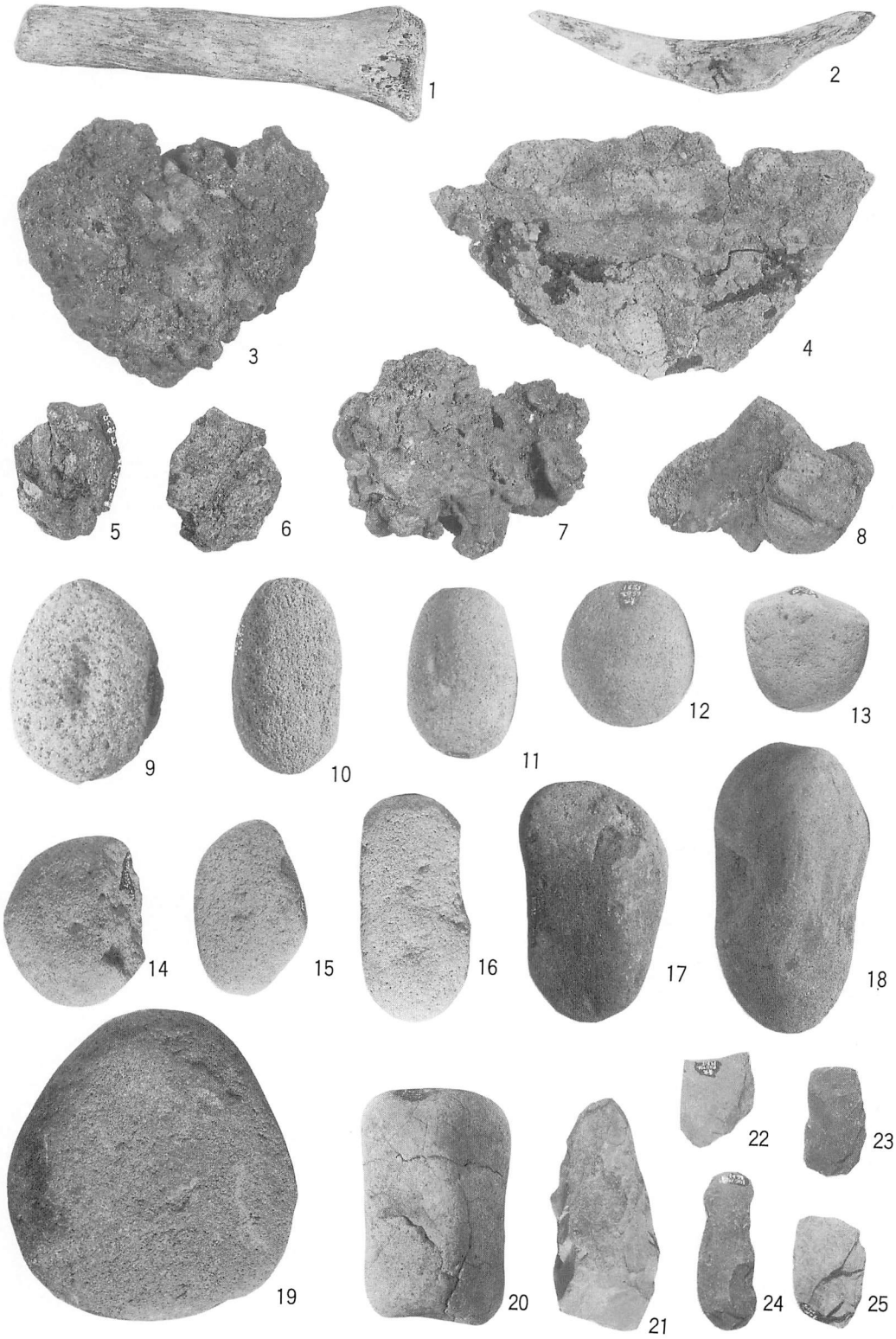
1．SB３-１．61.63　「上」
2．SB３-２（21）　「下」
3．SB４-11（58）　「下」か
4．SB４-６（14）　「上」
5．SB４-５（77）　「上」
6．SB４-１（61.63）「上」
7．SB４-４（74）　「上」
8．SB５-３（15）　「男」
9．SB７-２　「上」
10．Pit14-８　「上」
11．SB14-４　「不」か
12．　「下」か
13．　「上」か

図版25　墨書土器



1．SB15（砧石）　2～5．SB15
6．SB15（カマド内）　7．SB 3
8．SB 3（砧石）　9．SB 4
10．SB 7　11．SB 5（カマド内）
12．ピット11　13．ピット45

図版26　石器(1)



図版27　石器(2)　1．2．SB７（骨）　3．8．SB４（鉄滓）　4．SB４（鋤先）
5．6．SB15（鉄滓）　7．SB９（鉄滓）　9～25表土・遺構包含層

II　梅の木遺跡

Ⅱ　梅の木遺跡発掘調査報告書

目　　次

例言
第１章　発掘調査の原因とその経過 …… 93
　第１節　原因 …… 93
　第２節　経過 …… 93
第２章　位置と環境 …… 94
　第１節　位置 …… 94
　第２節　自然環境 …… 95
　第３節　歴史的環境 …… 95
第３章　縄文時代の住居址と出土遺物 …… 96
　第１節　住居址 …… 96
　第２節　遺物 …… 101
第４章　結び …… 101

挿　図　目　次

第１図　梅の木遺跡全体図
第２図　梅の木遺跡付近図
第３図　梅の木遺跡住居址平面図(A)
第４図　梅の木遺跡住居址平面図(B)
第５図　梅の木遺跡住居址出土土器実測図
第６図　梅の木遺跡出土土器拓影
第７図　梅の木遺跡住居址出土石器実測図(1)
第８図　梅の木遺跡住居址出土石器実測図(2)

図　版　目　次

図版１　梅の木遺跡近影・住居址
図版２　梅の木遺跡出土土器・石器(1)
図版３　梅の木遺跡出土土器・石器(2)
図版４　梅の木遺跡出土土器(1)
図版５　梅の木遺跡出土土器(2)
図版６　梅の木遺跡出土土器(3)
図版７　梅の木遺跡出土土器(4)

例　　言

1．図面には次の略記号を使用した。P―ピット　土―土器

2．遺構平面図に記載した遺物番号の遺物と出土遺物実測図（　）内番号のものとは同一遺物である。

3．この発掘調査は文化庁の補助金と農林省の委託金を受けて実施した。

4．発掘調査と整理参加者は次のとおりである。（順不同　敬称略）

清水茂子　下条松枝　清水あずま　小林あさよ　清水　薫　宮沢まさみ　竜沢みち子　榎本　勝
木之瀬久司　渡辺征子（整理）　名取洋子（整理）

5．発掘調査および執筆は山梨県埋蔵文化財センター森　和敏と現高根町教育委員会職員の雨宮正樹氏が、整理・編集は森が担当した。

6．出土した遺物、図面や写真等の記録類は埋蔵文化財センターが保管している。

Ⅱ 梅 の 木 遺 跡

第1章 発掘調査の原因と経過

この調査は1978年度から八ヶ岳東南麓で、圃場整備事業に伴って進められた一連の発掘調査で、梅の木遺跡は工事の事前に行われた分布調査で新たに発見された遺跡である。

なお発掘に至る経過は、前掲の「青木北遺跡」の報告を参照されたい。

第1節 原　　因

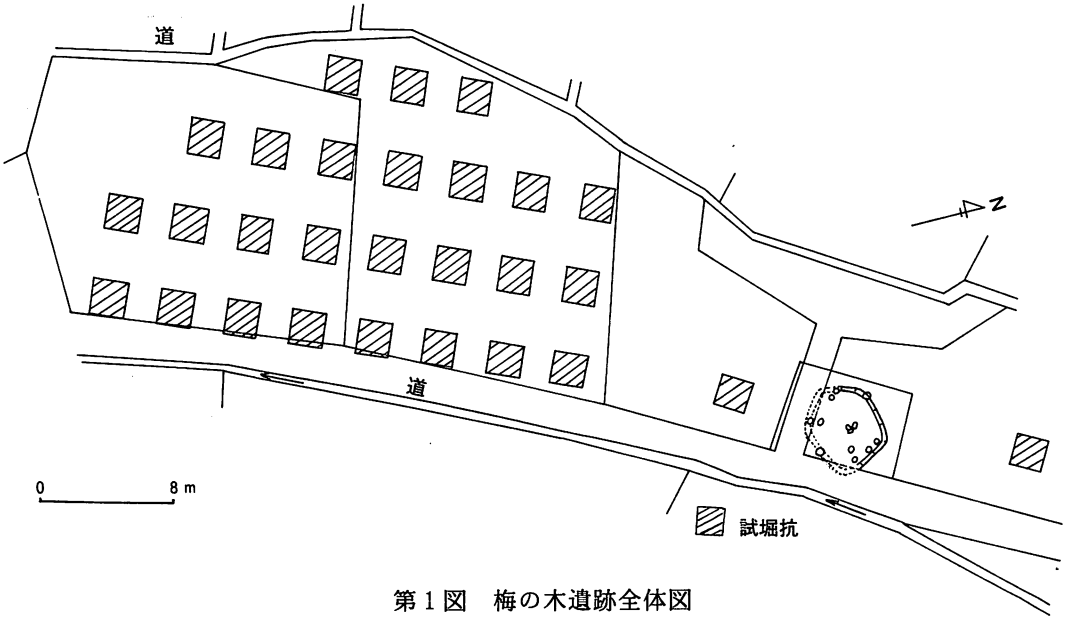
昭和57年度県営圃場整備事業の事前に行った発掘調査である。

第2節 経　　過

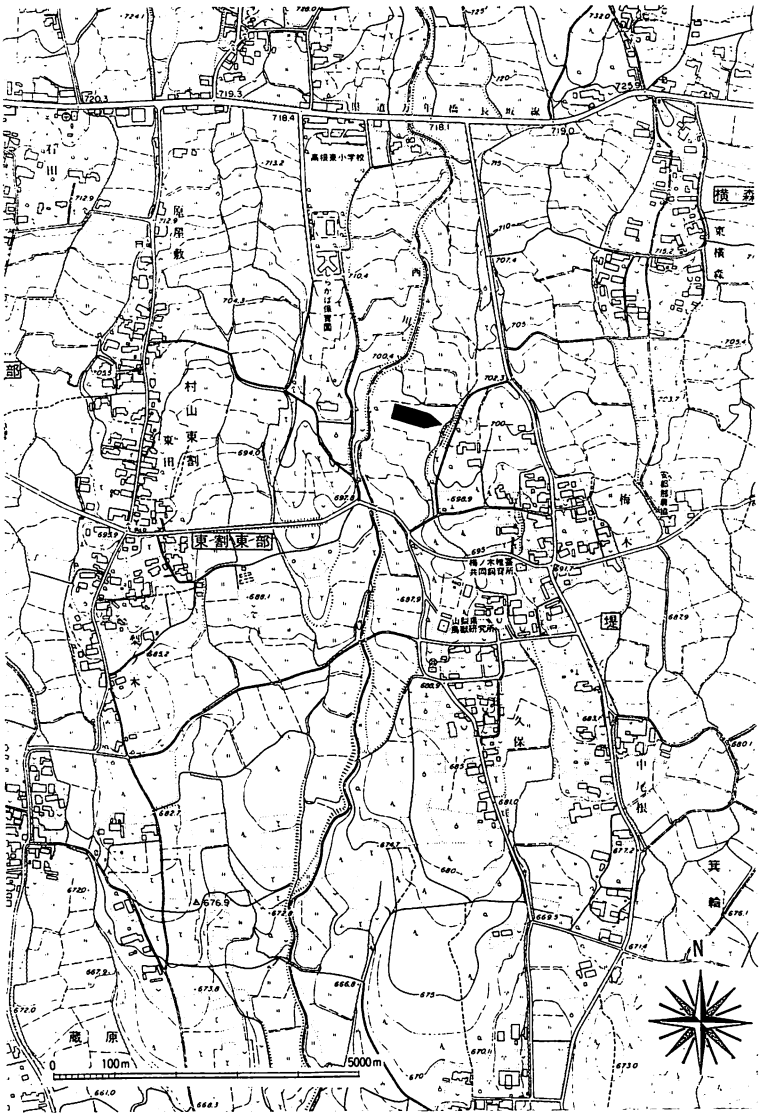
発掘調査期間は1982年6月4日から同月22日までであった。発掘対象面積は約1,300㎡である。

5月21日にグリッドを設定するために杭打ちを行い、6月4日から試掘を開始した。試掘は第1図のように29カ所に2m×2mのグリッドを設定して行った。4日に住居址の覆土を、11日に床面を検出し、17日に遺構の実測をして、22日に遺構の写真を撮影して終了した。

整理は調査終了後、逐次進めていたが、本格的整理は平成2年度に行った。発掘担当者の雨宮正樹氏は調査終了後、高根町教育委員会に1983年7月から勤務されたために、整理と執筆は主に森があたった。



第1図　梅の木遺跡全体図



第2図　梅の木遺跡付近図（$\frac{1}{5,000}$）

第2章　位置と環境

第1節　位　　置

梅の木遺跡は北巨摩郡高根町箕輪字梅の木136番地の2とその周囲にある。

この遺跡は八ヶ岳東南麓の標高700mの地点に位置し、高根町役場から南東へ約1,800m、同町立東小学校から南（下）へ約500mに位置し、梅の木集落の北西に接する畑の中にあった。八ヶ岳は最高峰の赤岳（2,899m）を中心に標高2,000m以上の火山の連山で、その広大な裾野は山梨県と長野県にまたがって広がっている。梅の木遺跡はその南東の裾部に所在する。

第2節　自然環境

八ヶ岳東南麓の気候は表日本型のうち中央高原型に属し、内陸気候で本県の中では小雨冷涼区に入る。冬は寒さが厳しく、夏は日中が暑く、気温の偏差が大きい。空気は乾燥し降雨量は少なく晴天が多い。風は寒候期には北西の季節風が強く、暖候期には南南東が主風となる。昼夜の気温、湿度の変化が大きく一般に激しい気候である。この遺跡付近においては、気温は年平均10℃、1月の平均は0℃で最低は－6℃、8月の平均は24℃で最高は28℃である。降水量は年間1,200㎜、9月は160㎜であり、最深積雪は48㎜で、本県では最も降水量の少ない地帯(註1)である。日本の縄文時代中期は現在より2℃～4℃気温が温かいといわれているので、八ヶ岳東南麓でも現在よりはるかに温暖であったと考えられる。

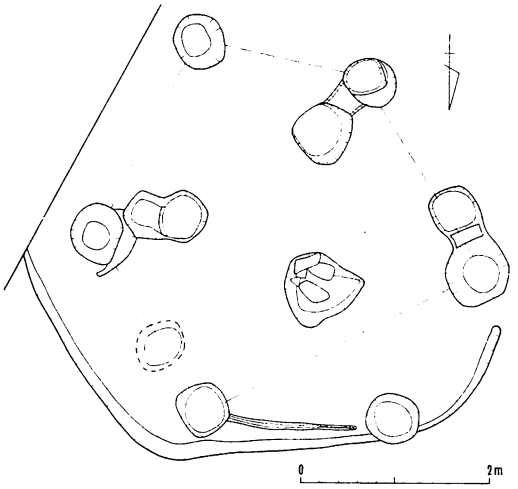
八ヶ岳山麓の表層は火山泥流で覆われていて、ここにいく筋もの谷が上から下に向かって走り、台地を形成している。多くの台地の上はローム層で覆われていて、縄文時代の遺跡はこの上に構築されている。梅の木遺跡も台地西端にあって、住居址はハードローム層を掘り込んで構築されているが、表土が浅くなっていて、住居址は農耕によって約3分の1が破壊されていた。この遺跡がある台地の東には広い谷があり、さらにその東には国道141号線が走る箕輪、中村集落などがある台地がある。また西側にも幅100mくらいの谷があり、その向こうには広い台地がある。

第3節　歴史的環境

西側の広い大地には、梅の木遺跡と同時期の縄文時代中期中葉を主とする遺物と弥生時代末葉の土器が散布している雲雀沢辺成遺跡がある。雲雀沢辺成遺跡における縄文時代の遺物散布は濃密で、その範囲は約60,000㎡（南北300m、東西200m）(註2)である。町内には約80カ所の遺跡があって、その多くは縄文時代中期の遺跡で、広さは2,000㎡から6,000㎡くらいであるので、雲雀沢辺成遺跡はこの中では最も広い部類である。高根町教育委員会では前期末葉の諸磯B式土器、中期中葉の新道式土器、井戸尻式土器を表面採集しているが、以前は高根東小学校にはここから採集した中期全般にわたる形式の土器を保管していた。これらの遺跡は500mから1,000mおきくらいに分布しており、梅の木遺跡と雲雀沢辺成遺跡とは約100mしか離れていないので、特に近くにあるといえる。また、東に隣接する堤・堤上遺跡では中期の井戸尻式土器を採集している。

一方梅の木遺跡における縄文時代の遺物散布範囲は、町内(ちょうない)遺跡分布調査報告書によると、比較的広いとされているが、現地を踏査したところ、実際は狭いようで、しかも遺物の散布は極めて希薄であった。

以上のようなことを考慮すると、梅の木遺跡と雲雀沢辺成遺跡とは不可分の関係にあって、後述するように梅の木遺跡の住居址は特殊な用途・目的で建てられ、しかも長期間にわたって使用されていた可能性がある。



第3図　梅の木遺跡住居址平面図(A)（$\frac{1}{80}$）

第3章　縄文時代の住居址と出土遺物

今回の発掘調査で検出した遺構は縄文時代中期前半の竪穴住居址1軒だけであった。

第1節　住居址

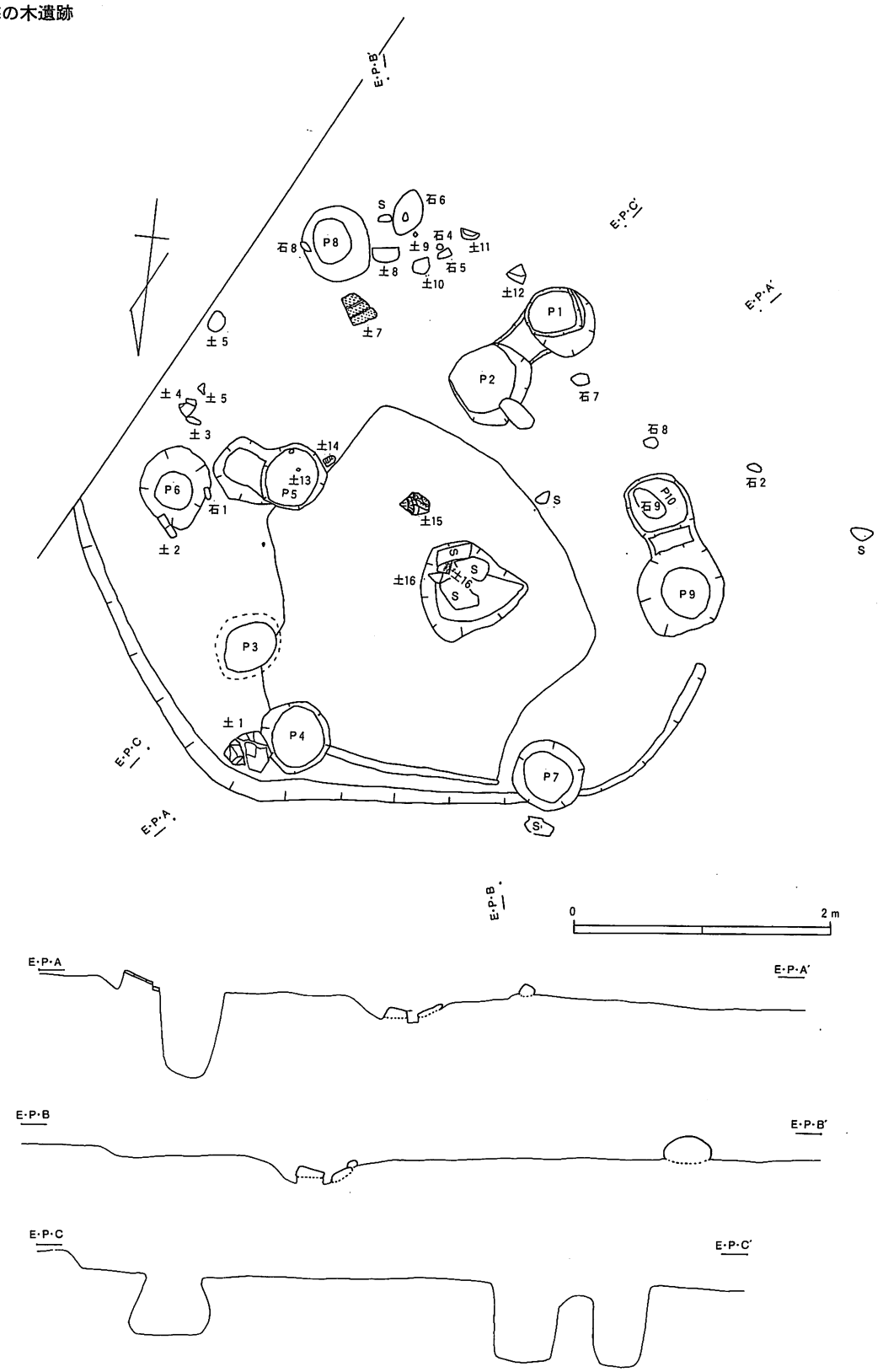
第3図に示した竪穴住居址の検出状況は次のようである。

住居址の壁は3分の1強しか検出できなかった。その東側は道路の下にあって発掘範囲外となり、南側から西側にかけては農耕によって削平されていた。床面も削平されたと思われる部分が多く、残存していた床面は中央から北側の一部分であった。しかし柱穴や貯蔵穴と思われるピットはよく残っており、また住居址の南側部分はわずかしか削平されていなかったと思われる。残存している壁は柱穴の付近で60°くらい曲がり、柱穴と柱穴との間は直線であるから住居址の平面プランは多角形であろう。炉址は中央よりやや北寄りにあり、石囲い炉に使ったと思われる石が3個あった。その中の焼土はわずかにあっただけで、しかも浅かった。周囲には床面があり、炉址の北側は非常に硬かった。北側のピット7とピット4の間には壁に沿って溝が掘ってあったが他では検出できなかった。

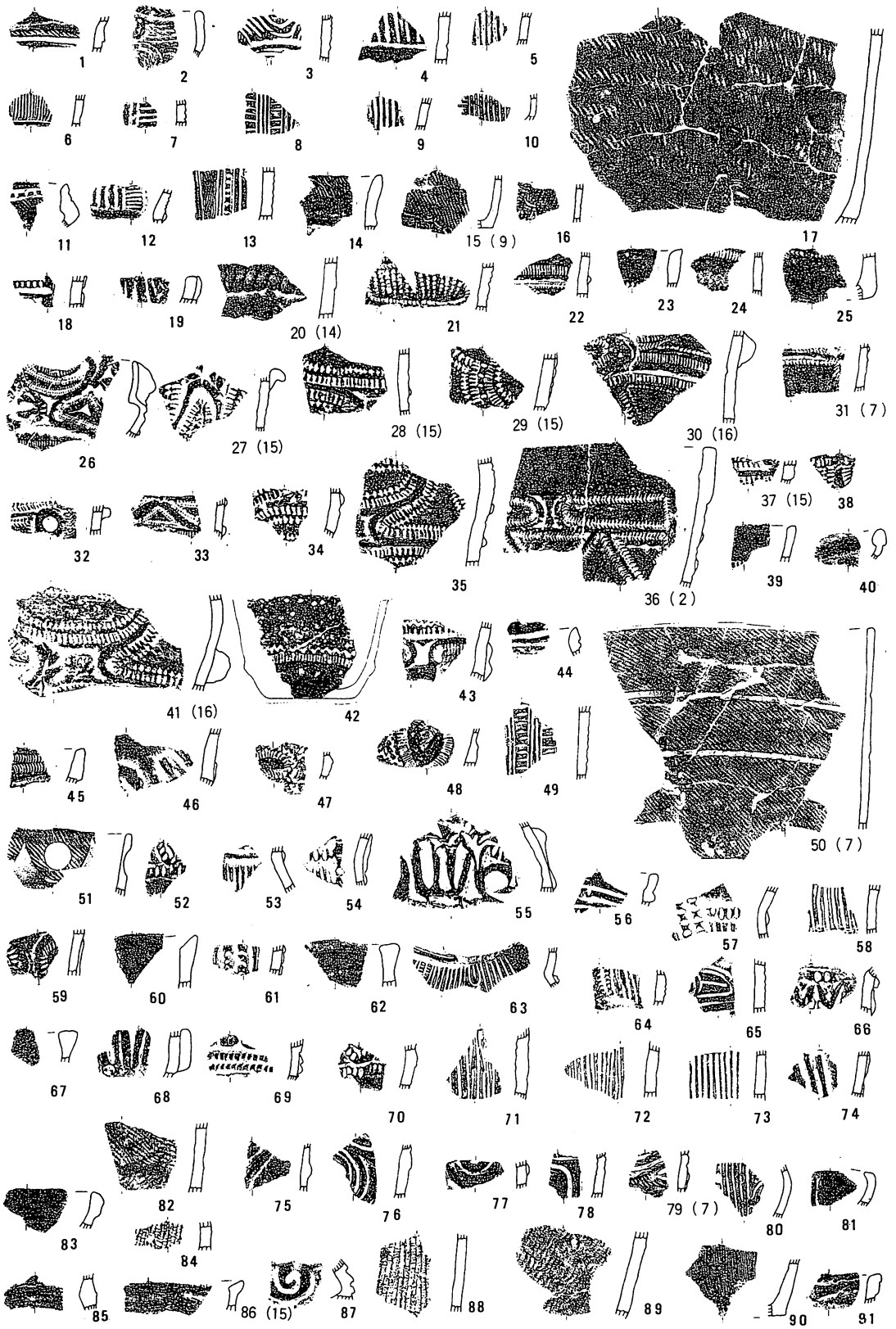
以上のように検出した遺構に基づいて、住居址の平面上の構造を考えてみたい。

住居址のプランは前期末から中期初頭にかけて、円形か多角形が主流となり、5本の主柱は5角形、6本の主柱は6角形になると考えられている。(註4) 主柱穴はそれぞれ対応する柱穴を、炉址を中心として、放射状に連結することによって決めることができるという。(註5) 甲府盆地では、主柱穴は新道期には5～6基で、プランは楕円形であるが、藤内期には主柱穴は5～7本と増加する傾向にあり、井戸尻期には6本が主流となり、プランは藤内期を経て、井戸尻期には円形になると考えられている。(註6)

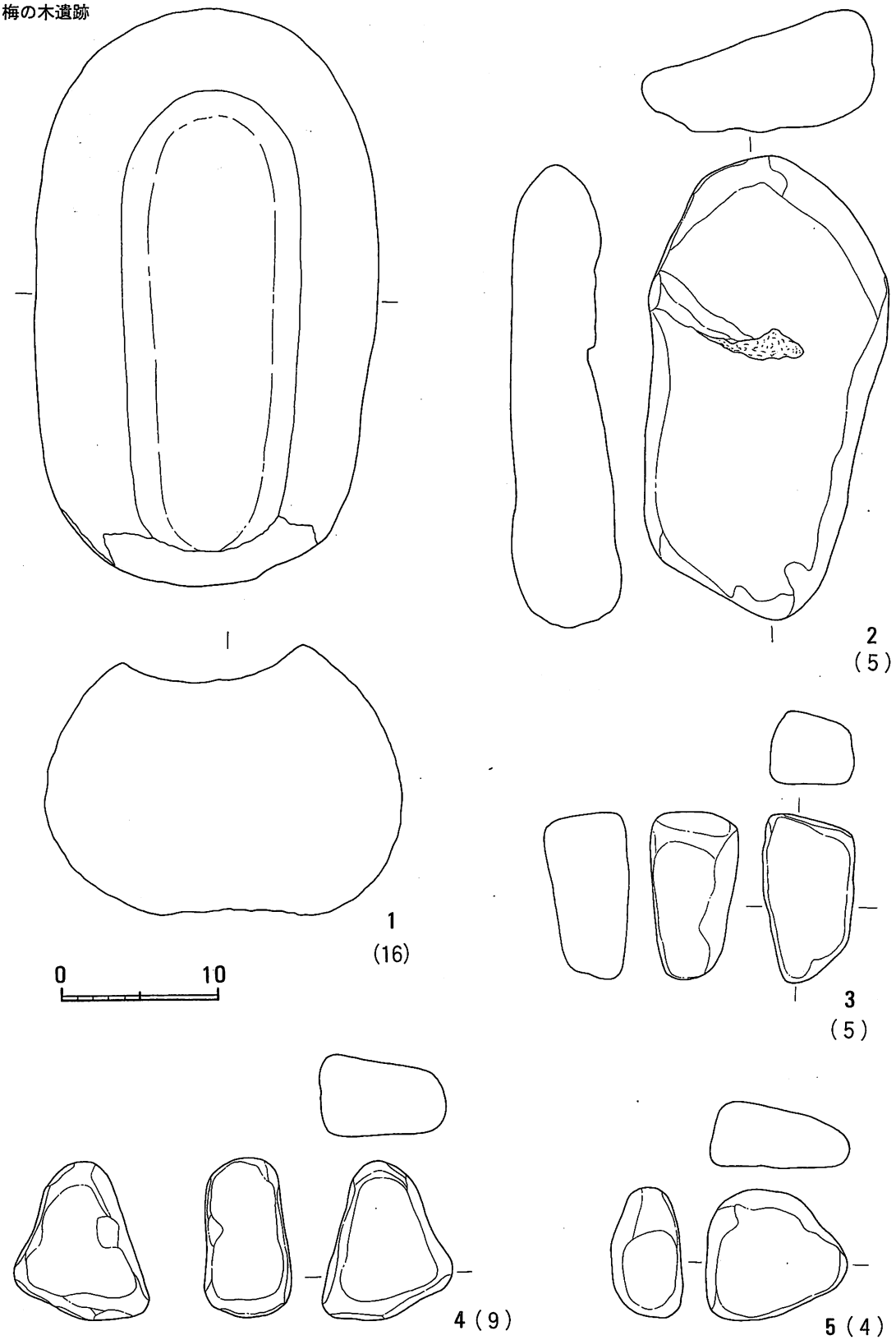
本住居址の主柱穴を放射状に連結すると、ピット7と炉址とピット8を結ぶ線が中軸線となり、残る4基の内ピット1はピット4と、ピット6はピット10とそれぞれ結ぶことができ、炉址



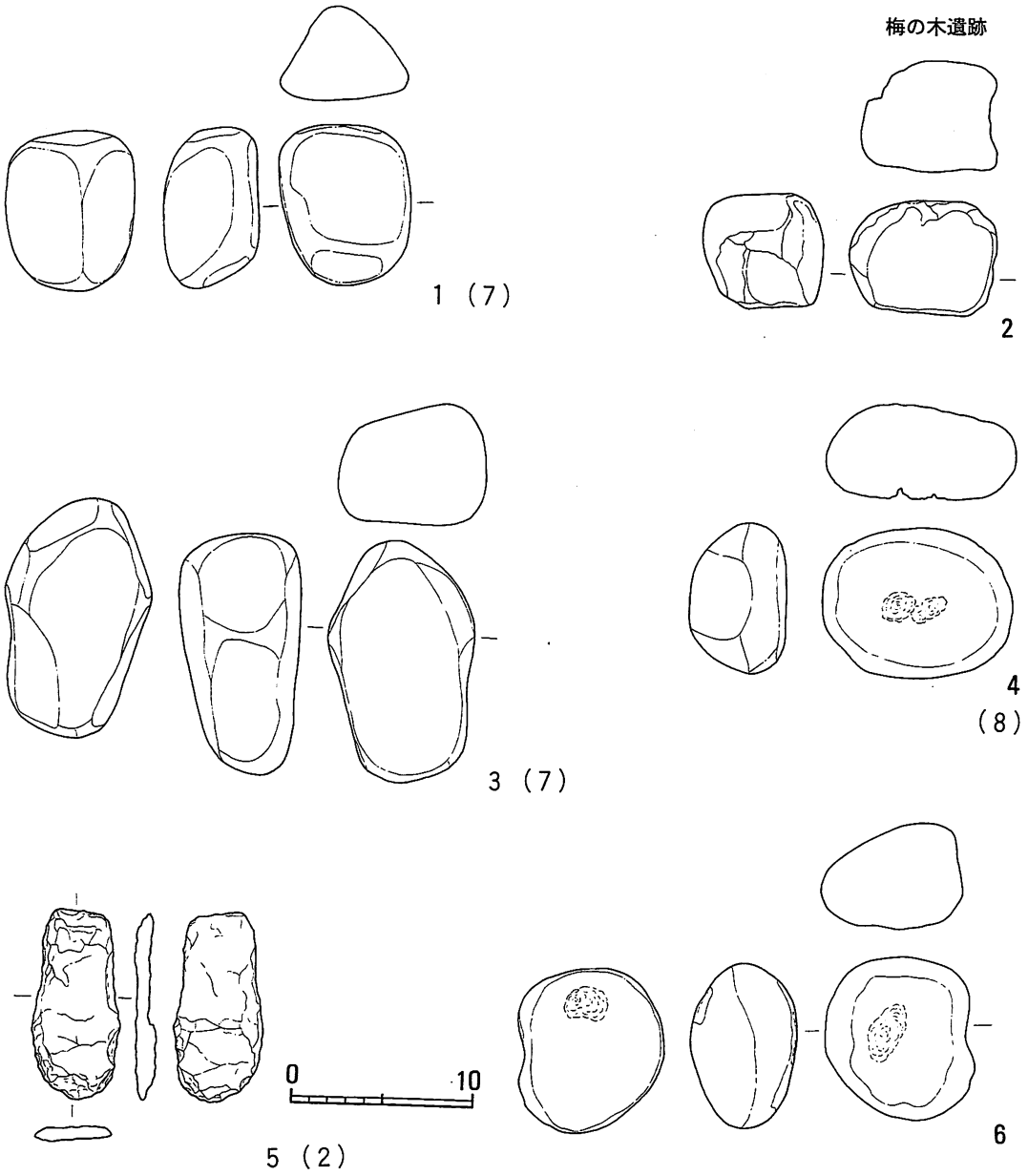
第4図　梅の木遺跡・住居址平面図(B)



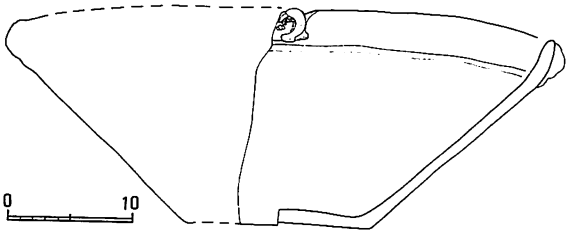
第５図　梅の木遺跡出土土器拓影（⅓）



第6図　梅の木遺跡住居址出土石器実測図1（¼）



第７図　梅の木遺跡住居址出土石器実測図２（¼）



第８図　梅の木遺跡住居址出土土器実測図（⅙）（８、10、11）

の南側で、住居址の中央に交点ができるので、以上の6のピットが主柱穴となると考えられる。また中軸線の左右は対称となり、住居址のプランは6角形となる。ピット3はフラスコ状であるから貯蔵穴であると考えられる。残るピット2はピット1と、ピット5はピット6とそれぞれテラス状の掘込みで結ばれている。これらの深さはピット1が66㎝、ピット2は62㎝、ピット6は35㎝、ピット5は70㎝で、ピット6以外はほぼ同じ深さで、またピットの上場の直径も60㎝～50㎝でほぼ同じであるから、ピット2とピット5も柱穴と考えられることができる。この2基も柱穴とすればピット6とピット1をそれぞれ結んで、上屋構造のためにたてた柱ではなく、間仕切りのようなものを設けるために立てたのではないだろうか。

プランは6角形だとすれば、南北が20～30㎝長いが、ほぼ正6角形を呈するとみることができる。

第2節　遺　　物

土器および石器が出土した。第6図に示したように、土器は長い期間にわたる形式が連続して出土しており、縄文時代前期末の諸磯式（1，2）、中期の五領ケ台式（3～19）、狢沢式（20～22）、新道式（23～41）、藤内式（42～49）、井戸尻式（50～70）、曽利式（71～77）の各形式がある。また78、79は後期初頭の称名寺式並行期のものであろうか。出土量は多くはないが、新道式期～井戸尻式期のものが主流を占めている。この内新道式期のものは床面直上から出土したものが多いので、住居址はこの時期に構築されたのであろう。石器は石皿、石斧、凹石やたたき石等が出土し、石皿は完形の優品である。遺物は住居址の南西隅から西側にかけて多く出土した。石皿も南西隅で、皿部を下にして、床面直上から出土したことは注意すべきことであろう。

第4章　結　　び

縄文時代中期初頭に構築されたと考えられる住居址1軒を検出した。その平面形は6角形と思われる。出土した土器は前期末の諸磯式期から中期末の曽利式後半までの期間のものが主で、中でも中期前半の新道式期と藤内式期前半の土器が多い。この住居址の周辺全体で遺物分布調査をしたところ、ほとんど発見できないので、この遺跡は集落ではなく、1軒が単独にあった可能性がある。西側の台地上にある雲雀沢辺成遺跡と関係した特殊な目的をもって建てられた住居址ではないであろうか。この住居址が台地の西縁辺にあるのもこの遺跡との関係を想定させる。

なお、弥生時代後期末葉の土器の小片が発掘地域に若干散布していたが、遺構は検出されなかった。

（註1）　『山梨県の気象』　甲府地方気象台　1970

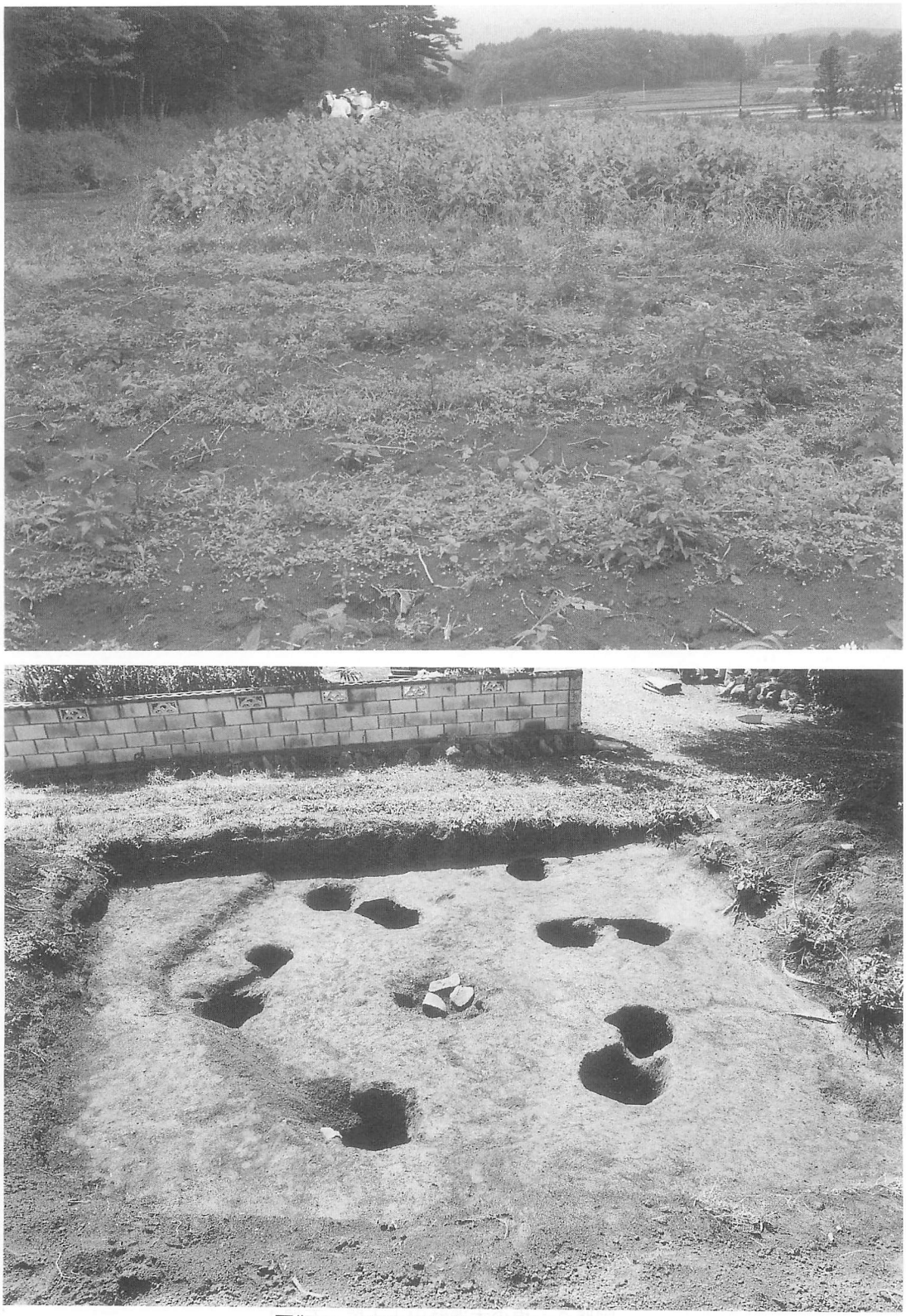
（註2）　『町内遺跡分布調査報告』　高根町教育委員会　1987

（註3）　（註2）に同じ

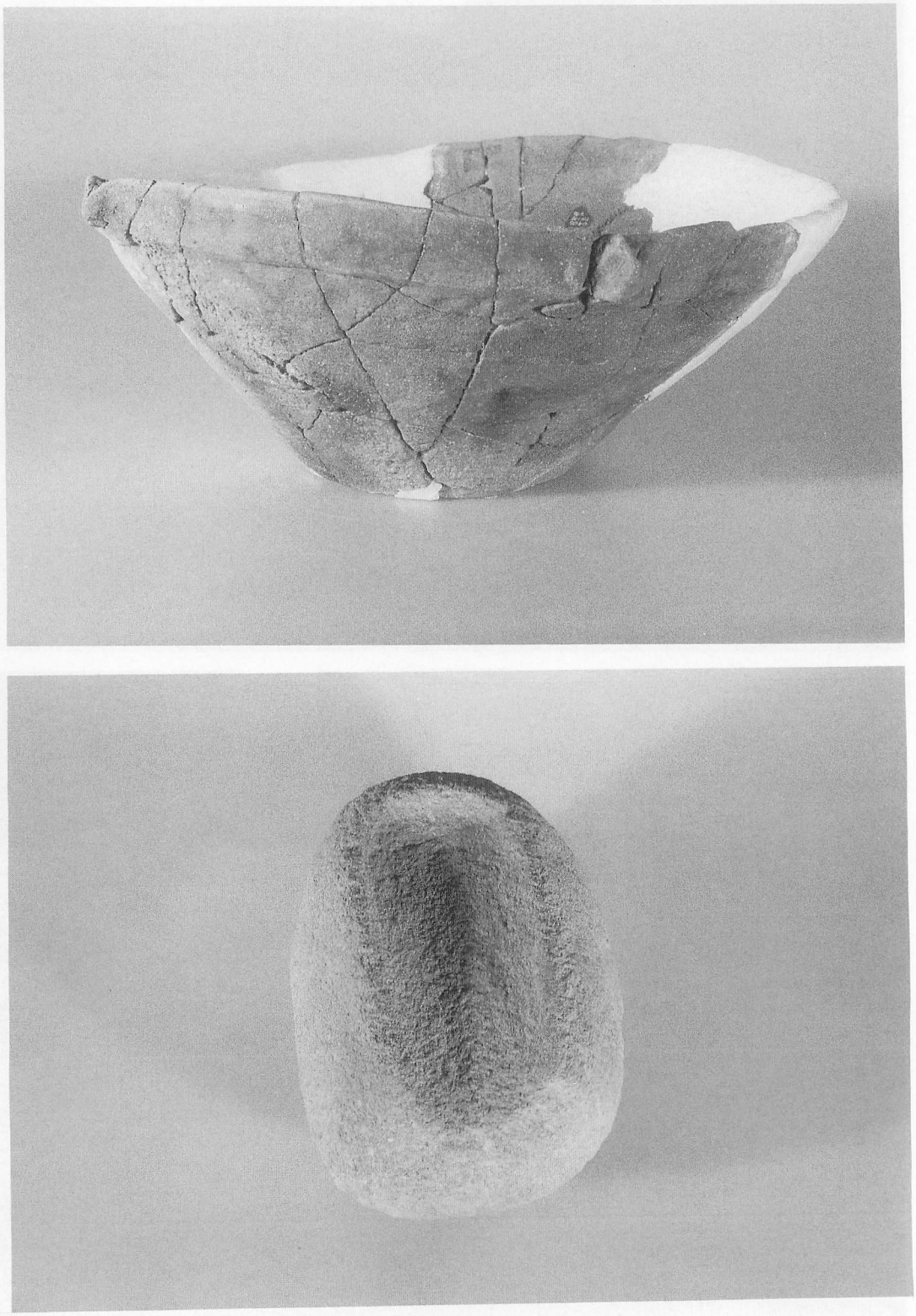
（註４）　『文化財論叢』「関東地方の縄文時代竪穴住居址の変遷」
宮本長二郎　奈良国立文化財研究所編　1982

（註５）　『日本考古学論集』２　「竪穴住居址と柱穴位置と規模について」
渋谷文雄　1986

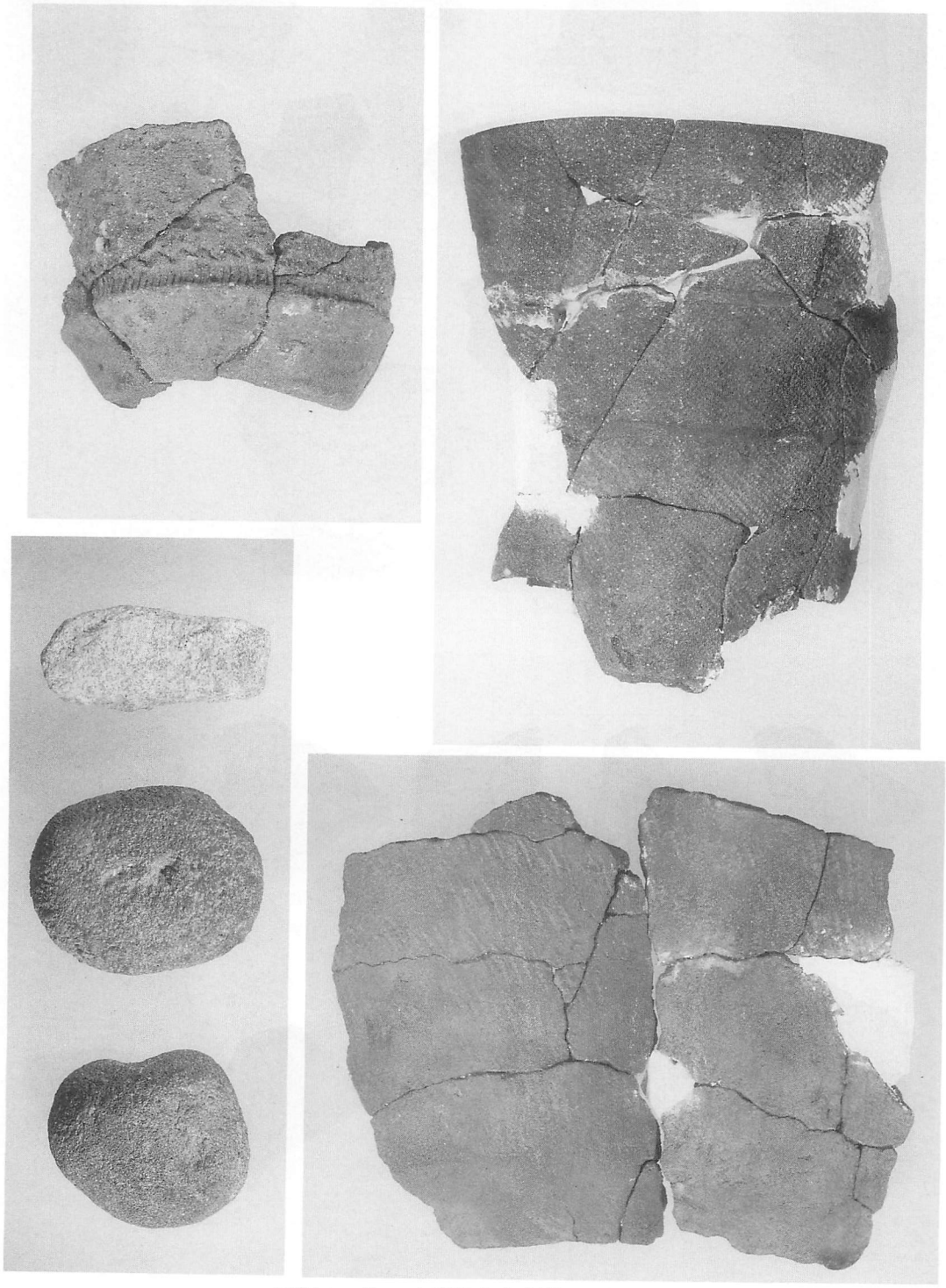
（註６）　『山梨考古学論集』Ⅱ「縄文時代の住居形態と集落」
櫛原功一　1989　山梨県考古学協会編



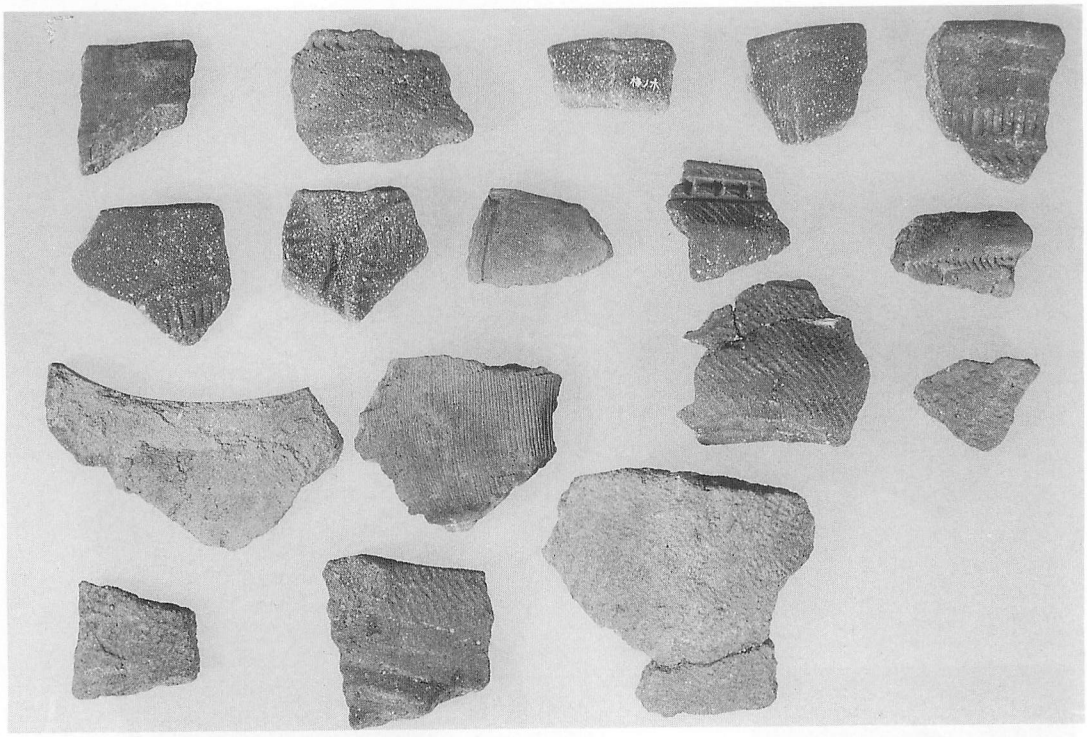
図版１　梅の木遺跡近景・住居址

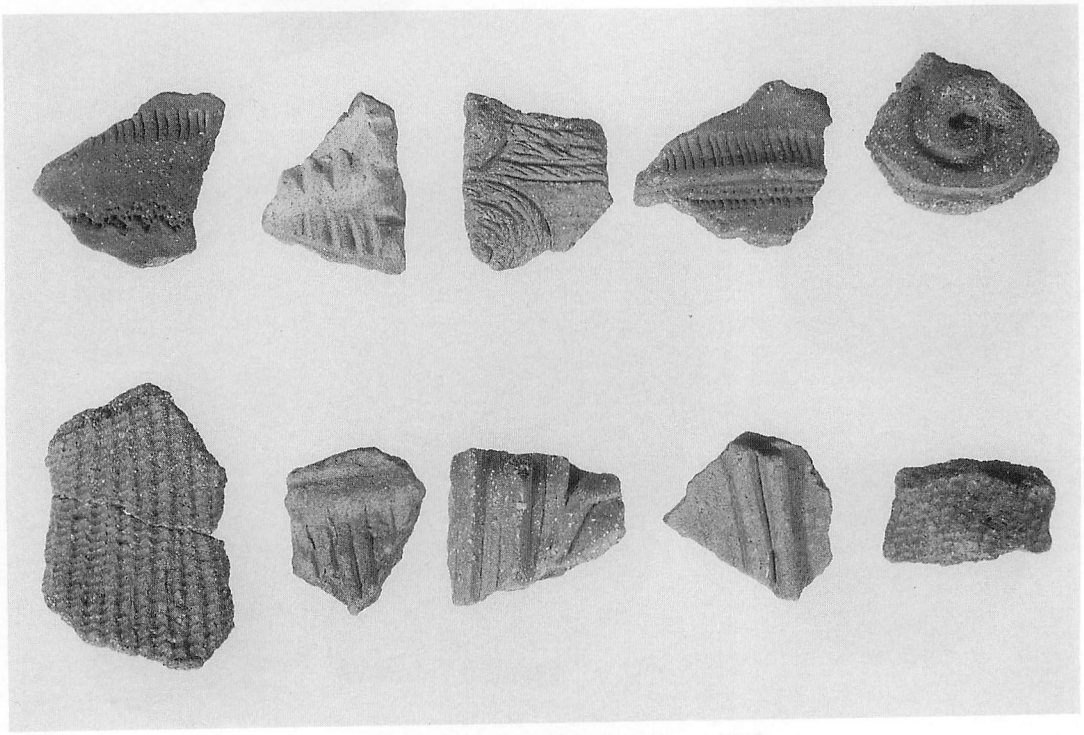


図版２　梅の木遺跡出土土器・石器１

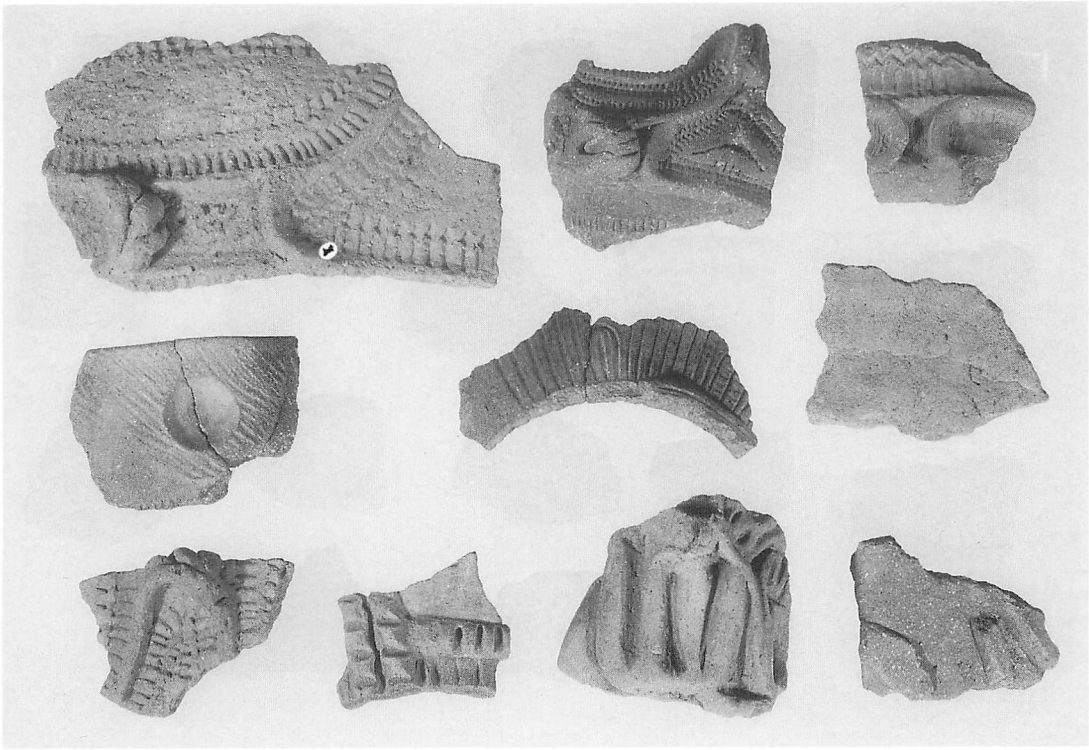


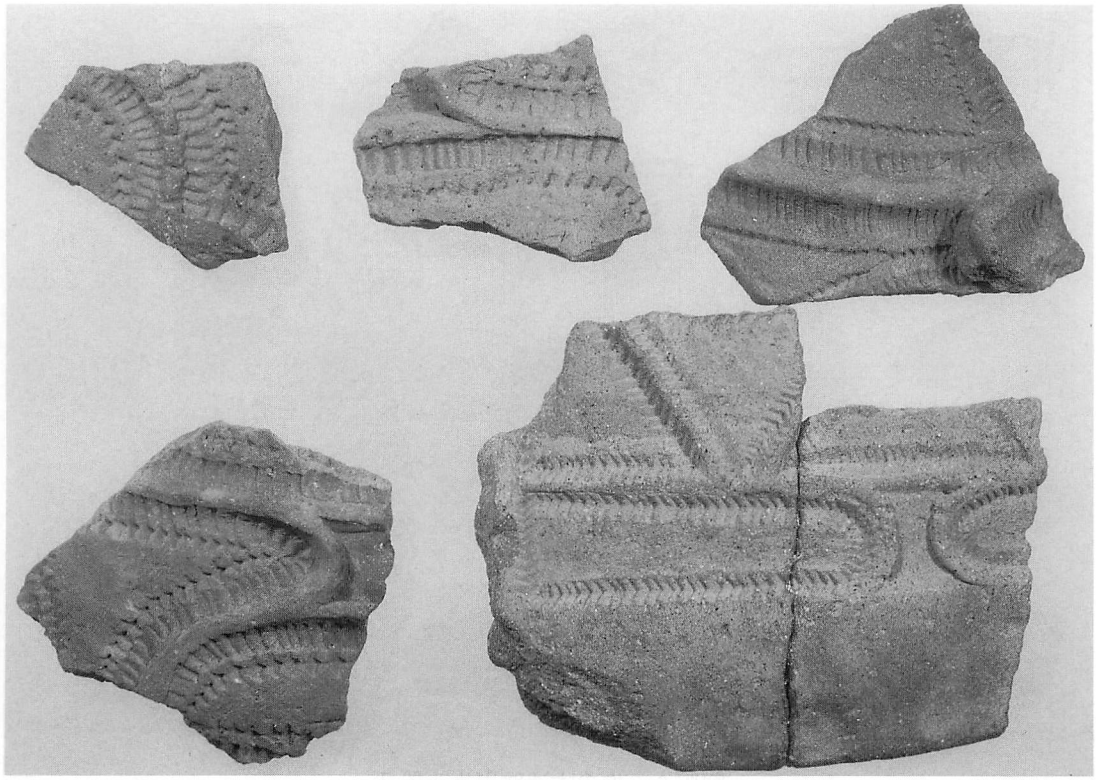
図版 3　梅の木遺跡出土土器・石器 2



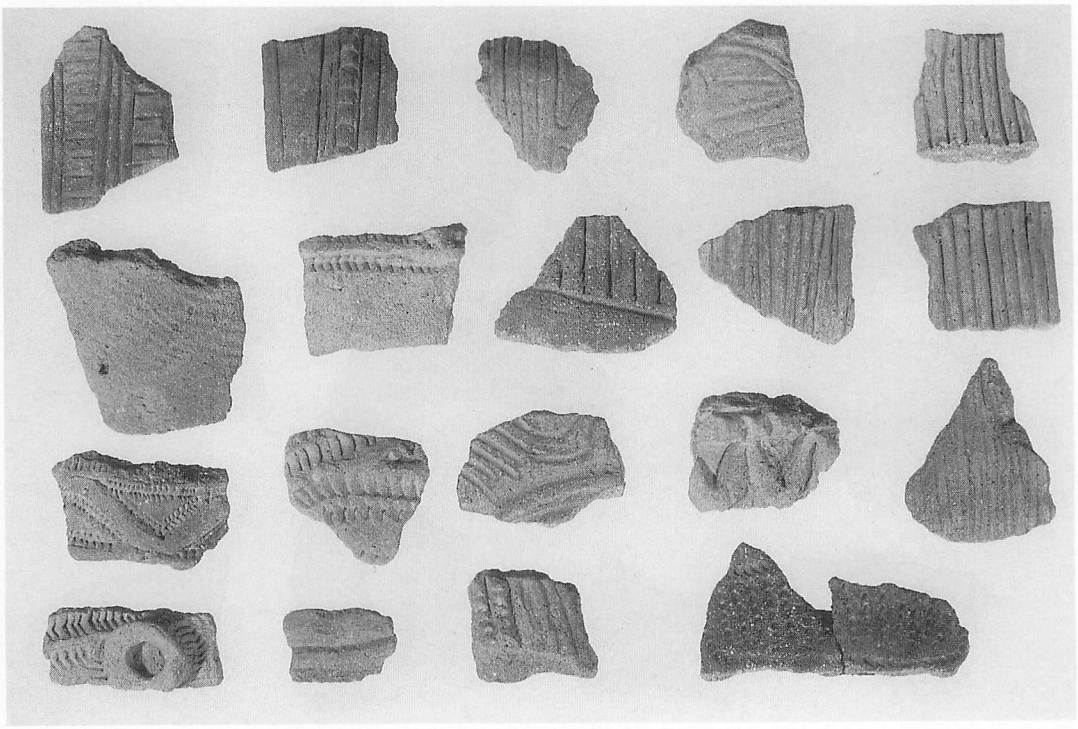


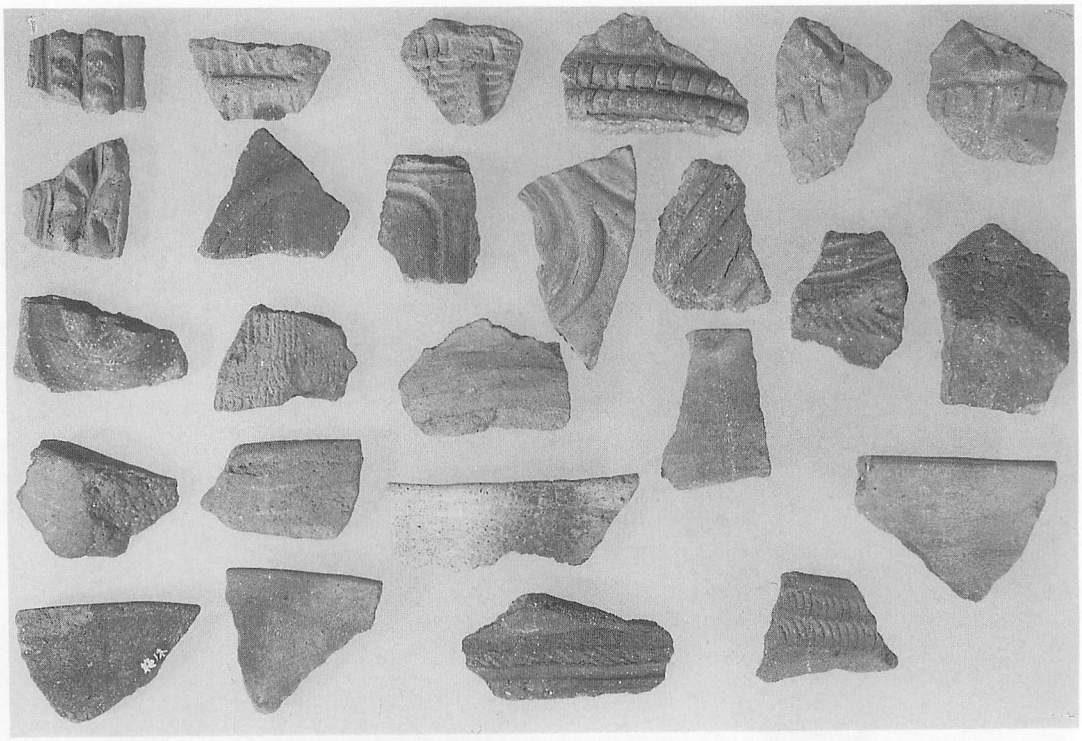
図版 4　梅の木遺跡出土土器 1



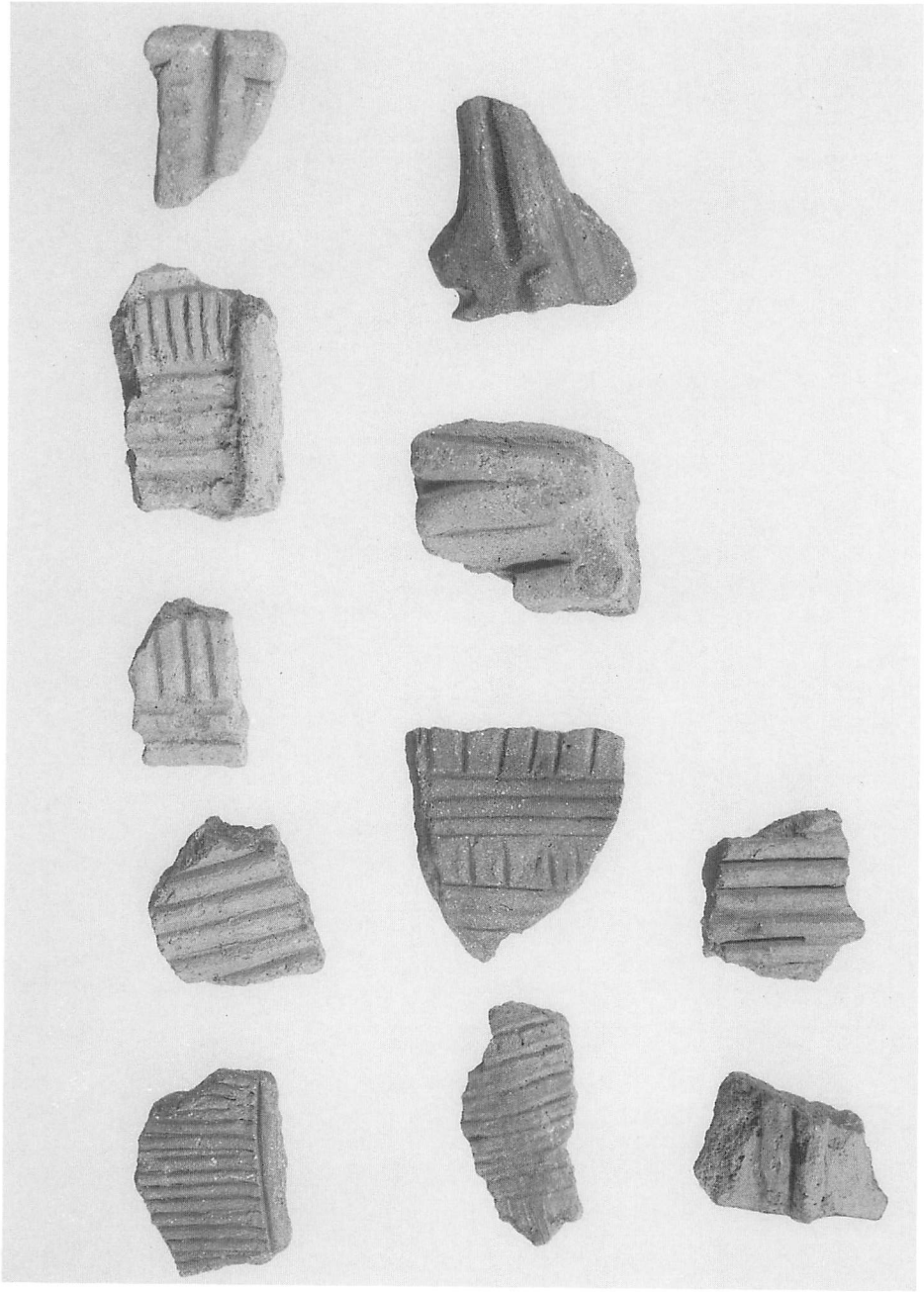


図版 5　梅の木遺跡出土土器 2





図版 6　梅の木遺跡出土土器 3



図版７　梅の木遺跡出土土器４

山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第66集

青木北遺跡
梅の木遺跡

― 県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書 ―

発行所　山梨県教育委員会
編　集　山梨県埋蔵文化財センター
山梨県東八代郡中道町下曽根923
電話　0552（66）3881
印刷日　1992年　3 月 4 日
発行日　1992年　3 月 9 日
印刷所　㈲　ヨ ネ ヤ 印 刷